

2022年度

# 授業科目要綱（シラバス）

## 言語聴覚学専攻

学校法人高知学園  
高知リハビリテーション専門職大学



目 次(言語聴覚学専攻)

ページ	授業科目名	科目区分		
1	心理学	基礎科目	人間の探求	
2	教育学			
3	生命倫理		社会の探求	
4	コミュニケーション論			
5	社会学			
6	リーダーシップ論		探求の地域	
7	国際関係論			
8	地域課題研究Ⅰ		自然の探求	
9	地域課題研究Ⅱ			
10	生物学			
11	数学			
12	物理学			
13	統計学			
14	情報処理演習Ⅰ		探求の健康	
15	情報処理演習Ⅱ			
16	健康科学		外国語の探求	
17	健康とスポーツ			
18	英語Ⅰ			
19	英語Ⅱ			
20	英会話			
21	中国語		職業専門科目	専門支持科目
22	医学英語			
23	解剖学Ⅰ(総論・神経系)			
24	解剖学Ⅱ(内臓・脈管系)			
25	解剖学Ⅲ(骨格系)			
26	解剖学Ⅳ(筋系)			
27	生理学Ⅰ(動物性機能)			
28	生理学Ⅱ(植物性機能)			
29	運動生理学			
30	運動生理学実習			
31	基礎運動学			
32	運動機能学実習			
33	理学療法運動学演習			
34	作業療法運動学演習			
35	人間発達学			
36	医学概論			
37	病理学			

ページ	授業科目名	科目区分	
38	内科学	職業専門科目	基礎医学
39	整形外科学		
40	臨床神経学		
41	精神医学		
42	小児科学		
43	リハビリテーション医学		
44	臨床心理学		
45	耳鼻咽喉科学		
46	形成外科学		
47	臨床歯科医学		
48	画像診断学		
49	臨床栄養学		
50	臨床薬理学		
51	救急管理実習		
52	リハビリテーション概論		
53	社会福祉概論		
54	地域包括ケア論		
55	チーム連携論		
56	言語聴覚障害学総論Ⅰ		
57	言語聴覚障害学総論Ⅱ		基礎言語聴覚学
58	失語症学		
59	聴覚系医学		
60	音声・言語系医学		
61	発達心理学		
62	言語学		
63	音声学		
64	音響学(聴覚心理学含む)		
65	聴覚障害学		
66	音声障害学実習		
67	学習・認知心理学		
68	言語発達学		
69	高次脳機能障害学		
70	言語発達障害学		
71	重複障害学		
72	学習障害・広汎性発達障害学		
73	機能性構音障害学実習		
74	器質性構音障害学実習		
75	運動障害性構音障害学実習		
76	吃音学		
77	嚥下障害学実習		

ページ	授業科目名	科目区分		
78	補聴器・人工内耳学	職業専門科目	基礎言語聴覚学	
79	言語聴覚療法セミナー I			
80	言語聴覚療法セミナー II			
81	言語発達障害検査実習		専門基幹科目（言語聴覚学専攻）	言語聴覚療法評価学
82	言語発達障害評価実習			
83	聴覚検査学			
84	聴覚障害検査実習			
85	失語・高次脳機能障害検査実習			
86	失語・高次脳機能障害評価実習			
87	発声発語・嚥下障害検査実習		言語聴覚療法評価学	
88	発声発語・嚥下障害評価実習			
89	心理測定法実習			
90	言語聴覚療法技術実習 I（言語発達障害）			
91	言語聴覚療法技術実習 II（高次脳機能障害）			
92	言語聴覚療法技術実習 III（失語）		臨床言語聴覚療法実習	
93	言語聴覚療法技術実習 IV（発声発語・嚥下障害）			
94	言語聴覚療法臨床実習 I			
95	言語聴覚療法臨床実習 II			
96	言語聴覚療法臨床実習 III	展開科目	言語聴覚療法展開科目群	
97	地域福祉活動論			
98	マンガ概論			
99	マンガ基礎実習			
100	活字デザイン論			
101	視覚デザイン概論			
102	カラーコミュニケーション概論			
103	視覚伝達デザイン論			
104	情報メディア学入門			
105	広告論			
106	企業広報活動論			
107	広告デザイン論	総合科目	応用言語聴覚学	
108	言語聴覚療法地域支援実習			
109	応用言語聴覚学演習			
110	言語聴覚療法総合演習 I			
111	言語聴覚療法総合演習 II			
112	言語聴覚療法総合演習 III			



授 業 科 目 名	心理学	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	1年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	中野 良哉 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	心理学は、主としてヒトの意識とその表れとしての行動を考察する学問である。ここでは、概論として、動機づけ、認知、学習、性格、対人関係、発達などを広く扱う。それを通して、人間心理の理解を深める。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 心理学とは何かということをイメージすることができる</li> <li>2. 心理学の基礎的事項について説明することができる。</li> <li>3. 日常生活の行動を心理学的な視点から検討することができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	心理学とは 心理学の歴史と研究方法	
	2	感覚	
	3	知覚	
	4	記憶(1)記憶の仕組み	
	5	記憶(2)短期記憶、長期記憶、潜在記憶	
	6	学習(1)レスポナント条件づけ	
	7	学習(2)オペラント条件づけ	
	8	動機づけ	
	9	言語・思考・知能(1)知能	
	10	言語・思考・知能(2)問題解決	
	11	パーソナリティ(1)パーソナリティ理論	
	12	パーソナリティ(2)特性論・状況論	
	13	社会心理(1)社会的認知	
	14	社会心理(2)集団行動	
15	心理的発達		
教 科 書	必要に応じて資料を配付する		
事前事後の予習復習	配布資料を事前に読んでくること。 授業の内容を復習し理解を深めること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	適宜紹介する		
成 績 評 価 方 法	筆記試験(100%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	教育学	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	1年前期・後期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	谷岡 博志 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	よりよく生きることのできる人間を育成することが教育と定義される。リハビリテーションにおいて、対象者がよりよく生きることは最大の目標であり、専門職としてその基本的知識は重要となる。ストレス対処やコミュニケーションについて、教育学の知見から学修する。具体的には、専門職としての生涯教育、自己教育、対象者へ伝える、対象者を動かすなど、臨床の場で活用できる基本的知識を学ぶ。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 現代社会における教育の意義や果たす役割について考察するとともに、保健医療の専門職としての目的意識やコミュニケーション力等の基礎的能力を身に付ける。 2. 各授業回のテーマに沿った「調べる・まとめる・表現する」等の学習活動をとおして、生涯にわたり主体的に学び続ける資質や態度を身に付ける。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	教育学へのアプローチ：教育をどうとらえるか	
	2	教育とは何か①：人間の発達と教育	
	3	教育とは何か②：教育の歴史と思想	
	4	教育とは何か③：学校と社会との関係	
	5	大学生の教育環境：学校接続を考える	
	6	教育の内容と方法①：教育評価と学力問題	
	7	教育の内容と方法②：人権と教育	
	8	教育の内容と方法③：教育相談とカウンセリングマインド	
	9	教育の内容と方法④：進路指導とキャリア教育	
	10	教師の仕事と教職論：専門職化を考える	
	11	教育の現代的課題①：いじめと児童虐待	
	12	教育の現代的課題②：障害児教育とインクルーシブ教育	
	13	教育の現代的課題③：性の多様性とジェンダー	
	14	教育の現代的課題④：多文化教育とシティズンシップ	
15	まとめと振り返り：これからの教育と教育学		
教 科 書	木村 元・小玉重夫・船橋一男 著『教育学をつかむ 改訂版』(有斐閣) 上記のテキストに加えて、各授業回の学習課題に関するワークシートを配付する。		
事前事後の予習復習	予習は、テキストや配付資料により授業内容を確認し、専門用語等を調べておくこと。復習は、授業ノートやワークシート等を参照して要点をまとめておくこと。		
履 修 の 条 件	リハビリテーションの各領域で専門職として求められる主体性や協調性を身に付けるため、学習活動にペアワーク、グループ発表などアクティブ・ラーニングの形態を取り入れる。そのため、授業への積極的な参加を期待する。		
参 考 文 献	岡田昭人 編著『教育学入門 30 のテーマで学ぶ』(ミネルヴァ書房) 植上一希・寺崎里水 編著『わかる・役立つ教育学入門』(大月書店) 他		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (60%)、課題レポート (20%)、小テスト・ワークシート (10%)、授業への参加及び授業中の活動状況 (10%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	生命倫理	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	3年前期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	竹崎 久美子 (兼任)・渡邊 聡子 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	現代には人間の生命をめぐる多くの倫理的課題が生じている。これまで人の誕生と死は、自然の営みの一環として普遍的なものと考えられてきた。しかし、科学技術と医療技術の進歩とともにその様相は変化しており、医療や福祉に関わる専門職は、生と死を巡るイメージや倫理について改めて考え直す必要性に直面している。人間を対象とする研究や実務において、対象とする人間の尊厳を守り医療に携わる者としての基本的責務等を理解して、倫理観を身に着けることを目的とする。		
授 業 の 到 達 目 標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 倫理的課題について考える拠り所を見つけることができる。</li> <li>・ 倫理的課題について当事者の立場にたって、思い、考え、感じることができる。</li> <li>・ 専門職者としての倫理観を持つことができる。</li> </ul>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	倫理とは 基礎理論および概念 (渡邊)	
	2	倫理の原則 医療倫理 臨床倫理 職業倫理 (渡邊)	
	3	医療現場の倫理的課題：生殖に関する倫理的課題 (渡邊)	
	4	医療現場の倫理的課題：子どもを取り巻く倫理的課題 (渡邊)	
	5	医療現場の倫理的課題：臓器移植 終末期医療 (竹崎)	
	6	医療現場の倫理的課題：様々な個性を持つ人の尊厳 (竹崎)	
	7	医療現場の倫理的課題：専門職としてのジレンマ (竹崎)	
	8	倫理的課題の解決方法：意思決定モデル (渡邊)	
	9	倫理的課題の解決方法：事例演習 (渡邊)	
	10	倫理的課題の解決方法：事例演習 (渡邊)	
	11	専門職の責務と倫理：人材育成 (竹崎)	
	12	専門職の責務と倫理：連携・協働 (竹崎)	
	13	専門職の責務と倫理：専門性の探求 (竹崎)	
	14	専門職の責務と倫理：研究協力者の権利擁護 (竹崎)	
15	組織と制度と倫理 (竹崎)		
教 科 書	配付資料		
事前事後の予習復習	授業後に配布資料を読み、復習する。		
履 修 の 条 件	授業中に発言を求めたり、学生間での議論を行ったりするので、積極的な参加が求められる。		
参 考 文 献			
成 績 評 価 方 法	レポート課題、授業の参加度、リアクションペーパーを総合的に評価する		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	コミュニケーション論	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	1年前期・後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	石川 裕治		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	家庭、学校、医療や福祉施設等の現場を含む地域社会において、日常的・非日常的に接触する人々と気持ちよく言語的・非言語的なコミュニケーションを通して、お互いに分かり合ったり思いやりをかけ合ったりして生活することが重要である。そのためには、自分の考えや意見を素直に表現してより良い人間関係を結ぶことのできる社会的なスキルであるコミュニケーション能力を習得する必要がある。対象とする人々を一人の人間として心から大切にし、誠心誠意を持って対応することで、信頼関係を築く基礎を学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	1. コミュニケーションの重要性を理解する 2. コミュニケーション手段について理解する 3. コミュニケーション障害について理解する 4. コミュニケーション場면을体験する		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	オリエンテーション ・授業の目標と進め方、シラバス説明 等	
	2	コミュニケーションにおける現状と課題	
	3	コミュニケーションの重要性	
	4	コミュニケーション実践①（自己紹介）	
	5	コミュニケーションの種類	
	6	言語的コミュニケーション（音声言語）	
	7	言語的コミュニケーション（文字言語）	
	8	コミュニケーション障害の種類	
	9	コミュニケーション障害の理解（失語症を中心に）	
	10	非言語的コミュニケーション（表情）	
	11	非言語的コミュニケーション（ジェスチャー）	
	12	非言語的コミュニケーション（描画）	
	13	プレゼンテーションの仕方	
	14	コミュニケーション実践②（プレゼンテーション）	
15	コミュニケーション実践②（プレゼンテーション）		
教 科 書	必要に応じ資料等を配布する。		
事前事後の予習復習	事前に配布された講義資料を読んでおく。講義内容を復習する。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	内山靖・他 『コミュニケーション論・多職種連携論』 医歯薬出版		
成 績 評 価 方 法	筆記試験（50%）、プレゼンテーション（50%）		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時（要予約）		

授 業 科 目 名	社会学	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	1年前期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	玉里 恵美子 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	社会学とは、人と人が関わり合うことで形作られ変化していく社会現象を読み解こうとする学問である。具体的には、家族といったミクロ的枠組みから、会社、地域、国家などのマクロ的枠組みまでを、その変遷や課題について学ぶ。また、高知県や市町村の抱える過疎問題や高齢者福祉、地域福祉の問題について理解を深める。限界集落、集落再生、住民参加の町づくりなど、地域社会の実情を踏まえて、高齢者・障害者の社会参加への糸口を学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 地域社会に関する概念を理解することができる。</li> <li>2. 家族に関する概念を理解することができる。</li> <li>3. 集団や組織についての概念を理解することができる。</li> <li>4. 高知県の抱える地域課題について理解し、住民の社会参加について考察することができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	オリエンテーション／社会学とは何か	
	2	現代社会と人口動態	
	3	伝統的な地域社会	
	4	伝統的な家族	
	5	現代の地域社会と課題	
	6	現代の家族と課題	
	7	生活のとらえ方	
	8	社会的役割と社会的ジレンマ	
	9	社会的排除と社会的孤立	
	10	高知県の地域特性と課題	
	11	限界集落と集落再生	
	12	高齢者福祉と地域福祉	
	13	住民参加の町づくり	
	14	高齢者・障害者の社会参加	
15	本授業で学んだ理論や概念について理解を深め定着させる		
教 科 書	山西裕美・玉里恵美子編著『社会学と社会システム』学文社。 配布資料はファイルして持参すること。		
事前事後の予習復習	毎回、A4で1枚程度の課題を出す。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	授業時に紹介する		
成 績 評 価 方 法	小テスト1回(10%)、期末試験 (90%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	リーダーシップ論	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8
履 修 年 次	4年後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	山本 双一（兼任）		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	<p>リーダーおよびリーダーシップは、会社組織だけでなく、友人の集まり、家族など様々な場面でみられる。リーダーシップとは、ある特定の人物が、所属する組織や集団の目標達成に向けメンバーたちに影響を及ぼす力をいう。ただし、リーダーシップを発揮できるかどうかは、組織における他のメンバーがその人物をリーダーとして認めているかに依存している。</p> <p>本授業は、リーダーシップに関する様々な知識やリーダーシップを実践する上での知見を学ぶ。</p>		
授 業 の 到 達 目 標	<p>医療のなかの医学リハビリテーションにおけるチームとは何か、そのリーダーはどのような役割を背負うか。また将来、自身がチームリーダーになったとき、チームメンバーをどのように導くのか。チームリーダーとして必要な知識を学んだうえで、自己でシミュレーションしてみる機会とする。</p>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	チームとは、リーダーとは、チーム医療とは、を定義する。	
	2	臨床や臨地における様々なチームを列挙してみる。	
	3	チーム(メンバー)に必要な、身分と役割についての「法」を理解する。	
	4	医療にあつての、組織とチーム、それらの歴史を知る。	
	5	チームメンバーの人格向上と、ハラスメント(いじめ)を考える。	
	6	専門職業人としての、研鑽と学習の機会を知る。	
	7	リーダーシップ論から、チームリーダーの人格と技量を学ぶ。	
	8	チームメンバー間での心遣いと、チームの守り立てを考える。	
教 科 書	菅原勇基：社会人1年目の教科書。クロスメディア・パブリッシング		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	自己の考えと意識を確認してまとめる。		
履 修 の 条 件	4年次生で、臨床実習履修修了学生。		
参 考 文 献	必要に応じてプリント配布。		
成 績 評 価 方 法	レポート提出。		
オ フ ィ ス ア ウ ー	授業前後の時間帯。		

授 業 科 目 名	国際関係論	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15
履 修 年 次	4年後期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	先川 信一郎 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	世界政治のさまざまな要素について、叙述や、説明、理解、あるいは予測することなどを目的としている。国際関係の主要な出来事と学説について講義し、基礎的な事項を理解してもらうことを目指す。現在の国際政治の仕組み（そのあらしと形成過程）、国際関係論の理論などの学説の理解、国際関係論の知見を用いて、現実世界の諸問題を分析できるようになることを到達目標とする。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 日本を軸に世界の主要ニュースを理解することができる。</li> <li>2. メディア・リテラシーのスキルを磨き、情報を分析・評価することができる。</li> <li>3. 人権・平和、民主主義の観点から国際関係を理解することができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	世界情勢と地政学の考え方	
	2	北朝鮮と国際社会の現状と課題	
	3	日本外交と国境問題について	
	4	アメリカ外交と歴史的な視点	
	5	アメリカ外交と安全保障	
	6	中国の近現代史と中国共産党	
	7	中国の習近平体制、三期目への課題	
	8	ロシアとユーラシアの歴史	
	9	ロシアのプーチン体制の野望	
	10	EUの誕生、その深化と拡大	
	11	NATOと東方拡大とウクライナ戦争	
	12	イスラム教の歴史的な視座	
	13	イスラム圏の苦悩	
	14	アフリカの展望とパワーゲーム	
15	宗教と民族、難民問題と各国事情		
教 科 書	特になし		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習は、新聞やテレビ、ネットで報道される主要な国際ニュースや社説、コラムを読んで概要を理解しておく。復習は、講義の配布資料を参照し、要点をまとめる。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	池上彰『知らないと恥をかく世界の大問題』1～13 角川新書 小泉悠『現代ロシアの軍事戦略』ちくま新書 ハワード・ジン『学校では教えてくれない本当のアメリカの歴史』あすなる書房 姜尚中『興亡の世界史 18 大日本・満州帝国の遺産』講談社 このほかの参考文献は、講義の中で提示します。		
成 績 評 価 方 法	最終レポート 80%、毎回の講義のショートコメント 20%。 最終レポート（3000字程度、手書き）のテーマの選び方や書き方については、講義の中で説明します。		
オ フ ィ ス ア ワ ー	チャットやメールで質問や相談を受け付けます。		

授 業 科 目 名	地域課題研究 I	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8
履 修 年 次	2年後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	片山 訓博、重島 晃史		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	研究の意義や目的を理解し、テーマの選択、調査研究の手順、文献検索、統計学を用いた分析方法、調査を実施するにあたっての倫理的配慮、量的研究や質的研究の手法、論文の構成や注意点、プレゼンテーションの方法についての基礎知識を学修する。本科目は「地域課題研究Ⅱ」に連動する科目でもあり、調査研究の基礎的手法や考え方の修得を目指すものである。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 研究テーマの選択の仕方について説明できる。</li> <li>2. 研究の手法やデザインについて説明できる。</li> <li>3. 倫理的配慮について研究実施者が注意すべきことを説明できる。</li> <li>4. 必要な文献の検索手順が選択できる。</li> <li>5. 目的に応じた統計解析を選択できる。</li> <li>6. 論文の構成や注意点について説明できる。</li> <li>7. プレゼンテーションの方法について説明できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	授業のオリエンテーション、テーマの選択と決定 (PICO、PEMO)	
	2	文献検索	
	3	研究のデザイン① (量的研究および質的研究、コホート研究、症例対照研究など)	
	4	研究のデザイン② (介入研究、診断研究、システマティックレビュー、質問紙法など)	
	5	研究計画書、研究ノート・記録	
	6	倫理的配慮	
	7	データ処理と統計解析	
	8	論文作成・学会発表	
教 科 書	川村孝『臨床研究の教科書』医学書院		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	必要に応じて授業終了時に次回講義に関する予習内容を提示する。復習では授業で実施した課題を再度振り返り実施する。		
履 修 の 条 件	特記事項なし		
参 考 文 献	内山靖、他・編『理学療法研究法第3版』医学書院、鎌倉雅彦、他・編著『質問紙法』北大路書房、木原雅子、他・訳『医学的研究のデザイン第4版』メディカル・サイエンス・インターナショナル		
成 績 評 価 方 法	授業態度 (10%)、課題 (20%)、定期試験 (70%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授業科目名	地域課題研究Ⅱ	授業形態	演習
単位数	1	回数	23回
履修年次	3年通年	必修・選択	必修
科目担当者	大倉 三洋・山崎 裕司・辻 博明・田頭 勝之・宮川 哲夫・武内 和弘・柳澤 健・濱田 和範・片山 訓博・重島 晃史・稲岡 忠勝・明崎 禎輝・石川 裕治・稲田 勤・足立 一・辻 美和・清岡 学・宮崎 登美子・吉村 知佐子・光内 梨佐・平松 真奈美・大塚 貴英・篠田 かおり・石元 美知子・有光 一樹・柏 智之		
授業の概要・目的	地域社会が抱える様々な課題の現状について、調査やフィールドワーク等を通して知り、可能であればその解決のための方策までを考える。各グループでの地域課題（テーマ）の設定、インターネットや資料等による対象となる地域の概要調査、地域での実地調査や関係者からの聞き取り調査、それらに基づく地域課題の分析と結果のまとめ、レポート作成を含む発表準備、プレゼンテーションなどを行う。これらの学修を通して地域の特徴を踏まえ、課題や魅力を発見できるような基本的な知識・技能を身につけ、それら全体を整理して説明することができる能力を養う。		
授業の到達目標	<p>地域課題研究Ⅱは、専攻を越えた学生がグループを組み、地域の課題を見つけ出し、社会で活躍するために必要な「課題解決力」を養う実践型の授業である。学生はあらかじめ設定したテーマについてグループに分かれ、地域における様々な課題を調べたり、それを解決するための方法を立案・実施・評価するために必要な知識・技術・態度を学。これらの研究活動を通して以下の能力を身につけることを目標とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 他者の話を聞き正しく理解できる</li> <li>2. 専門的な文書を読み内容を正確に読み取ることができる</li> <li>3. 自分の考えを他者に説明し、内容の主旨を的確に伝えることができる</li> <li>4. 他者や自分の意見や考えを論理的にまとめることができる</li> <li>5. 課題やレポート作成を効率的かつ計画的に行うことができる</li> <li>6. 他者のグループの報告を聞き、その内容を評価し、問題点を指摘できる</li> <li>7. 関係者と良好な人間関係を築き、対人交流ができる</li> <li>8. 課題設定からまとめ、発表までの研究過程を互いに協力し実行できる</li> </ol>		
授業計画	回	内容	
	1	オリエンテーション（地域課題研究の理解）	
	2	課題テーマ・調査対象を考える	
	3	課題テーマ・調査対象を考える	
	4	課題テーマ・調査研究計画・手法の検討	
	5	課題調査研究活動	
	6	課題調査研究活動	
	7	課題調査研究活動	
	8	課題調査研究活動	
	9	課題調査研究活動	
	10	課題調査研究活動	
	11	課題調査研究活動	
	12	課題調査研究活動	
	13	課題調査研究活動	
	14	課題調査研究活動	
	15	調査研究資料の集計・分析	
	16	調査研究資料の集計・分析	
	17	調査研究資料の集計・分析	
	18	研究発表内容の作成・準備	
	19	研究発表内容の作成・準備	
	20	研究発表内容の作成・準備	
	21	研究発表内容の作成・準備	
	22	研究発表内容の作成・準備	
23	研究成果発表		
教科書	授業資料は各教員が適宜配布する		
事前事後の予習復習	特になし		
履修の条件	地域における調査研究に適した服装・髪型などに配慮すること		
参考文献	特になし		
成績評価方法	活動参加態度（40%）、研究成果発表（30%）、レポート（30%）		
オフィスアワー	授業1回目のガイダンスで説明する		

授 業 科 目 名	生物学	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15 回
履 修 年 次	1 年前期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	岡林 正幸 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	人間の身体の構造と機構を学修するにあたり、医療職に必要な高度の生物学的知識をより理解することが必要となる。生物の生命現象について、細胞レベルから、刺激と反応、および動物の行動についての仕組みまでを学修する。具体的には、細胞の構成と働き、膜電位、興奮と伝導、反射、本能的行動、細胞死などを学ぶ。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生命活動を細胞レベルより理解することができる。</li> <li>2. 人間の恒常性の維持にはホルモンや神経系が関与していることを理解することができる。</li> <li>3. 病気や障害について遺伝的要素が関与していることを理解することができる。</li> <li>4. 人間には様々な免疫が働いていることを理解することができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	生きているということはどういうことか	
	2	細胞のつくりと細胞説	
	3	細胞分裂	
	4	細胞や人体の化学成分	
	5	細胞および細胞膜のはたらきと膜電位	
	6	細胞の興奮	
	7	神経および神経細胞の特徴	
	8	脳のはたらきと興奮の伝達	
	9	エネルギーと代謝	
	10	内分泌と恒常性の維持	
	11	タンパク質の構造と特徴	
	12	遺伝子情報の構造と機能	
	13	遺伝子と突然変異	
	14	免疫について	
15	細胞の死・個体の死とは何か		
教 科 書	生物学入門(東京化学同人)		
事前事後の予習復習	高校で多くの学生さんは「生物基礎」を学んでいると思います。もう一度、生物基礎を見直しておくこと。		
履 修 の 条 件	特になし。		
参 考 文 献	やりなおし生物・化学(照林社)・生物のスーパー基礎(文英堂)		
成 績 評 価 方 法	定期試験 80%、レポートおよび授業態度 20%。 講義中の私語及びスマートフォン等の使用は厳禁します。		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	数学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	1年後期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	三吉 史高 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	社会人として必要な数学の基礎的素養、および、数学の活用力を身につけることを基本とする。		
授 業 の 到 達 目 標	① 数や演算に関する基礎事項を理解し、必要な計算ができるようにする。 ② 「統計学」、「物理学」や専門科目を理解するための数学の基本を理解し、計算ができるようにする。 ③ 社会人として必要な論理的思考力・判断力を身につける。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	計算法則 (四則計算、無理数、文字式)	
	2	方程式 (1次方程式、2次方程式、連立方程式)	
	3	関数とグラフ (1次・2次関数)	
	4	不等式 (1次不等式、2次不等式)	
	5	比例、割合の計算	
	6	確率 (順列、組合せ、条件付確率)	
	7	図形 (三平方の定理)	
	8	図形 (三角比)	
教 科 書	大学生のための数学・理科基礎計算ドリル (樋口勝一著、晃洋出版)		
事前事後の予習復習	配布資料について計算練習等の復習しておくこと。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	特になし		
成 績 評 価 方 法	試験 70%、平常点 30% (授業への参加姿勢、問題演習、レポート)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	物理学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	1年後期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	岡林 正幸 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	リハビリテーション技術の習得のためには、物理学的な物の見方や考え方が専門科目への基礎となる。この科目では、物体の運動と力学、電磁波の性質、電気、音と光の振動の性質などについてその原理や法則、基本的な用語に関して学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 歩行時における重心移動の基礎を理解することができる。</li> <li>2. 各種リハビリにおいて、負担のない動作を理解することができる。</li> <li>3. 今後、各種のリハビリに関する補助的な器具や機器についての知識の基礎を理解することができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	物理の基礎・単位	
	2	速さと速度・力の合成と分解	
	3	仕事(熱を含む)と力学的エネルギー	
	4	力のつりあい、てこの原理と滑車	
	5	電気と電磁波	
	6	音と光の振動の性質	
	7	運動の法則と慣性	
	8	圧力(大気圧を含む)・水圧	
教 科 書	看護に必要なやりなおし数学・物理	時政 孝行著	照林社
事 前 事 後 の 予 習 復 習	高校までに学んだ理科に関する単位を確認しておくこと。 単位には様々な意味があります。		
履 修 の 条 件	特になし。		
参 考 文 献	橋元の物理をはじめからていねいに(東進ブックス) 物理一問一答(東進ブックス)		
成 績 評 価 方 法	定期試験 80%。レポート・授業態度等 20%。 私語やスマートフォン(携帯・ゲーム機等)の使用は厳禁とします。		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	統計学	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	1年後期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	藤原 憲一郎 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	統計学の基本的な考え方と統計分析の基本的な手法を学ぶ。統計分析するために必要なデータの分布に関する知識を整理し、データが属しているグループの特性の推定、および、2つのグループ間の差を調べる検定について学修する。さらに、多変量解析の考え方を学び、多変量解析の中でも一般的な多変量回帰分析について学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 統計の基礎を学び、統計分析に必要な確率分布について理解する。</li> <li>2. 母集団の推定や2つのグループの検定に用いられる統計量を理解する。</li> <li>3. 標本のデータから Excel 関数を用い、統計量を求めることができる。</li> <li>4. 統計量を用い、母集団の特性の推定や2つのグループの差を検定できる。</li> <li>5. 多変量分析の概要を理解し、Excel の分析ツールを用い回帰分析ができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	講義の進め方、評価法を説明し、統計で用いられる基本用語と図を学ぶ	
	2	順列、組み合わせ、確率、確率分布について学ぶ	
	3	統計量と計算式、統計量を求める Excel 関数について学ぶ	
	4	母集団の正常範囲の推定、母集団の平均値の区間推定について学ぶ	
	5	検定と生ずる過誤、母平均と標本平均の検定について学ぶ	
	6	対応のある・対応のない2つの標本平均の検定について学ぶ	
	7	演習により母集団の推定、母集団の平均値の検定について理解を深める	
	8	母比率の範囲の推定、母比率と標本比率の検定について学ぶ	
	9	対応のない2つの標本比率の検定（正規分布、2×2分割表）を学ぶ	
	10	フィッシャーの直接確率計算、対応のある2つの標本比率の検定を学ぶ	
	11	演習により比率の推定と検定について理解を深める	
	12	2変量の相関、相関係数の検定と推定について学ぶ	
	13	多変量分析の概要と単回帰分析、重回帰分析について学ぶ	
	14	演習により比率の推定、検定、単・重回帰分析の手法について学ぶ	
15	総合的な演習問題に取り組み、学んだ事項を整理し理解する		
教 科 書	正井・片山著『医学・保健学のためのやさしい統計学（改訂第3版）』 金原出版 配布資料（教科書、参考文献1を参考に編集）		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習では、シラバスを参照し、教科書、資料を読み講義概要を理解しておく。 復習では、教科書、資料を参照し課題を解くことにより、講義内容を理解する。		
履 修 の 条 件	統計量、推定、検定に必要な数値は Excel で求めるので、Excel の基本操作を理解していることが望ましい。		
参 考 文 献	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 杉田 暉道、朽久保 修 共著『統計学入門』 医学書院</li> <li>2. 柳井 久江著『4Step エクセル統計第4版』 オーエム出版</li> </ol>		
成 績 評 価 方 法	課題30%、定期試験70%		
オ フ ィ ス ア ワ ー	講義時にメールアドレスをアナウンスし、可能な場合はメール対応とする。面談が必要な場合は、打ち合わせにより日時を設定する。		

授 業 科 目 名	情報処理演習 I	授 業 形 態	演習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	1年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	竹島 卓、高地 正音		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	<p>情報化社会において、コンピュータの知識と操作技術の修得は、医療の現場でも必須となっている。本授業では、コンピュータおよびネットワークの仕組みを理解し、情報機器を利用したコミュニケーションのとり方の幅を広げる。また、レポートやドキュメントの作成方法、情報の整理方法、情報検索方法等について学修する。</p>		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. データ管理や学修活動に必要な情報機器の利用ができる。</li> <li>2. レポートやドキュメントの作成ができる。</li> <li>3. 情報の共有と取り扱いについて理解する。</li> <li>4. 収集した情報を科学的に理解する。</li> <li>5. 情報検索の方法を知り、学修・研究活動に活用できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	データの管理、個人情報と管理、周辺機器の利用について	
	2	互換性とデータの拡張子について学ぶ	
	3	情報リテラシー（情報活用能力）	
	4	レポートの作成と手順 1	
	5	レポートの作成と手順 2（効果的な情報の表現技法）	
	6	グループでのレポートの作成と手順 1（ファイルの共有）	
	7	グループでのレポートの作成と手順 2（再利用）	
	8	グループでのレポートの作成と手順 3（効果的な情報の表現技法）	
	9	アンケート作成 演習	
	10	アンケート調査と集計 演習	
	11	アンケート処理と集計 演習	
	12	アンケート評価と表現 演習	
	13	文献検索システムの利用 1	
	14	文献検索システムの利用 2	
15	総合的演習		
教 科 書	noa 出版「学生のための Office スキル活用&情報モラル」		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習は事前に配布する資料に従って授業前に調査しておく。復習は当日の授業で学修した内容に基づいて指定された課題を実施し指定期日までに提出する。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	noa 出版著作/制作「これだけは知っておこう!情報リテラシー」 noa 出版 2015		
成 績 評 価 方 法	課題 60%、小テスト 40%の結果を総合して評価する。		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	情報処理演習Ⅱ	授 業 形 態	演習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	1年後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	竹島 卓、高地 正音		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	<p>情報化社会において、コンピュータの知識と操作技術の修得は、医療の現場でも必須となっている。本授業では、コンピュータによる情報処理の仕組みを理解し、データ処理の基本と数値データ分析の基本的な方法を学ぶ。また、情報の適切な取り扱い方法を理解し、プレゼンテーションによる情報発信など、基礎知識を学ぶとともに、臨床や研究活動に活用できるよう学修する。</p>		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. データ処理の基本と数値データ分析法を理解する。</li> <li>2. データをグラフ化することでデータの特徴を効果的に可視化した資料を作成することができる。</li> <li>3. 統計ソフトやさまざまな分析方法を用いた分析方法を実践的に理解する。</li> <li>4. 各メディアの基本的な特性を理解した上で、その活用技術と効果的な情報の表現手法を身につける。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	集計と分析 1(関数の理解)	
	2	集計と分析 2(関数の理解)	
	3	集計と分析 3(関数の理解と組み合わせ)	
	4	グラフの作成 (分析 目的別表現)	
	5	集計と分析 (アンケート調査と集計)	
	6	データの分析	
	7	データの解析 (ピポットテーブルとクロス集計)	
	8	基本統計量とヒストグラム	
	9	正規母集団 正規性の検定	
	10	二群の差の検定 (t検定)	
	11	プレゼンテーション能力の必要性 (種類・方法)	
	12	情報の収集	
	13	情報の収集と発信	
	14	マルチメディア作品の表現と評価 1	
15	マルチメディア作品の表現と評価 2		
教 科 書	noa 出版「学生のための Office スキル活用&情報モラル」		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習は事前に配布する資料に従って授業前に調査しておく。復習は当日の授業で学修した内容に基づいて指定された課題を実施し指定期日までに提出する。		
履 修 の 条 件	情報処理演習Ⅰを修得していることが望ましい。		
参 考 文 献	noa 出版著作/制作「これだけは知っておこう!情報リテラシー」 noa 出版 2015		
成 績 評 価 方 法	課題 60%、小テスト 40%の結果を総合して評価する。		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	健康科学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	1年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	辻 博明		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	近年、生活水準の向上、余暇時間の増加に伴い健康づくり、体力づくりに対する社会的関心は大きな高まりをみせている。このような状況下でリハビリテーションの領域も治療から予防へと拡大してきており、地域住民の健康管理、健康指導に関わる機会も多くなってきている。健康の維持増進のためには運動・栄養・休養の三要素をバランスよく保つことが重要であるとされている。主に健康と運動についての理解を深めるとともに、体力測定を通して、健康や体力の知識を学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 現代社会における健康問題と現代日本の健康施策について説明できる。</li> <li>2. 心身の調和が健康に重要であることを説明できる。</li> <li>3. 適切な栄養・食事の摂取が実践できる。</li> <li>4. 健康づくりのために必要な運動について説明できる。</li> <li>5. ストレスに対する知識と対処法を修得する。</li> <li>6. 健康を維持増進するためのスキルを修得し、実践できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	健康とは何か、QOL と健康、現代の健康問題、健康ブームとその背景	
	2	心の健康とは、心の健康の測定と評価、現代日本の健康施策	
	3	形態の意味、脂肪蓄積のメカニズムとその影響、適切な栄養・食事摂取	
	4	ストレス論、心身一如とボディーワーク、障害とは何か	
	5	健康づくりのための運動、運動強度と心臓血管系の応答、脈拍数と運動強度、有酸素性運動がもたらす効果	
	6	レクリエーション活動の恩恵、社会的健康と運動・スポーツ	
	7	体力とトレーニング、救急処置法、アダプテッド・スポーツ	
8	健康・スポーツとライフスキル、ストレス対処、目標設定		
教 科 書	九州大学健康スポーツ科学研究会 編 『実習で学ぶ健康・運動・スポーツの科学 改訂版』 大修館書店		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習は教科書の授業予定範囲から要点を抜き出し、ノートに箇条書きにする。復習は授業で配布した資料と学んだことを確認しながらノートを整理する。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	必要に応じてプリントを配布する		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (80%)、レポート (20%) の結果を総合して評価する。		
オ フ ィ ス ア ウ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	健康とスポーツ	授 業 形 態	実習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	1年前・後期	必 修 ・ 選 択	必修
担 当 教 員 名	神家 一成（兼任）、矢野 宏光（兼任）、甲藤 彰男（兼任）		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	全人的な人間形成に必要な身体運動に関する科学的な知識と、筋・心肺機能についての特性を理解し、それぞれの機能の維持や向上を図るための基本的な知識を身につけ、各種のスポーツ実技を行う。加えてチームスポーツを通してコミュニケーション能力も養う。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 活動を通してスポーツの楽しさを知り、スポーツを通して交流を深めることができる。 2. 身体活動の重要性、スポーツの楽しさ、人間関係構築の大切さを考えることができる。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	健康とスポーツについて	
	2	スポーツの種類とルール説明	
	3	スポーツ実践①	
	4	スポーツ実践②	
	5	スポーツ実践③	
	6	スポーツ実践④	
	7	スポーツ実践⑤	
	8	スポーツ実践⑥	
	9	スポーツ実践⑦	
	10	スポーツ実践⑧	
	11	スポーツ実践⑨	
	12	スポーツ実践⑩	
	13	スポーツ実践⑪	
	14	スポーツ実践⑫	
15	スポーツ実践⑬		
教 科 書	参考資料を適宜配布		
事前事後の予習復習	特になし		
履 修 の 条 件	運動実技に適した服装を準備すること		
参 考 文 献	『ニュースポーツ百科』 大修館書店		
成 績 評 価 方 法	活動参加態度（70%）、レポート（30%）		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	英語 I	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15 回
履 修 年 次	1 年前・後期	必 修 ・ 選 択	必修
担 当 教 員 名	玉井 健		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	異文化や、多様な価値観を理解する上で、重要なコミュニケーションの道具としての「英語」に慣れ親しみ、主体的、積極的に英語の学習に取り組み、広く世界を知る喜びを得ることを目標とする。高校までで修得した基礎英語を踏まえ、基本的な英文を読む能力と書く能力を学修する。英文読解能力を高めることで、英語文献を理解する基礎をつくる。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 自身の英語力をふり返り問題点を考える。 2. 英文の構成を考え、内容について批判的に理解する。 3. 内容について自分の考えや思いを英語で表現する。 4. 内容について自分の考えや思いを英語で共有する。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	授業ガイダンス 英語学習の振り返りと自己分析	
	2	リーディング:University education I(大学生活 I)	
	3	リーディング University education II (大学生活 II)	
	4	プレゼンテーション (準備) 発音練習	
	5	プレゼンテーション (本番)	
	6	リーディング: Human right I: Martin Luther King Jr. (人権: M. L. キング)	
	7	リーディング: Human right II: Malcolm X-1 (人権: マルコム X1)	
	8	リーディング: Human right III: Malcolm X-2 (人権: マルコム X2)	
	9	リーディング: Human right IV: Jim Crow Law-1 (人権: ジム・クロウ法 1)	
	10	リーディング: Human right IV: Jim Crow Law-II (人権: ジム・クロウ法 2)	
	11	リーディング: Human right V: Synthesis (人権: まとめ)	
	12	映画「グレート ディベーター」	
	13	ライティング I: Writing I 構想	
	14	ライティング II: Writing II 書直し、編集	
15	ライティング III: Writing III 発表		
教 科 書	教材プリント及びワークシートを配布する。		
事前事後の予習復習	教材とワークシートは事前に配布する。読解教材は事前に読んで意味を取り、ワークシートの問題について考え準備してくる。授業の初めに課題内容について小テストを行う。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	マルコム X 著 浜本武雄 訳 『完訳マルコム X 自伝』 (上・下) 中公文庫 上坂昇 『キング牧師とマルコム X』 講談社現代新書 ジェームス・M. バーダマン 著 水谷八也 翻訳 『黒人差別とアメリカ公民権運動 —名もなき人々の戦いの記録』 集英社新書 The Great Debaters (DVD) by Denzel Washington		
成 績 評 価 方 法	小テスト(30%)、プレゼンテーション(20%)、作文(10%)、定期試験(40%)		
オ フ ィ ス ア ウ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	英語Ⅱ	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	1年前・後期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	玉井 健		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	近年医療現場においては、外国人が対象となる機会が増えている。医療職として英語による情報を正確かつ効果的に入手し、理解し、英語の文章で自分の考えや事実が表現できるように基礎的な力を養って行く。特に、英語の音声を取り取り、情報内容が正確につかめるようリスニングについても学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 医療の現場で使用される英語情報の基礎的理解を深める。</li> <li>2. 医療現場において経験する可能性のある基礎的英語コミュニケーション力を涵養する。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	身体を表す言葉と薬の名前の学習・発音の基礎	
	2	病気と医療科目名・発音の基礎	
	3	風邪と一般的な症状の表現・コミュニケーション練習	
	4	おなかの病気に関わる表現・コミュニケーション練習	
	5	痛みを伴う病気や歯痛に関わる表現・コミュニケーション練習	
	6	けがの表現・コミュニケーション練習	
	7	診察とお見舞いに必要な表現・コミュニケーション練習	
	8	歯医者との会話・コミュニケーション練習	
教 科 書	『病気になっても困らない英会話』尾崎哲夫著 南雲堂 他に必要な教材はプリントとして配布する。		
事前事後の予習復習	小テスト形式で復習を行う。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	特になし		
成 績 評 価 方 法	プレゼンテーション・小テスト (40%)、定期テスト (60%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	英会話	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	1年 前・後期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	シヨーン バーゴイン (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	国際化が進む我が国において、多くの外国人が仕事や観光などで滞在するようになり、外国人との交流が日常になってきている。相手の考えを正確に理解できること、英語による会話で伝えたいことを正確に表現し、自分の考えを正確に相手に伝えられることを目標とする。日常生活において、幅広く外国人と交流できるように、英単語の理解、語彙力、外国の文化や社会の理解などを学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	Students will be able to use follow up questions (関連する質問) Students will be able to respond in English (あいづち) Students will be able to ask questions back (聞き返し)		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	Course orientation and conversation techniques	
	2	Conversation and activities about sports	
	3	Conversation and activities about food	
	4	Listening activities using ELLLO website	
	5	Conversation and activities about travel	
	6	Listening activities using ELLLO website	
	7	Preparation for assignment	
8	Perform assignment		
教 科 書	All materials will be provided by the teacher		
事前事後の予習復習	Students will need to have completed high school English and show good communication skills.		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	All materials will be supplied by the teacher		
成 績 評 価 方 法	授業態度 30%, 課題 70%		
オ フ ィ ス ア ワ ー	After class		

授 業 科 目 名	中国語	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	1年次前・後期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	前田 正也 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	<p>隣国である中国とは、経済・文化・人事交流など、アジア圏の中でも交流の盛んな状況にある。中国語の初級文型を学び、実際にコミュニケーションができるよう、聞く、話す、書く、読むという四技能をロールプレイを通して効率的に学修する。具体的には、中国の音と文字に触れ、中国語式和訳や日常会話、音読、文法本文音読など、基礎的な発音、文法の習得を踏まえて、聞く、話す練習を繰り返し学修する。</p> <p>外国語学習の基本である4技能（「聞く」「話す」「読む」「書く」）バランスよく学び、簡単な中国語を理解し、話せるようにする。</p>		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 中国語と日本語の違いを理解することができる。</li> <li>2. 簡単な中国語の読み書きができる。</li> <li>3. 日常挨拶と簡単な中国語を話すことができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	中国語の語彙と文法1	
	2	中国語の語彙と文法2	
	3	第1課～第3課（人称・指示代名詞、疑問詞疑問文、副詞、所有）	
	4	第4課～第6課（量詞、形容詞、数字、日時、完了、助動詞、所在、幾つ）	
	5	第7課～第9課（前置詞、時間量、反復疑問、）	
	6	第10課～第12課（動作の態様、進行形、選択疑問、二重目的）	
	7	復習、絵教材を使用した会話1	
8	復習、絵教材を使用した会話2		
教 科 書	《新版2訂版》 中国語はじめの一步 白水社		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習は、シラバスの確認とテキストならびに配付資料を読んでおく。復習は、講義板書ならびに配付資料を参照して、要点をまとめ暗記する。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	特になし		
成 績 評 価 方 法	定期試験(100%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	医学英語	授 業 形 態	講義
単 位 数	1単位	回 数	8回
履 修 年 次	2年前期・後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	上羽 由香 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	医学英語の理解とその必要性は昨今のグローバル社会では通訳者、翻訳者だけではなく、幅広い分野で必要とされつつあり、とくに医療従事者の基礎知識として必要とされるものへと変化してきている。医学誌・ウェブサイトでの情報収集、論文の執筆、国際学会での発表などにおいて不可欠である医学英語について学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学生は英語を学ぶ必要性を考え、医学英語学習の理解を深める。</li> <li>2. 学生は医療に関連する語彙を構築し、その学習方法を習得する。</li> <li>3. 医学論文の検索方法など、専門職が必要とする情報収集の方法を習得する。</li> <li>4. 医学論文の成り立ち、構成を学ぶことで、基礎的な読解力を身につける。</li> <li>5. 学会発表やその後の討議、交流の場でのコミュニケーションに親しむ。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	医療従事者が医学英語を学ぶ必要性とその学習法について	
	2	語彙構築①～医療英単語の構成について～	
	3	語彙構築②～医療分野・部位別～	
	4	医学論文検索とその方法について	
	5	医学論文の構成とその読解①	
	6	医学論文の構成とその読解②	
	7	英語を用いたコミュニケーション/プレゼンテーション①	
8	英語を用いたコミュニケーション/プレゼンテーション②		
教 科 書	藤枝 宏壽(編)『これだけは知っておきたい 医学英語の基本用語と表現(日本語)』第3版 メディカルビュー社 清水 雅子(著)『リハビリテーションの基礎英語』第3版 メディカルビュー社		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	語学の学習は、積極的な授業参加のみならず、日々の自主的な学習が不可欠である。授業前に、ノートや配布資料・教科書の予習・復習を最低30分すること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	『アクセプトされる英語医学論文を書こう!』ネル・ケネディ著/メディカルビュー社 『PT・OTが書いたリハビリテーション英会話』三木 貴弘共著/メディカルビュー社		
成 績 評 価 方 法	提出物(予習・復習、授業ノート)50%(評価内訳:見やすく構成されているか、工夫がなされているか、予習や復習の自主的な学びがみられるか)、小テスト(3回)30%、参加態度20%		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業前後		

授 業 科 目 名	解剖学 I (総論・神経系)	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	1年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	高野 康夫、田口 尚弘 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	医療に携わる専門職に就く者として、人体の生体の正常な構造を正しく理解することは必須である。系統解剖学の立場から、中枢神経、末梢神経、感覚器について学修する。中枢神経系は脳と脊髄から構成され、外界からの情報を受容し、その情報を処理、統合して行動、情動、思考、記憶など高度な指令を出す重要な部分である。これらの形態と構造に関わる基礎的知識を修得する。末梢神経では、感覚器により得られた外界の情報を中枢神経に送り、中枢神経系からの出力情報を末梢効果器に伝える神経系について学習する。さらに運動神経系、感覚神経系、自律神経系の機能と形態との関連性について習得する。併せて解剖学用語などの医学用語を修得する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 解剖学の基本的な人体の形態と構造を理解することができる。</li> <li>2. 中枢神経系 (脳・脊髄) の構造・機能を理解する。</li> <li>3. 中枢神経系における神経路 (伝導路) を理解する。</li> <li>4. 末梢神経系 (脳神経・脊髄神経・自律神経) の基本構成やその走行、ならびにその傷害されやすい部位を理解することができる。</li> <li>5. 感覚器系 (外皮、視覚器、平衡聴覚器、嗅覚器、味覚器) の構造および構成を理解することができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	解剖学総論、組織学	
	2	神経系総論	
	3	大脳	
	4	脳幹・小脳	
	5	末梢神経 (脊髄神経)	
	6	末梢神経 (脳神経・自律神経)	
	7	感覚器系 (視覚器・嗅覚器・味覚器)	
	8	感覚器系 (平衡聴覚器・外皮)	
教 科 書	<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 「標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 解剖学」シリーズ監修 奈良勲、鎌倉矩子、編集 野村巖、最新版、医学書院</li> <li>(2) 「プロメテウス解剖学コアアトラス」最新版、監訳 坂井建雄、医学書院</li> </ol>		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	復習はその日に必ず済ませ、疑問点は参考書で調べて能動的に問題解決能力を養ってください。また予習を行い、予備知識を入れて講義に臨み、積極的に質問して専門知識をより吸収するようにして下さい。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 「プロメテウス解剖学アトラス 頭頸部/神経解剖」第2版、2014、監訳 坂井建雄、河田光博、医学書院、(ISBN978-4-260-01441-0)</li> <li>(2) 「グレイ解剖学」原著第2版、2013、訳塩田浩平、瀬口春道、大谷浩、杉本哲夫、エルゼビア・ジャパン(株) (ISBN978-4-86034-773-4)</li> <li>(3) 「イラスト解剖学」第9版、2017、松村譲児、中外医学社 (ISBN978-4-498-00043-8)</li> </ol>		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (60%)、小試験 (10%)、レポート (20%)、積極的な授業参加態度 (10%) の結果を総合して評価する。		
オ フ ィ ス ア ウ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	解剖学Ⅱ (内臓・脈管系)	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	1年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	高野 康夫、田口 尚弘 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	内臓系と脈管系を中心に人体の正常構造について系統解剖学の立場から基本的な概念と知識の習得を目指す。臨床系専門科目に先駆けて、心臓血管系、リンパ系、消化器系、呼吸器系、泌尿生殖器系、内分泌系など多岐におよぶ学習範囲を系統立てて学修する。単なる名称の記憶にとどまらず、形態と機能との関わりを考え、医療に携わる者として基盤となる知識や論理性のある思考能力を身につける。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 脈管系を構成する動脈・静脈と心臓の構造を理解できる。</li> <li>2. 体循環、肺循環、胎児循環を理解できる。</li> <li>3. 全身の動脈と静脈分布ならびにその分布相違を理解できる。</li> <li>4. リンパ系の構成を理解できる。</li> <li>5. 消化器系を構成する各器官の形態・構造や位置を理解できる。</li> <li>6. 呼吸器系を構成する各器官の形態・構造や位置を理解できる。</li> <li>7. 泌尿器系を構成する各器官の形態・構造や位置を理解できる。</li> <li>8. 生殖器系を構成する各器官の形態・構造や位置を理解できる。</li> <li>9. 内分泌系を構成する各器官の形態・構造や位置、分泌ホルモンを理解できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	脈管系Ⅰ (心臓)	
	2	脈管系Ⅱ (動脈・静脈・リンパ)	
	3	消化器系Ⅰ (口腔・咽頭・食道・胃・小腸)	
	4	消化器系Ⅱ (大腸・肝臓・胆嚢・膵臓)	
	5	呼吸器系	
	6	泌尿器系	
	7	生殖器系 (男性・女性)	
	8	内分泌系	
教 科 書	(1)「標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 解剖学」シリーズ監修 奈良勲、鎌倉矩子、編集 野村嶺、最新版、医学書院 (2)「プロメテウス解剖学コアアトラス」最新版、監訳 坂井建雄、医学書院		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	復習はその日に必ず済ませ、疑問点は参考書で調べて能動的に問題解決能力を養ってください。また予習を行い、予備知識を入れて講義に臨み、積極的に質問して専門知識をより吸収するようにして下さい。		
履 修 の 条 件	特になし。		
参 考 文 献	(1)「プロメテウス解剖学アトラス：胸部/腹部・骨盤部」第2版、2015、監訳 坂井建雄、大谷修、医学書院、(ISBN978-4-01411-3) (2)「グレイ解剖学」原著第2版、2013、訳 塩田浩平、瀬口春道、大谷浩、杉本哲夫、エルゼビア・ジャパン(株) (ISBN978-4-86034-773-4) (3)「イラスト解剖学」第9版、2017、松村譲児、中外医学社 (ISBN978-4-498-00043-8)		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (60%)、小試験 (10%)、レポート (20%)、積極的な授業参加態度 (10%) の結果を総合して評価する。		
オ フ ィ ス ア ウ ー	随時 (要予約)		

授業科目名	解剖学Ⅲ(骨格系)	授業形態	講義
単位数	1	回数	8回
履修年次	1年後期	必修・選択	選択
科目担当者	高野 康夫、田口 尚弘(兼任)		
授業の概要・目的	人体の基礎を構成し、運動器系の重要な器官である骨について分類・構造・発生などの総論と、それぞれの骨の部位や形態・特徴などを学修する。解剖学的用語を理解する模型を用いてそれが何骨で、特徴的な部位を指し、名称・付属するものを答えることができる。何骨と何骨が接し、何関節を構成しているかを理解する。関節の形態や動きによる分類ができる筋の解剖学的用語を理解する骨の基本的構造を知る。		
授業の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 総論的に骨の構造、発生・成長や連結を説明できる。</li> <li>2. 骨の構造・骨格の成り立ち、関節の構造・種類や補強構造物について説明できる。</li> <li>3. 頭蓋の構成・構造や特徴を説明できる。</li> <li>4. 脊柱および胸郭の構成・構造や特徴を説明できる。</li> <li>5. 人体の関節ならびにその運動と関連靭帯とについて説明できる。</li> <li>6. 上肢帯の骨と自由上肢の骨の構造と名称や特徴を説明できる。</li> <li>7. 上肢帯の骨の連結、自由上肢骨の連結とその運動、および関連靭帯を説明できる。</li> <li>8. 下肢帯の骨、自由下肢の骨の構造と名称や特徴を説明できる。</li> <li>9. 下肢帯の骨の連結、自由上肢骨の連結とその運動、およびこれら関連靭帯を説明できる。</li> </ol>		
授業計画	回	内容	
	1	骨学総論、靭帯学総論	
	2	頭蓋・下顎骨およびその連結・靭帯	
	3	脊柱およびその連結・靭帯	
	4	胸郭・骨盤骨格およびその連結・靭帯	
	5	上肢の骨(上肢帯・自由上肢の骨)	
	6	上肢の骨の連結・靭帯	
	7	下肢の骨(下肢帯・骨盤・自由下肢の骨)	
	8	下肢の骨の連結・靭帯	
教科書	<ol style="list-style-type: none"> <li>(1)「標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 解剖学」シリーズ監修 奈良勲、鎌倉矩子、編集 野村蟻、最新版、医学書院</li> <li>(2)「プロメテウス解剖学コアアトラス」最新版、監訳 坂井建雄、医学書院</li> </ol>		
事前事後の予習復習	「解剖学Ⅲ」はリハビリ関連専門科目の中で基礎となる重要な科目です。内容的に難解で専門的な医学用語や膨大な学習知識を必要としますので、復習はその日に必ず済ませ、疑問点は参考書で調べて能動的に問題解決能力を養ってください。また予習を行い、予備知識を入れて講義に臨み、積極的に質問して、講義内容をより吸収するようにして下さい。		
履修の条件	特になし		
参考文献	<ol style="list-style-type: none"> <li>(1)「プロメテウス解剖学アトラス 解剖学総論・運動器系」第2版、2011、監訳 坂井建雄、松村譲児、医学書院(ISBN 978-4-260-01068-9)、</li> <li>(2)「グレイ解剖学」原著第2版、2013、訳塩田浩平、瀬口春道、大谷浩、杉本哲夫、エルゼビア・ジャパン(株)(ISBN978-4-86034-773-4)</li> <li>(3)「イラスト解剖学」第9版、2017、松村譲児、中外医学社(ISBN978-4-498-00043-8)</li> </ol>		
成績評価方法	定期試験(60%)、小試験(10%)、レポート(20%)、積極的な授業参加態度(10%)の結果を総合して評価する。		
オフィスアワー	随時(要予約)		

授 業 科 目 名	解剖学Ⅳ (筋系)	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	1年後期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	高野 康夫、田口 尚弘 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	医療に携わる専門職に就く者として、人体の生体の正常な構造を正しく理解することは必須である。この科目では、筋ならびに筋を支配する神経についての構造と役割・特性について知り、人体の構造を立体的に捉え、関節と運動の仕組みについて学修する。具体的には、肩関節・肘関節、手関節、手指の関節、股関節、膝関節、足関節、体幹 (頸椎・胸椎・腰椎・仙椎) に関与する筋、神経について、名称とその概要について学ぶ。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 骨格筋の一般的な構造と機能を説明できる 2. 人体の主要な骨格筋の名称、構造 (起始・停止・走行)、支配神経、作用を理解する。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	筋学総論・頭頸部の筋	
	2	体幹前面の筋	
	3	体幹後面の筋	
	4	上肢帯・上肢の筋	
	5	前腕・手の筋	
	6	骨盤・殿部の筋	
	7	大腿・下肢の筋	
	8	足の筋、肢・下肢の断層解剖	
教 科 書	(1)「標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 解剖学」シリーズ監修 奈良勲、鎌倉矩子、編集 野村巖、最新版、医学書院 (2)「プロメテウス解剖学コアアトラス」最新版、監訳 坂井建雄、医学書院		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	「解剖学Ⅳ」はリハビリ関連専門科目の中で基礎となる重要な科目です。内容的に難解で専門的な医学用語や膨大な学習知識を必要としますので、復習はその日に必ず済ませ、疑問点は参考書で調べて能動的に問題解決能力を養ってください。また予習を行い、予備知識を入れて講義に臨み、積極的に質問して講義内容をより吸収するようにして下さい。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	(1)「プロメテウス解剖学アトラス 解剖学総論・運動器系」第2版、2011、監訳 坂井建雄、松村譲児、医学書院 (ISBN 978-4-260-01068-9), (2)「グレイ解剖学」原著第2版、2013、訳 塩田浩平、瀬口春道、大谷浩、杉本哲夫、エルゼビア・ジャパン (株) (ISBN978-4-86034-773-4) (3)「イラスト解剖学」第9版、2017、松村譲児、中外医学社 (ISBN978-4-498-00043-8)		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (60%)、小試験 (10%)、レポート (20%)、積極的な授業参加態度 (10%) の結果を総合して評価する。		
オ フ ィ ス ア ウ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	生理学 I (動物性機能)	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	15 回
履 修 年 次	1 年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	椛 秀人 (兼任)、大迫 洋治 (兼任)、奥谷 文乃 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	人が環境に適応して活動する上で働く神経系の機能、すなわち動物の生理機能について、感覚機能、運動機能、高次脳機能などを通して学修する。主な学修内容としては「生理学の基礎」「神経・筋肉の基本的機能」「神経系の機能/概説 (自律神経系を含む)」「感覚機能」「運動機能」「神経系の高次機能」である。これらの学修を通して、人の感覚・運動機能や高次脳機能の神経メカニズムについて理解を深める。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 神経の興奮・伝導とシナプス伝達の機構を説明できる。</li> <li>2. 骨格筋細胞の興奮から収縮に至るまでの一連の過程を説明できる。</li> <li>3. 自律神経系の経路と働きを説明できる。</li> <li>4. 感覚受容器における生体電気信号への変換機構、感覚伝導路、感覚情報処理の特徴、感覚障害について説明できる。</li> <li>5. 運動の反射性調節、随意運動の制御系、運動中枢の障害について説明できる。</li> <li>6. 学習と記憶、情動、睡眠・覚醒の神経機構を概説できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	生理学の基礎	
	2	神経の基本的機能 (1)	
	3	神経の基本的機能 (2)	
	4	筋肉の基本的機能	
	5	神経系の機能/概説 (自律神経系を含む)	
	6	感覚機能 (1)	
	7	感覚機能 (2)	
	8	感覚機能 (3)	
	9	感覚機能 (4)	
	10	感覚機能 (5)	
	11	運動機能 (1)	
	12	運動機能 (2)	
	13	運動機能 (3)	
	14	神経系の高次機能 (1)	
15	神経系の高次機能 (2)		
教 科 書	貴邑 富久子、根来 英雄 著『シンプル生理学』改訂第7版 南江堂		
事前事後の予習復習	予習は、シラバスの確認とテキストならびに配付資料を読んでおく。復習は、講義板書、パワーポイント資料、配付資料等を参照して、要点をまとめる。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	本間研一 監修『標準生理学』第9版 医学書院 坂井 建雄、河原 克雅 編集『人体の正常構造と機能』第3版 日本医事新報社		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (100%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	生理学Ⅱ (植物性機能)	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	1年後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	梶 秀人 (兼任)、田中 健二郎 (兼任)、大塚 智子 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	人体の生命維持に関わる生理機能の仕組み、すなわち植物的生理機能について、細胞の働きから各臓器の機能を通して学修する。主な学修内容としては「細胞の生理機能」「内分泌・生殖・発生」「消化と吸収」「血液」「循環と呼吸」「腎臓」「代謝と体温、老化」である。これらの学修を通して、医療人として必要とされる生命活動やその維持機能に関して科学的視点から学習を行う。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 各内分泌器官から分泌されるホルモンの産生・作用・分泌調節・分泌異常を説明できる。</li> <li>2. 生殖腺・脳の性分化、性周期発現の機序、精子形成の過程を説明できる。</li> <li>3. 栄養補給系の全体像を説明できる。</li> <li>4. 心筋細胞の電気現象、心臓の刺激伝導系、心電図のポイントを説明できる。</li> <li>5. 心拍出量・血圧の調節機序、毛細血管における物質交換の機序を説明できる。</li> <li>6. 血中酸素・二酸化炭素の運搬・処理機序、重炭酸緩衝系、呼吸の調節機序を説明できる。</li> <li>7. 腎尿管各部における再吸収・分泌機序と尿濃縮の機序を説明できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	細胞の生理機能、内部環境とホメオスタシス	
	2	内分泌 (1)	
	3	内分泌 (2)	
	4	内分泌 (3)	
	5	生殖・発生	
	6	消化と吸収 (1)	
	7	消化と吸収 (2)	
	8	消化と吸収 (3)	
	9	血液	
	10	循環と呼吸 (1)	
	11	循環と呼吸 (2)	
	12	循環と呼吸 (3)	
	13	腎臓 (1)	
	14	腎臓 (2)	
15	代謝と体温、老化		
教 科 書	貴邑 富久子、根来 英雄 著『シンプル生理学』改訂第7版 南江堂		
事前事後の予習復習	予習は、シラバスの確認とテキストならびに配付資料を読んでおく。復習は、講義板書、パワーポイント資料、配付資料等を参照して、要点をまとめる。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	本間研一 監修『標準生理学』第9版 医学書院 坂井 建雄、河原 克雅 編集『人体の正常構造と機能』第3版 日本医事新報社		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (100%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	運動生理学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	1年後期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	大倉 三洋、辻 博明		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	<p>運動生理学とは、身体運動によってヒトの生理機能にどのような変化が生じるのか、その現象と仕組みについて理解する学問である。解剖学や生理学を基礎として、運動時における身体機能の変化やトレーニングによる適応性について学習することで、医療現場や健康増進活動、スポーツ現場において必要とされる運動生理学の基礎知識を身につける。</p>		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 運動療法の基盤となる運動生理学の概要について修得する。</li> <li>2. 患者の体力、生活習慣病や介護予防の面から体力の概念、重要性について修得する。</li> <li>3. 筋機能（筋力、筋パワー、筋持久力）に関する運動生理学的知識を修得する。</li> <li>4. 運動と神経系（中枢神経、末梢神経）に関する運動生理学的知識を修得する。</li> <li>5. 運動と代謝に関する運動生理学知識を修得する。</li> <li>6. 運動と呼吸機能の関係について運動生理学面から理解を深める。</li> <li>7. 運動と循環機能の関係について運動生理学面から理解を深める。</li> <li>8. 各体力要素に対する運動処方理論を修得する。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	運動生理学と理学療法	
	2	運動と体力	
	3	運動と筋肉	
	4	運動と神経	
	5	運動と代謝	
	6	運動と呼吸	
	7	運動と循環	
8	運動処方理論		
教 科 書	石井喜八、宮下充正・他 『新訂 運動生理学概論』 大修館書店 配布資料		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習は授業前に配布する資料中心に教科書と合わせて読んでおくこと。復習は配布資料と講義内容を参照にして要点をまとめること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	石河利寛・他 『運動生理学』 建帛社 朝山正己・他 編 『イラスト 運動生理学』 東京教学社		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (100%)		
オ フ ィ ス ア ウ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	運動生理学実習	授 業 形 態	実習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	2年前期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	大倉 三洋、辻 博明、稲岡 忠勝、有光 一樹		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	運動を行うと、心拍数の増加、呼吸機能の亢進、また体温の上昇といった現象が見られるように、運動と器官系の機能は密接に関連している。運動生理学で学習した呼吸、循環、筋活動等の生理現象を実際に把握するため、運動中の人体の生理学的応答を測定する実習を行う。運動によって起こる身体機能の一時的変化や適応現象を観察し、データの収集、処理および考察をすすめる。具体的には、生理学のための弱電（呼吸数、心拍数、血圧、体温、皮膚温の測定）、運動時心拍数の測定、心電図の測定などである。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生体生理現象の測定に関して、測定機器の作成方法あるいは使用方法や測定意義などを修得できる。</li> <li>2. 実験デザインの作成方法を修得する。</li> <li>3. 実習を通し、収集されたデータの処理及び解析方法を修得する。</li> <li>4. 解析されたデータについて、他験者も含めた変化に対して運動生理学的に考察ができる。</li> <li>5. 実験報告レポートの正しい作成方法を修得する。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	授業ガイダンス、筋力・筋持久力の測定 I	
	2	筋力・筋持久力の測定 II	
	3	筋電図の測定	
	4	筋電図の解析（積分筋電図）	
	5	運動生理学のための弱電 I（エレクトロゴニオメータ）	
	6	運動生理学のための弱電 II（ホイートストーンブリッジ）	
	7	エルゴメトリー I（呼吸代謝データの測定及び無酸素性代謝閾値の測定）①	
	8	エルゴメトリー I（呼吸代謝データの測定及び無酸素性代謝閾値の測定）②	
	9	エルゴメトリー II（全身持久性：PWC170 の測定など）①	
	10	エルゴメトリー II（全身持久性：PWC170 の測定など）②	
	11	エルゴメトリー III（心拍数、呼吸数、体温の測定）①	
	12	エルゴメトリー III（心拍数、呼吸数、体温の測定）②	
	13	心電図測定 I（安静時 12 誘導心電図の測定）	
	14	心電図測定 II（運動負荷時の心電図測定及び運動前-中-後の血圧変化）①	
15	心電図測定 II（運動負荷時の心電図測定及び運動前-中-後の血圧変化）②		
教 科 書	宮下充正、石井喜八・他 編著 『新訂運動生理学概論』 大修館書店		
事前事後の予習復習	予習はオリエンテーション時に配布する実験デザインプリントを各実験前に熟読し、その項目に関する事前学習を配布プリント、教科書及び参考資料より学習してくる。復習は各課題に応じた収集資料、採点后に返却される各教員からのレポート添削をまとめ、見直すと共に 1～5 の目標が達成できるまで練習やレポート指導を受けること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	中村隆一、齋藤宏・他 『基礎運動学』第6版補訂 医歯薬出版 真島英信・他 『人体生理の基礎』 杏林書院		
成 績 評 価 方 法	各課題における実験レポート（100%）		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	基礎運動学	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	1年後期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	重島 晃史		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	人間が運動する場合、筋・骨格系のみならず人間の正常な身体運動の発生機序と、それに関わる身体構造と機能の関係を学習する。具体的には、運動の成り立ち、力学の基礎、人体の重心、支持基底面と重心線との関係、全身の重心と分節構造、角加速度と慣性モーメント姿勢とその制御などで、この種類と人体での作用の例、この力学的有利性、身体重心と安定性について学ぶ。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 全身の主要な関節とその関節運動を説明できる。</li> <li>2. 運動の観察と分析の手法が理解できる。</li> <li>3. 身体運動における「てこ」とモーメントが理解できる。</li> <li>4. 身体の重心および安定性との関係が理解できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	オリエンテーション、運動学の概念と身体運動のとらえ方	
	2	運動学と運動力学	
	3	身体運動の面と軸	
	4	全身の主要な関節とその関節運動①	
	5	全身の主要な関節とその関節運動②	
	6	全身の主要な関節とその関節運動③	
	7	身体部位と運動の観察①	
	8	筋の作用と収縮様式①	
	9	筋の作用と収縮様式②	
	10	身体運動とてこの関係①	
	11	身体運動とてこの関係②	
	12	身体運動とてこの関係③	
	13	姿勢と安定性①	
	14	姿勢と安定性②	
15	身体動作の観察と分析		
教 科 書	中村隆一、他・著『基礎運動学第6版補訂』医歯薬出版株式会社 ヒントレ研究所 編 『PT・OT 基礎固めヒント式トレーニング 基礎医学編』改訂第2版 南江堂		
事前事後の予習復習	必要に応じて授業終了時に次回講義に関する予習内容を提示する。復習では授業で実施した課題を再度振り返り実施する。		
履 修 の 条 件	特記事項なし		
参 考 文 献	鎌倉矩子、他『PT・OT 学生のための運動学実習』三輪書店 藤澤宏幸、他『観察による運動・動作分析演習ノート』医歯薬出版株式会社 江原義弘、他『PT・OT・PO 身体運動の理解につなげる物理学』南江堂		
成 績 評 価 方 法	授業態度 (10%)、小テスト (40%)、定期試験 (50%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	運動機能学実習	授 業 形 態	実習
単 位 数	1	回 数	15 回
履 修 年 次	2 年前期	必 修 ・ 選 択	選択
担 当 教 員 名	相澤 徹、重島 晃史、有光 一樹		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	身体を構成する各関節について、正常な基本動作の関節運動メカニズムと動作特性について学修する。具体的には、関節運動の基礎、股関節、膝関節、足関節、脊椎、肩関節、肘関節の運動法則と運動のメカニズムについて学修する。本講義は、身体障害領域における評価・治療の基本となる知識を学ぶ。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 身体における各関節の解剖学的構造や機能を再理解し、身体動作運動との関連について習得する。 2. 解剖学及び運動学で学んだ専門用語を適切に活用できるようになる。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	授業ガイダンス・運動機能学概論 授業進行方法の説明、解剖学及び運動学における基礎用語、基礎知識の復習	
	2	股関節Ⅰ・解剖学的構造と特徴、運動に関わる筋	
	3	股関節Ⅱ・身体運動における関節の動きと特徴	
	4	膝関節Ⅰ・解剖学的構造と特徴、運動に関わる筋	
	5	膝関節Ⅱ・身体運動における関節の動きと特徴	
	6	足関節及び足部Ⅰ・解剖学的構造と特徴、運動に関わる筋	
	7	足関節及び足部Ⅱ・身体運動における関節の動きと特徴	
	8	肩甲帯・解剖学的構造と特徴、運動に関わる筋	
	9	肩甲帯及び肩関節・解剖学的構造と特徴、運動に関わる筋	
	10	肩甲帯及び肩関節・身体運動における関節の動きと特徴	
	11	肘関節・解剖学的構造と特徴、運動に関わる筋・身体運動時の関節の動きと特徴	
	12	手関節と手指Ⅰ・解剖学的構造と特徴、運動に関わる筋	
	13	手関節と手指Ⅱ・身体運動における関節の動きと特徴	
	14	脊椎Ⅰ・解剖学的構造と特徴、運動に関わる筋	
	15	脊椎Ⅱ・身体運動における関節の動きと特徴	
教 科 書	渡辺正仁 『PT・OT・STのための解剖学』第4版 廣川書店 中村隆一、齋藤宏、長崎浩 『基礎運動学』第6版 医歯薬出版		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	単元毎に授業プリントを配布するので、教科書と併せて熟読し、予習していただくこと。授業後は骨モデルなどで詳細を復習すること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	荻島秀男 監訳 『カバンディ関節の生理学 下肢 体幹 上肢』 医歯薬出版 井原秀俊 他訳 『関節・運動器の機能解剖 上肢・脊柱編 下肢編』 協同医書出版社		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (90%)、小テスト (10%)、ただしこの比率は若干変更する場合もある。		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	理学療法運動学演習	授 業 形 態	演習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	2年前期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	山崎 裕司・柏 智之		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	人間が動作するには、動作に必要な関節可動域、筋収縮、重心位置と支持基底面の関係を適切に保つバランス、動作学習の要素が必要である。授業では、動作と関節可動域、筋収縮、バランス、動作学習の関係について学ぶ。そして、起居動作や歩行・階段動作の観察、分析から、これらの動作に必要な関節可動域、筋収縮、バランスが理解できるように学習していく。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 動作中の関節可動域を見積もることができる。</li> <li>2. 動作中の筋活動が理解できる。</li> <li>3. 動作中の重心と支持基底面の関係が理解できる。</li> <li>4. 動作の獲得に必要な学習の働きが理解できる。</li> <li>5. 動作観察・分析からその動作に必要な関節可動域、筋活動、バランスが分析できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	授業ガイダンス、単関節運動中の関節可動域の見積もり	
	2	複合関節運動中の関節可動域の見積もり	
	3	動作中の関節可動域の見積もり①	
	4	動作中の関節可動域の見積もり②	
	5	単関節運動中の主動作筋の理解	
	6	主動作筋、拮抗筋、共同筋、固定筋、筋収縮様式の理解	
	7	動作中の主動作筋、筋収縮様式の見積もり①	
	8	動作中の主動作筋、筋収縮様式の見積もり②	
	9	動作中の重心位置と支持基底面の関係の理解、平衡機能とバランスの理解	
	10	支持基底面と視覚、前庭機能が立位バランスに与える影響の理解	
	11	運動学習の基本原則と基本手技	
	12	運動学習（車椅子のキャスター挙げ操作を題材として初めての動作の学習体験を実施）	
	13	動作観察練習（立ち上がり、起き上がり動作）動画の観察から動作中の関節可動域、筋活動、重心位置と支持基底面の変化を分析	
	14	動作観察練習（歩行1） ：動画の観察から歩行中の関節可動域変化、筋活動変化を分析	
15	動作観察練習（歩行2）動画の観察から歩行中の関節可動域変化、筋活動変化、重心位置と支持基底面の変化を分析		
教 科 書	ヒントレ研究所 編『PT・OT 基礎固めヒント式トレーニング 基礎医学編』 南江堂		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	授業終了時に次回の授業の予習内容を伝える。授業理解に欠かすことのできない、関節の運動方向、筋肉作用や関節可動域表現方法など基礎的知識の記憶を予習で行う。復習は、授業で行った練習課題をもう一度行う。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	山崎裕司・山本淳一 編 『リハビリテーション効果を最大限に引き出すコツ第2版』 三輪書店		
成 績 評 価 方 法	課題（10%）、小テスト（20%）、定期試験（70%）の結果を総合して評価する。		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	作業療法運動学演習	授 業 形 態	演習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	2年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	清水 一・石元美知子・有光 一樹		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	人が作業をする場合に必要となる運動制御と身体運動について、日常生活上の各種動作における運動学的分析について学修する。具体的には、運動神経回路の働きと各動作における運動コントロールを理解していく。また、日常生活の各種動作における手や上肢機能、姿勢、歩行などの移動について分析することで、身体障害領域における評価・治療の基本となる知識を学ぶ。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 人の動きを、解剖学と運動学に照合させ関節や筋肉の特性から特徴が説明できる。</li> <li>2. 人の動きを運動学の用語を用いて生体力学的に分析できる。</li> <li>3. 運動のタイプを神経系やエネルギー代謝・呼吸循環器系から説明できる。</li> <li>4. 姿勢・歩行を運動学的に分析して運動相(パターン)として説明することができる。</li> <li>5. 動作習熟の側面を運動速度、力、フォームから分析することができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	作業療法運動学演習授業概説と下肢帯および下肢の関節運動概説と演習	
	2	下肢帯と下肢の機能解剖演習	
	3	下肢帯および下肢の関節運動と演習と実習	
	4	上肢帯および上肢の関節運動概説と演習	
	5	上肢帯および上肢の関節運動(肩甲帯・肩関節)の演習と実習	
	6	上肢帯および上肢の関節運動(肘関節・前腕・手関節・指)の演習と実習	
	7	頭頸部・体幹の機能解剖演習	
	8	脊柱・体幹の関節運動の演習と実習	
	9	②EMGを用いた筋活動の分析(視覚、触覚、聴覚、二重課題反応時間)	
	10	③静止姿勢(重心(直接法と間接法)、アライメント、リーチ test)の分析	
	11	④姿勢と動作分析(記述による) 起き上がり、立ち上がり、把持様式…	
	12	⑤歩行分析(カメラあるいはスマホ動画による)	
	13	⑥呼吸と循環 運動負荷 6分間歩行 test、漸増シャトルウォーキング test	
	14	⑦運動学習分析(速度、筋力、エラー数、フォーム)の習熟特性	
15	総括と発表 ①から⑦班の成果発表 1班10分程度		
教 科 書	①理学療法・作業療法テキスト 運動学実習 中山書店 2016 ②PT・OT 基礎から学ぶ運動学ノート 第2版 医歯薬出版 2016		
事前事後の予習復習	各授業前日までに教科書の関係部分①ならびに②を精読しておくこと。 7班の集団で学習するが各班に1回ずつ担当部分の講義を課すので講義の準備も		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	基礎運動学 第6版 医歯薬出版		
成 績 評 価 方 法	提出演習レポート11回分(80%)と発表担当①から⑦のうち1回分(30%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	火曜日午後		

授 業 科 目 名	人間発達学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	1年後期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	中野 良哉 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	<p>生命が誕生するしくみと生まれるまでの各組織の発生、さらに乳幼児から小児期・少年期までの運動と認知機能および情意面の発達の違いやその特徴について学修する。これらの学修を通じて、人間が発達するために多くの支援や環境が必要であることの理解を深める。また、成人期・老年期そして死に至るまでの量的・質的变化(老化)の過程について、発達という観点から生理機能、運動機能および認知機能について考究し理解を深める。それぞれの時期に特徴的に出現する病気や障害について、人間のライフサイクルという視点に立って理解する。</p>		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 人間の心身の発達に興味を持つことができる。</li> <li>2. 発達の基本的な知識や概念を理解し、説明できる。</li> <li>3. 発達の順序、発達課題を理解することができる</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	発達理論・発達の研究法	
	2	胎児期・新生児期の発達	
	3	乳児期の発達	
	4	幼児期の発達	
	5	児童期の発達	
	6	青年期の発達	
	7	成人期・中年期の発達	
	8	高齢期の発達	
教 科 書	必要に応じて資料を配付する		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	<p>配布資料を事前に読んでくること。 授業の内容を復習し理解を深めること。</p>		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	適宜紹介する		
成 績 評 価 方 法	筆記試験を行い(100%)、総合評価する		
オ フ ィ ス ア ウ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	医学概論	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	1年後期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	吾妻 美子 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	臨床医学におけるその基本的考え方と基礎を理解し、医療人としての見識を学修する。具体的には、医学及び医療の歴史、感染症とその対策、生命倫理移植医療、インフォームド・コンセントなど再生医療、生命倫理、病気の診断と治療、リハビリテーションの役割、予防医学、生活習慣病の原因と予防法、平均寿命と健康寿命、老化と死などについて学ぶ。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 現代医療における基礎医学、臨床医学の各分野について理解することができる。</li> <li>2. 医学・医療の歴史と発展に貢献した人物について理解することができる。</li> <li>3. 移植医療、再生医療、ゲノム医療と生命倫理について考察することができる。</li> <li>4. 現代医療におけるリハビリテーションの役割について理解することができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	基礎医学と臨床医学、各医療職種とその果たす役割	
	2	医学及び医療の歴史	
	3	感染症（1）予防と消毒の方法	
	4	感染症（2）院内感染症とバイオハザード	
	5	平均寿命と健康寿命、老化と死	
	6	移植医療（臓器移植と骨髄移植）と生命倫理、インフォームド・コンセント	
	7	再生医療の基礎概念と生命倫理、現代および未来において果たす役割	
	8	ゲノム医療と生命倫理、ヒトの遺伝、がん遺伝子、遺伝カウンセリング	
教 科 書	日野原重明著『系統看護学講座 別巻 医学概論』医学書院 配布資料		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習は、シラバスの確認とテキストをよく読み問題点を明らかにしておく。復習は、講義板書ならびに配付資料を参照して、要点をまとめノートを整理する。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	ステイーブ・パーカー著『医療の歴史』創元社 服部成介著『よくわかるゲノム医学』羊土社		
成 績 評 価 方 法	定期試験（90%）、レポート（10%）、		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時（要予約）		

授 業 科 目 名	病理学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	1年後期	必 修 ・ 選 択	必須
科 目 担 当 者	吾妻 美子 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	<p>病気の原因、発生機序の解明や病気の診断を確定するのを目的とする学問であり、疾病の原因、経過および結果など、疾病の成り立ちについて学修する。具体的には、病理学理論、各種疾病の病態の概要、代謝異常、退行性病変、進行性病変（増殖と修復）、循環障害、炎症と免疫、感染症、腫瘍、放射線障害、老化、先天的異常および各種疾患について学ぶ。</p>		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 病理学の目的である病気の原因や発生機序を理解することができる。</li> <li>2. 医学、医療において病理診断が果たしている役割を理解することができる。</li> <li>3. 各種疾病の病態や臨床症状を学ぶことにより、患者の痛みや苦しみを理解することができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	病理学の概要と医療における病理診断の果たす役割。病気の原因	
	2	退行性病変（変性、萎縮、壊死 etc.）、進行性病変（肥大、化生 etc.）	
	3	代謝障害（蛋白質、アミノ酸、核酸、脂質、糖質、無機物質、色素）	
	4	循環障害（体液循環、局所の循環障害、全身循環障害）	
	5	炎症（原因、炎症細胞）、感染症（感染経路、病原微生物の種類と疾患）	
	6	免疫の概念、免疫不全、アレルギー、自己免疫疾患、移植	
	7	腫瘍（定義、原因、分類、形態、進展様式、発癌のメカニズム、治療法）	
8	先天異常、奇形（遺伝性疾患、染色体異常症、奇形）		
教 科 書	梶原博毅監修、横井豊治、村雲芳樹編集『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 病理学』医学書院、配布資料		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習は、シラバスの確認とテキストをよく読み問題意識を涵養しておく。復習は、講義板書ならびに配付資料を参照して、要点をまとめノートの整理をする。		
履 修 の 条 件	特になし。		
参 考 文 献	大橋健一、谷澤徹著『系統看護学講座 専門基礎分野 病理学』医学書院		
成 績 評 価 方 法	定期試験（100%）		
オ フ ィ ス ア ウ ー	随時（要予約）		

授 業 科 目 名	内科学	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	2年後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	小野 歩 (兼任)・田中 肇 (兼任)・竹中 奈奈 (兼任)・石元 篤雄 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	内科学の概念、おもな症状、臨床検査、治療法、主要な内科疾患などを理解する。内科疾患から起こる障害に対するハビリテーションを実施する際の基礎知識をつけ、実践の場で役立てられることを目的とする。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 内科の基本的な診察方法と検査方法について説明できるようになる。</li> <li>2. 内科の各疾患の症候と病態生理について説明できるようになる。</li> <li>3. 内科の各疾患の診断方法について説明できるようになる。</li> <li>4. 内科の各疾患の治療方法について説明できるようになる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	内科学総論、診療と治療の実際、治療 内科学の概念、内科臨床とリハビリテーション、臨床医学の実際、診断の進め方、臨床検査とデータの解析・治療、治療についての考え方の変化と新しい治療	
	2	循環器疾患総論① 心臓血管系の構造と働き、症候、身体診察、検査、高血圧	
	3	循環器疾患総論② 心臓血管系の構造と働き、症候、身体診察、検査、高血圧	
	4	循環器疾患各論① 心不全、虚血性心疾患、不整脈、弁膜症、心筋疾患、心膜疾患、先天性心疾患、大動脈疾患、末梢動脈疾患肺性心	
	5	循環器疾患各論② 心不全、虚血性心疾患、不整脈、弁膜症、心筋疾患、心膜疾患、先天性心疾患、大動脈疾患、末梢動脈疾患肺性心	
	6	呼吸器疾患総論 肺の構造と生理、症候と病態生理、診療、検査、呼吸器リハビリテーション、呼吸不全	
	7	呼吸器疾患各論 呼吸器感染症、慢性閉塞性肺疾患、びまん性汎細気管支炎、気管支喘息、拘束性肺疾患、腫瘍性肺疾患、胸膜疾患、異常呼吸	
	8	消化器疾患 消化管の解剖と生理、症候と病態生理、診断、口腔疾患、食道疾患、胃・十二指腸疾患、小腸・大腸疾患	
	9	肝・胆・膵疾患 肝・胆・膵の解剖と生理、症候と病態生理、検査、肝疾患、胆道疾患、膵疾患、腹膜疾患	
	10	血液・造血器疾患 血液の形態と生理、血液細胞の生成と分化、症候と病態生理、検査、赤血球系疾患、白血球系疾患、リンパ系疾患、異常蛋白血症、出血性疾患	
	11	腎・泌尿器疾患 腎の解剖と生理、症候と病態生理、検査、腎不全、糸球体疾患、尿管機能異常、腎硬化症、薬剤性腎障害、尿路疾患、腫瘍	
	12	代謝疾患 代謝調節、水・電解質代謝異常、糖尿病、高脂血症、肥満症、メタボリックシンドローム、痛風、骨粗鬆症	
	13	内分泌疾患 ホルモンの作用機序、内分泌腺の解剖生理、症候と病態、検査、下垂体疾患、甲状腺疾患、副甲状腺疾患、副腎疾患	
	14	膠原病・アレルギー性疾患・免疫不全 免疫総論、自己免疫性疾患（膠原病）、アレルギー疾患、免疫不全	
15	感染症 感染症総論、細菌感染症、ウイルス感染症、その他の感染症、寄生虫症		
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 内科学 第3版』医学書院		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習として、授業予定の内容について教科書の該当部分を読み把握しておくこと。 復習として、授業中に強調した部分を中心に教科書を読み、身につけるべき知識の再確認を行うこと。		
履 修 の 条 件	内科学で理解しなければならない事項が多いため、プリントの内容をスライドで提示しながら講義を進める。講義内容が多いため、かなりの集中力を要する。		
参 考 文 献	コメディカルのための内科学 第3版 医/学出版社		
成 績 評 価 方 法	期末試験 (100%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後に質問を受けつける。		

授 業 科 目 名	整形外科科学	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	2年後期	必 修 ・ 選 択	選択
担 当 教 員 名	相澤 徹		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	運動器疾患の構造と機能を理解し、整形外科的診断、治療法を理解する。骨折、脱臼、および神経、関節、脊椎、上肢、下肢の外傷、先天異常、骨軟部腫瘍、感染症、骨系統疾患、筋疾患、各関節脊椎の慢性・変性疾患について解説し、そこから生じる障害について学ぶ。		
授 業 の 到 達 目 標	整形外科における運動器の形態・機能・病態生理と評価・検査・治療方法、および総論的主要疾患等について、リハビリテーションに必要な基礎的知識と概念を獲得する。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	整形外科の基礎科学、整形外科診断総論	
	2	整形外科とリハビリテーション医学、四肢切断と義肢	
	3	骨・関節・筋肉の感染症、リウマチとその類縁疾患	
	4	慢性関節疾患（退行性、代謝性）、四肢循環障害と阻血壊死性疾患	
	5	先天性骨系統疾患と先天異常症候群、代謝性骨疾患	
	6	骨腫瘍、軟部腫瘍、神経疾患、筋疾患	
	7	肩関節、肘関節の外傷	
	8	手関節および手指の外傷	
	9	頸椎、胸郭、腰椎の外傷	
	10	股関節、膝関節、足関節と足趾の外傷	
	11	軟部組織損傷	
	12	骨折・脱臼総論	
	13	骨折・脱臼（上肢、下肢）、脊椎・脊髄損傷	
	14	末梢神経損傷	
15	スポーツ傷害、救急災害		
教 科 書	松野丈夫、中村利孝 総編集 『標準整形外科学』第12版 医学書院		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習は教科書の授業予定範囲を読んでおくこと。復習は講義内容を参照して要点をまとめること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	特になし		
成 績 評 価 方 法	定期試験（100%）		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	精神医学	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15
履 修 年 次	2年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	竹田 伸也 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	精神医学で取り扱う疾患および治療法について、正しい知識を身につけ精神疾患に対する理解を深めるとともに、精神障害の成因と分類、精神機能の障害と精神症状などについて学修する。具体的には、統合失調症、気分（感情）障害、不安障害、身体因性精神障害、認知症などの疾患についての理解を深める。また、精神障害の治療とリハビリテーションに応用できる心理社会的治療について、認知行動療法を通して実際の精神障害者への対応について学びを深める。さらに、メンタルヘルスについても学ぶ。		
授 業 の 到 達 目 標	精神医学の領域について、正しい知識を身につけ精神疾患にたいする理解を深める、適切な対応ができるようになること。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	精神医学とは	
	2	精神障害における症状	
	3	精神症状の捉え方	
	4	統合失調症、統合失調型障害および妄想性障害	
	5	精神作用物質使用による精神および行動の障害	
	6	気分（感情）障害	
	7	不安障害	
	8	身体因性精神障害	
	9	認知症	
	10	精神疾患に対する心理社会的治療	
	11	心理社会的治療におけるアセスメント	
	12	心理社会的治療における治療方針	
	13	精神障害者の行動変容	
	14	精神障害者の認知変容	
15	メンタルヘルス		
教 科 書	『認知行動療法による対人援助スキルアップ・マニュアル』遠見書房、配布資料		
事前事後の予習復習	教科書を事前に読んで、予習をしておくこと。講義後は疾患、治療的対応等をしっかりイメージしながら理解を深めるように学習すること。		
履 修 の 条 件	精神医学に関する各種新書を興味関心に応じて読むことが望ましい。		
参 考 文 献	『臨床につながる精神医学』医歯薬出版 『標準理学療法・作業療法 精神医学』第4版 医学書院		
成 績 評 価 方 法	定期試験100%		
オ フ ィ ス ア ワ ー	担当教員に相談の上随時対応可能。 対応可能かどうかを事前に授業前後にて確認することが望ましい。		

授 業 科 目 名	臨床神経学	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	2年前期・後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	倉田 浩充 (兼任)・金子 恵子 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	神経内科で取り扱う疾患の基本的知識を理解し、それに伴う神経症状について学修する。具体的には、神経内科総論、神経解剖学、神経心理学、神経診察、神経学的検査 (MRI・核医学)、脳梗塞、脳出血、くも膜下出血、パーキンソン病、認知症、脊髄小脳変性症、多系統萎縮症、筋萎縮性側索硬化症、多発性硬化症、ギラン・バレー症候群、重症筋無力症、筋ジストロフィーなどである。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 中枢神経系の解剖に応じた神経症状を理解する。</li> <li>2. 神経症状の評価方法を修得する。</li> <li>3. 中枢神経系の画像検査を理解する。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	神経学総論・神経学的評価Ⅰ	
	2	神経学的評価Ⅱ	
	3	神経解剖学・画像評価	
	4	脳卒中 閉塞性脳血管障害	
	5	脳卒中 出血性脳血管障害	
	6	脳卒中 評価・治療	
	7	頭部外傷	
	8	腫瘍性疾患	
	9	水頭症関連疾患・先天異常	
	10	感染症および炎症性疾患	
	11	神経変性疾患	
	12	神経筋疾患	
	13	認知症	
	14	脊髄脊椎疾患	
15	機能的神経徴候 (てんかん・疼痛・痙縮)		
教 科 書	配布資料		
事前事後の予習復習	神経に関する解剖学と生理学の復習をすること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	医療情報科学研究所編 病気がみえる Vol.7 脳・神経		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (100%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	小児科学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	2年後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	武市 知己 (兼任)・小倉 英郎 (兼任)・小谷 治子 (兼任)・三宅 典子 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	成長、発達段階にある小児の特性をふまえ、主にリハビリテーションに関連した小児疾患についての成因と症状などについて学修する。具体的には、小児科学概論、神経発達と乳幼児の行動、発達栄養と摂食、小児保健、小児の一時救命、新生児・未熟児疾患、先天異常と遺伝病、循環器疾患、感染症、消化器疾患、内分泌疾患、血液疾患、免疫・アレルギー疾患、膠原病、習癖、心身症、腎疾患、神経骨系統疾患、重症心身障害児などである。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 小児の神経発達の考え方を理解することができる。</li> <li>2. 小児疾患と小児リハビリテーションの関連を理解することができる。</li> <li>3. 小児リハビリテーションをそれぞれのライフステージに応じた、かつ包括的な医療として考えることができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	小児科学概論、発達概論	
	2	新生児、先天異常・遺伝	
	3	神経・筋・骨系統疾患	
	4	神経・筋・骨系統疾患	
	5	循環器、呼吸器、感染症	
	6	消化器、内分泌、血流、免疫アレルギー	
	7	心身症虐待、眼科、耳鼻科、重症心身障害児	
	8	重症心身障害児	
教 科 書	標準理学療法学・作業療法学「小児科」Ver. 5 医学書院 配布資料		
事前事後の予習復習	予習はシラバスの確認とテキストならびに配布資料を読んでおく。 復習は講義内容、配布資料を参照して要点をまとめる。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	正常発達 脳性まひ治療への応用 (初版) Jung Sun Hong 著 三輪書店 または 正常発達 (第2版) 脳性まひの治療アイデア Jung Sun Hong 著 三輪書店		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (100%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	リハビリテーション医学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	2年前期・後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	宮本 寛 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	リハビリテーション医学は実践的臨床医学の一つであり、各種の幅広い疾患と様々な障害に対して急性期より介入するものである。その介入手段は多岐にわたる。このためリハビリテーション医学の診断、検査、評価、治療の進め方と同時に、リハビリ医療は「急性期からリスクを管理しながら行う」ことの重要性を理解することを授業の目標とする。到達目標は、各疾患の評価とリハビリテーションの進め方の基本について学ぶ。		
授 業 の 到 達 目 標	急性期、回復期、生活期の各種疾患やそれにより生じる後遺障害に対するリハビリテーションの在り方や、臨床現場におけるリハビリテーションスタッフの役割や多職種との連携の仕方について理解する。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	リハビリテーションの臨床現場における多職種間関係	
	2	急性期におけるリハビリテーションの在り方	
	3	回復期におけるリハビリテーションの在り方	
	4	生活期におけるリハビリテーションの在り方	
	5	運動麻痺の回復過程	
	6	高次脳機能障害	
	7	ICF	
	8	リハビリテーション医学概観	
教 科 書	目で見えるリハビリテーション医学 上田 敏 東京大学出版会		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	自己判断に任せます。		
履 修 の 条 件	私語は絶対禁。座席指定なし。自主性を尊重。		
参 考 文 献			
成 績 評 価 方 法	筆記試験 (100%) 体調面・精神面の不調に対しては幅広く配慮します。講師または事務所に本人又は保護者等が口頭か書面又はその他の方法で相談してください。		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	臨床心理学	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	2年後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	西岡 駿 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	病院の患者や施設などの入居者の心理を系統的に学び、各々のケースの心理状態を客観的に把握することで、患者や入居者の心理を理解するための知識を習得する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 臨床心理学の基礎的な理論を理解することができる。</li> <li>2. 自己理解を深め、関係を客観視する力を養う。</li> <li>3. 支援のための関係を築く感性を身に着ける。</li> <li>4. こころを臨床心理学の知識を使って観察できるようになる</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	臨床心理学の誕生と発展	
	2	構成的グループエンカウンターとその活用	
	3	臨床心理面接	
	4	臨床心理アセスメント－質問紙法－	
	5	臨床心理アセスメント－面接法－	
	6	臨床心理アセスメント－投影法－	
	7	箱庭療法	
	8	精神疾患と具体的対応	
	9	不登校の心理臨床	
	10	発達障害のこころの理解	
	11	思春期のこころの理解	
	12	老年心理学	
	13	学校臨床心理学	
	14	アンガーコントロールとストレスマネジメント	
	15	心理臨床における生きづらさの理解	
教 科 書	必要に応じて資料を配付する		
事前事後の予習復習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 演習等適宜行うので、その日の自分のこころの状態に丁寧に気を配ること。</li> <li>・ 授業の内容を復習し理解を深めること。</li> </ul>		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	適宜紹介する		
成 績 評 価 方 法	筆記試験(100%)		
オ フィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	耳鼻咽喉科学	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	2年前期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	奥谷 文乃 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	ヒトをヒト以外の動物から区別する機能の一つに言語機能がある。ヒトの成長過程における言語機能の獲得は、聴覚による理解から始まり、つづいて発語（喉頭における発声に基づく）、最後に文字言語の使用へと進められる。耳鼻咽喉科学は言語理解の最も重要な聴覚機能、音声言語機能の障害をきたす種々の疾患を扱う学問である。本科目においては、言語聴覚士として最低限必要とされる耳鼻咽喉科領域の疾患に関する診断や治療といった知識を身につけ、理解を深める。		
授 業 の 到 達 目 標	言語聴覚士として最低限必要とされる耳鼻咽喉科領域の疾患に関する診断や治療といった知識を身につけ、理解を深める。特に鼻・口腔・咽頭の疾患を重点的に扱う。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	鼻の解剖生理	
	2	鼻・副鼻腔疾患①	
	3	鼻・副鼻腔疾患②	
	4	鼻・副鼻腔疾患③	
	5	鼻・副鼻腔疾患④	
	6	口腔・咽頭の解剖生理	
	7	口腔・咽頭疾患①	
	8	口腔・咽頭疾患②	
	9	口腔・咽頭疾患③	
	10	口腔・咽頭疾患④	
	11	口腔・咽頭疾患⑤	
	12	頸部・顔面の解剖生理	
	13	頸部・顔面疾患①	
	14	頸部・顔面疾患②	
15	頸部・顔面疾患③		
教 科 書	病気がみえる vol.13 耳鼻咽喉科 メディックメディア社		
事前事後の予習復習	講義終了後必ず復習をし、次回の小テストに備えること		
履 修 の 条 件	板書が多いので、十分な筆記具を用意すること。質問など、積極的な態度が望まれる。		
参 考 文 献	「新耳鼻咽喉科学」 野村恭也著 南山堂		
成 績 評 価 方 法	試験 (筆記) 80% 小テスト 20%		
オ フィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	形成外科学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	3年前期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	秋山 謙三（兼任）		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	生まれつき、あるいは病気や怪我で失われたり損なわれたりした身体の表面的異常を、主に手術という手段を用いて正常な形に近づける治療を行う医療分野について、主に口腔周辺の唇裂・口蓋裂を中心に、原因や治療法、また、言語聴覚士の役割について学ぶ。		
授 業 の 到 達 目 標	先天的疾患を持って生まれ乳幼児期より成人期まで社会生活を送るうえでの言語聴覚士さんの重要な役割を理解することができます。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	顎・顔面の発生と発育・構造について①	
	2	顎・顔面の発生と発育・構造について②	
	3	障害に対する歯科医学的治療法	
	4	手術療法・人工材料・再建による機能回復について①	
	5	手術療法・人工材料・再建による機能回復について②	
	6	手術療法・人工材料・再建による機能回復について③	
	7	手術療法・人工材料・再建による機能回復について④	
8	手術療法・人工材料・再建による機能回復について⑤		
教 科 書	言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学第2版 配布資料		
事前事後の予習復習			
履 修 の 条 件	なし		
参 考 文 献			
成 績 評 価 方 法	定期試験（100%）		
オ フ ィ ス ア ウ ー	随時（要予約）		

授 業 科 目 名	臨床歯科医学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	3年前期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	秋山 謙三 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	80歳までに自分の歯を20本残す8020運動のように、人の健康において、歯はとても重要なものである。歯科医学の基礎および臨床的な知識を学び口腔機能について理解を深めてもらう。口腔は消化器の一部であり、また、摂食、嚥下、発音に関する重要な器官である。口腔内だけでなく、顔面や頸部の発育や構造、機能、特性を十分に認識し、種々の疾患についての理解を深め、機能障害の診断や治療を学ぶことによって、口腔機能障害の予防と回復に役立てるようにする。		
授 業 の 到 達 目 標	口腔と言語・摂食・嚥下との関連についてと言語聴覚士さんの役割と必要性を理解することができます。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	歯・口腔・顎・顔面の構造と機能について①	
	2	歯・口腔・顎・顔面の構造と機能について②	
	3	歯・歯周組織疾患及び歯科医厚的処置について	
	4	口腔・顎・顔面の疾患について①	
	5	口腔・顎・顔面の疾患について②	
	6	口腔・顎・顔面の疾患について③	
	7	咀嚼・摂食・嚥下・構音障害について①	
	8	咀嚼・摂食・嚥下・構音障害について②	まとめ
教 科 書	言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学第2版 配布資料		
事前事後の予習復習	教科書に目を通しておいて下さい。		
履 修 の 条 件	なし		
参 考 文 献	言語聴覚士に必要な歯科の知識 インテル出版		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (100%)		
オ フ ィ ス ア ウ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	画像診断学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	3年前期・後期	必 修 ・ 選 択	選択必修
科 目 担 当 者	伊東 賢二（兼任）		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	各種撮像法の基本原理と画像診断の理論について学修し、リハビリテーション専門職が扱う代表的疾患の画像に関する知識を学ぶ。具体的には、CT、MRI、超音波画像、単純写真などの正常画像を把握する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 各種画像検査法の原理と特徴を理解する。</li> <li>2. 診療用画像の基礎知識を修得する。</li> <li>3. 各部位（臓器）におけるX線写真、CT画像、MR画像を理解する。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	画像診断機器・検査の原理と基礎（Ⅰ）	
	2	画像診断機器・検査の原理と基礎（Ⅱ）	
	3	胸部単純撮影・肺・縦隔の画像診断の基礎	
	4	中枢神経・頭頸部の画像診断	
	5	体幹部の画像診断（脊椎・脊髄）	
	6	体幹部の画像診断（腹部・骨盤・四肢）	
	7	血管造影検査・IVRの原理と基礎	
	8	核医学検査の原理と基礎	
教 科 書	授業毎の講義資料		
事前事後の予習復習	復習：配布資料を確認のこと		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	PT・OT 基礎から学ぶ画像の読み方（医歯薬出版） X線画像解剖ポケットアトラス（メディカルサイエンスインターナショナル） CT・MRI 画像解剖ポケットアトラス（メディカルサイエンスインターナショナル）		
成 績 評 価 方 法	試験（国家試験形式設問）		
オ フ ィ ス ア ウ ー	授業終了後、質問を受け付けます		

授 業 科 目 名	臨床栄養学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	3年前期・後期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	渡邊 慶子 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	<p>社会の変化は食生活を豊かにした一方、生活習慣病の増加など様々な問題を引き起こしている。食事は単に栄養素を摂取することだけでなく、心身の順調な発育・発達や成熟を促し、健康な生活を営むための基礎である。この科目では、栄養学の基本となるエネルギーや栄養素、食品の非栄養成分などを学修し、病気の原因や治療に関して理解を深める。</p>		
授 業 の 到 達 目 標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・臨床におけるリハビリテーション栄養の意義と栄養の基礎について理解できる。</li> <li>・傷病者・要介護者への栄養ケアプロセスの手法が理解できる。</li> <li>・病態、疾患に対応した栄養療法が理解できる。</li> <li>・NST (栄養サポートチーム) について説明できる。</li> </ul>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	リハビリテーションにおける栄養の意義 NST (栄養サポートチーム) の実際 栄養ケアプロセス	
	2	栄養の基礎 ①栄養補給ルート ②エネルギー代謝 ③栄養素の役割	
	3	④運動時の栄養 ⑤栄養不良時の栄養 ⑥侵襲時の栄養 小テスト① 課題①	
	4	小テスト①フィードバック 課題①発表	
	5	主な病態の栄養療法 ①低栄養 ②摂食・嚥下障害	
	6	4. 主な病態の栄養療法 ②フレイル ④サルコペニア ⑤メタボリックシンドローム 小テスト② 課題②	
	7	主な疾患の栄養療法 ①脳卒中 ②がん ③脊椎損傷 ④大腿骨近位部骨折 小テスト②フィードバック 課題②フィードバック	
	8	主な疾患の栄養療法 ⑤慢性閉塞性肺疾患 ⑥慢性心不全 ⑦褥瘡 まとめ	
教 科 書	柏下淳、若林秀隆 編著. リハビリテーションに役立つ栄養学の基礎 第2版. 医歯薬出版.		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習: テキストを事前に熟読し、疑問点、質問事項をまとめておくこと (1時間) 復習: テキスト、配布資料、ノート等で理解を深めること (3時間)		
履 修 の 条 件	病態生理の復習をしておくこと。		
参 考 文 献	<ul style="list-style-type: none"> <li>・岡田晋吾 編著 キーワードでわかる臨床栄養 令和版 羊土社 2020年</li> <li>・イラスト 症例からみた臨床栄養学 第3版 福井富穂、他 著. 東京教学社</li> </ul>		
成 績 評 価 方 法	試験40%、課題30% 小テスト20% 授業への取り組み10% 課題の内容などで習熟度を評価する (3点×10回 3点: 重要点を十分理解している 2点: 重要点の理解があいまいである 1点: 項目の列挙にとどまっている)。小テストの結果について解説を配布してフィードバックする。		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業後または、メールにて質問を受け付ける。最初の授業でメールアドレスを伝える。		

授 業 科 目 名	臨床薬理学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	3年前期・後期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	小野川 雅英 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	生体内における医薬品の標的である受容体や酵素といった様々な機能性分子と、化学物質である医薬品との相互作用を明らかにすることで医薬品の薬理作用機序を解明することができる。この科目では、薬理学の基本的な考え方を学修し、種々な薬物の薬理作用や有害事象についても学ぶ。		
授 業 の 到 達 目 標	薬物を用いた疾病の治療と効果や副作用について理解し、薬物を投与した際の管理や観察における基本的な知識について習得する。 また、薬物によって起こりうる有害事象を理解し、理学療法・作業療法における注意点を説明できるようになる。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	薬を理解するために必要な基礎知識①	
	2	薬を理解するために必要な基礎知識②	
	3	感染・炎症の制御と薬物療法	
	4	神経疾患の薬物療法	
	5	精神疾患の薬物療法	
	6	循環器系の薬物療法	
	7	疼痛の制御と薬物療法	
	8	注意すべき頻用される薬物	
教 科 書	リハベーシック 薬理学・臨床薬理学		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	教科書の該当箇所を一読する、配布資料を確認する		
履 修 の 条 件			
参 考 文 献			
成 績 評 価 方 法	期末試験 100%		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後と、随時メールにて受け付ける		

授 業 科 目 名	救急管理実習	授 業 形 態	実験・実習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	3年前期・後期	必 修 ・ 選 択	選択
科 目 担 当 者	吉岡 邦展 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	医療職として、病気やけが、災害などの緊急時に、自分自身を守り、けが人や急病人を正しく救助し、医師や救急隊に引き継ぐことは重要な役割である。この科目では、救命手当・応急手当に関する知識と技術を学修し、心肺蘇生、AEDの使用方法、気道異物除去などについて学ぶ。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 不慮の事故や疾病に対して応急的に実施されるべき救急処置の技術や知識を習得する。</li> <li>2. 怪我及び体調不良、健康障害による急性期症状を理解する。</li> <li>3. 怪我及び体調不良、健康障害による急性期症状に対する対応を選択できる。</li> <li>4. 救命処置のうち、人工呼吸について必要な知識と技術を習得する。</li> <li>5. 救命処置のうち、胸骨圧迫について必要な知識と技術を習得する。</li> <li>6. 救命処置のうち、自動体外式除細動器 (AED) について必要な知識と技術を習得する。</li> <li>7. 受傷時及び体調不良時の応急処置のうち、適切な方法を選択し、対応できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	授業ガイダンス 救急法概論1・急変・受傷時の急性期症状とその対応方法	
	2	救急法概論2・心肺蘇生法 (CPR) の方法と適応、効果、AEDの適応と使用方法、気道異物除去など	
	3	実技：手当の基本と一次救命処置 (BLS) 1	
	4	実技：一次救命処置 (BLS) 2	
	5	実技：一次救命処置 (BLS) 3 学習内容と実技のまとめと復習	
	6	実技：きずの手当1	
	7	実技：きずの手当2	
	8	実技：きずの手当3	
	9	実技：骨折の手当1	
	10	実技：骨折の手当2 傷病者の搬送方法	
	11	実技：災害時の救護	
	12	実技：シミュレーション1	
	13	実技：シミュレーション2	
	14	実技：シミュレーション3	
15	実技：シミュレーション4		
教 科 書	配付資料、日本赤十字社救急法指導教本 (受講前に購入)		
事前事後の予習復習	事前に配付資料や指導教本に目を通しておくこと。実技は必ず復習をすること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	『BLS プロバイダーマニュアル AHA ガイドライン 2015 準拠』アメリカ心臓病協会 出版		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (筆記 50%、実技 50%)		
オ フ ィ ス ア ウ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	リハビリテーション概論	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	1年後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	小嶋 裕・大倉 三洋		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リハビリテーションの理念・定義を正しく理解し、リハビリテーションの専門職としての基本的知識について学修する。</li> <li>・具体的には、リハビリテーションの対象と範囲、国際生活機能分類 (ICF)、リハビリテーションの流れ、リハビリテーションにおけるチームアプローチ (関連職)、関連する医療福祉制度、地域リハビリテーション活動などの概要を把握する。</li> </ul>		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. リハビリテーションの理念と保健・福祉・医療との関わりを理解する。</li> <li>2. リハビリテーションにおける障害の捉え方を理解する。</li> <li>3. リハビリテーションの分野・過程を理解する。</li> <li>4. リハビリテーション関連職 (チームアプローチ) を理解す。</li> <li>5. 今日的に社会で求められているリハビリテーションの果たす役割を理解する。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	授業オリエンテーション、リハビリテーションの起源・定義・理念	
	2	ノーマライゼーション理念・自立生活運動、健康の定義	
	3	国際疾病分類、国際障害分類、国際生活機能分類 (ICF) (小テスト①)	
	4	障害 (者) の概念、障害受容	
	5	リハビリの領域 (分野)、リハビリ医療の流れ、医療職種に関わる諸問題 (1) (インフォームド・コンセント、医療安全、守秘義務 (小テスト②))	
	6	医療職種に関わる諸問題 (2) (チーム医療、EBM)、ADLの概念	
	7	QOLの概念、障害の捉え方、関連する医療・福祉制度 (小テスト③)	
8	関連する医療・福祉制度、地域リハビリ活動、リハビリ・ケア、総括 (小テスト) ④		
教 科 書	上好昭孝・他 編著『医学生・コメディカルのための手引き書 リハビリテーション概論』永井書店、他資料配付		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業前にシラバス内容を確認すること。</li> <li>・前もって授業内容のパワーポイント資料を配付する。</li> <li>・毎授業終了時に次回授業内容の概要を提示する。</li> <li>・小テストの実施、レポートの提出に留意する。</li> </ul>		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	参考書籍の一覧表を手渡すとともに、授業内で適宜に紹介または配布する。		
成 績 評 価 方 法	小テスト (4回, 20%)、レポート (1回, 10%)、定期試験 (70%) を総合評価する。		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	社会福祉概論	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	1年次 前期・後期	必 修 ・ 選 択	必須
科 目 担 当 者	矢吹 了一 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	社会福祉は福祉を実現するための方法であり、理想と現実の間にある個々の生活における隔たりを解消・軽減するためには、社会的努力が求められる。社会福祉では、制度やサービスを役立つ形にするための援助を行う。これらの社会福祉に関する概要と、リハビリテーション専門職との協働等について学修する。具体的には、我が国の社会保障制度の概要と変遷、社会保障を取り巻く環境、社会福祉の基礎、公的扶助、などについてである。		
授 業 の 到 達 目 標	社会福祉 (社会保障を含む) とは何か、最近の制度・施策 (児童家庭福祉・障害者福祉・高齢者福祉等) に対する具体的内容を学ぶ。社会福祉関係職員と理学療法士・作業療法士・言語聴覚士との協同等についても考える。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	社会福祉の基礎① 社会福祉と社会保障を取り巻く近年の動向等 (人口動態を含む)	
	2	社会福祉の基礎② 国・自治体の組織、社会福祉従事者・担い手	
	3	公的扶助① 生活保護をめぐる状況の変化、被保護人員等の動向等	
	4	公的扶助② 生活困窮者自立支援対策 子どもの貧困対策等	
	5	児童家庭福祉① 児童家庭福祉と次世代育成支援	
	6	児童家庭福祉② 少子化対策の展開、要保護児童対策、ひとり親家庭支援	
	7	障害者福祉① 障害者保健福祉施策について	
	8	障害者福祉② 障害者の福祉、障害児の福祉	
	9	障害者福祉③ 障害者に対する社会手当等、障害者の雇用と支援	
	10	介護と高齢者福祉等① 介護保険制度について	
	11	介護と高齢者福祉等② 高齢者の福祉と医療、高齢者の住まい対策	
	12	地域福祉等① 地域福祉の推進「地域共生社会」の実現に向けた取り組み、ひきこもり対策等、権利擁護・成年後見制度	
	13	地域福祉等② 社会福祉と権利擁護・成年後見制度、住宅確保要配慮者への居住支援、消費生活協同組合およびその他事業	
	14	まとめ① 2040年を見据えた社会保障・働き方改革の課題と将来推計等 福祉の動向と介護の動向等まとめ①	
15	まとめ② 上記まとめ②		
教 科 書	資料配布による。		
事 前 事 後 の 予 習	復習は講義板書ならびに配布資料を参照して、要点をまとめる。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	社会福祉の動向2022 (中央法規) 社会保障入門2022 (中央法規) 国民の福祉と介護の動向2021/2021 (厚生労働統計協会) " " 2022/2023 ( " ) 20229月発行予定		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (70%) 授業態度 (10%) 出欠数 (20%)		
オ フ ィ ス ア ウ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	地域包括ケア論	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15 回
履 修 年 次	3 年後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	川上 理子 (兼任)・森下 幸子 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	高齢者や障害者が、地域において自らが望む生活を送るためには、さまざまな複合的な課題に対してアプローチを行うことが必要となる。生活の目標とそのための課題解決に至る道筋と方向を明らかにし、地域にある資源を活用し、総合的かつ効率的に課題解決を図っていくプロセスとアプローチについて学修する。具体的には、個別のニーズを明らかにするアセスメントから、ニーズに対するフォーマル・インフォーマルサービスの概要と、チームアプローチに必要な保健・医療・福祉の連携のあり方について学ぶ。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 地域包括ケアシステムの考え方、現状と課題、構築の実際を理解することができる</li> <li>2. 地域包括ケアシステムの展開におけるフォーマル・インフォーマルサービスの概要および多職種連携を理解することができる</li> <li>3. 地域で暮らす高齢者や障害者の生活ニーズと課題を理解し、ICF モデルに基づくアセスメントと課題解決方法を理解することができる。</li> <li>4. 理論と方法を活用し、具体的な事例の適用について考察することができる</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	担 当
	1	医療制度と介護保険制度	川上
	2	地域包括ケアシステムの考え方	川上
	3	地域包括ケアシステムの現状と課題	川上
	4	地域包括ケアシステム構築の実際	川上
	5	地域包括ケアシステムの展開 (1) サービスの概要	川上
	6	地域包括ケアシステムの展開 (2) 多職種連携	川上
	7	地域共生社会の考え方	川上
	8	地域で暮らす高齢者・障害者の生活ニーズと課題	森下
	9	ICF モデルに基づくアセスメント (1) 個別ニーズの抽出	森下
	10	ICF モデルに基づくアセスメント (2) 支援方針の検討	森下
	11	課題解決のためのケアマネジメント (1) 生活目標とサービス内容の検討	森下
	12	課題解決のためのケアマネジメント (2) サービスの選択と連携	森下
	13	生活志向的アプローチによる個別支援計画	森下
	14	事例演習	森下
15	事例演習	森下	
教 科 書	配布資料		
事前事後の予習復習	事前・事後学習については、授業計画にそって科目担当者より提示する		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	厚生指針増刊 国民衛生の動向 vol. 67 No. 9 2020/2021		
成 績 評 価 方 法	出席回数と定期試験を合わせて 100%		
オ フ ィ ス ア ウ ー	授業終了後、メールで (川上 kawakami@cc.u-kochi.ac.jp、森下 sachim@cc.u-kochi.ac.jp) 質問等を受け付けます。		

授 業 科 目 名	チーム連携論	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	4年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	川村 博文 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	医学的な視点のみならず、対象者の心理的・社会的な視点にも配慮した医療が求められる中でチーム医療は必須の手段である。より良いサービスを実践するための多専門職種との有機的な連携と協業について学修する。具体的には、専門職種間の有機的な連携と協業についての基礎知識や理論、連携のためのマネジメントの実際、多職種連携が果たす役割や機能について学ぶ。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. チーム連携、チーム医療、チームワークの意義と関わる用語等を理解できる。</li> <li>2. チーム連携の役割、歴史、目標・目的、理論を理解できる。</li> <li>3. 多職種の専門性、リーダーシップ、リーダー、有効なチーム連携を理解できる。</li> <li>4. 患者・家族・利用者を中心とした効果的なチーム連携を理解できる。</li> <li>5. 医療・保健・福祉のチーム連携による効果的な治療などを理解できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	オリエンテーション、チーム連携、チーム医療、チームワークの意義など	
	2	チーム連携の役割、歴史、目標・目的	
	3	チーム連携における多職種の専門性、リーダーシップ、リーダー、有効性	
	4	チーム連携での協調性・論理的発言・積極態度、役割の共通理解	
	5	患者・家族・利用者を中心とした効果的なチーム連携	
	6	多職種チームカンファレンスの意義・役割・コミュニケーション・進め方	
	7	多職種チーム連携の目標設定とアプローチ	
	8	チーム連携の総括・アンケートなど	
教 科 書	大嶋伸雄編著：はじめてのIPー連携を学びはじめる人のためのIP入門ー（ラーニングシリーズ IP（インタープロフェッショナル）/保健・医療・福祉専門職の連携教育・実践）、共同医書出版社、2018年		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習は、シラバスの確認、教科書の熟読。復習は、講義配布資料を参照・まとめる		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	柴崎智美ら編：保健・医療・福祉のための専門職連携教育プログラム：地域包括ケアを担うためのヒント、ミネルヴァ書房、2019年		
成 績 評 価 方 法	レポート課題 (100%)		
オ フ ィ ス ア ウ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	言語聴覚障害学総論Ⅰ	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	1年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	武内 和弘、石川 裕治		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	言語聴覚士法が制定するまでの過程などについて学修し、言語聴覚士についての理解を深める。また、仕事の実際について説明する中で、職業倫理やリスク管理(感染予防を含む)について学修し、言語聴覚士としてだけでなく、医療人として、また、社会人として何が必要であるかについて学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 言語聴覚士について理解する</li> <li>2. 言語聴覚士法について理解する</li> <li>3. 言語聴覚士の仕事の実際について理解する</li> <li>4. 言語聴覚療法について理解する</li> <li>5. 職業倫理・リスク管理について理解する</li> <li>6. 言語聴覚士としての接し方等について理解する</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	担 当
	1	オリエンテーション ・担当教員の紹介、授業の目標と進め方、シラバス説明 等	石川
	2	言語聴覚士の現状	武内
	3	言語聴覚士の歴史	武内
	4	言語聴覚士法 その1 成立までの歴史	武内
	5	言語聴覚士法 その2 業務内容 他	武内
	6	言語聴覚士法 その3 補助行為 他	武内
	7	言語聴覚士法 その4 多職種との連携 他	武内
	8	言語聴覚士の今後の展望	武内
	9	言語聴覚療法の実際	石川
	10	言語聴覚療法の流れ	石川
	11	言語聴覚療法の検査 (実技を含む)	石川
	12	言語聴覚療法の検査 (実技を含む)	石川
	13	言語聴覚療法の評価	石川
	14	言語聴覚療法における訓練, 指導, 助言, その他の援助	石川
15	職業倫理・リスク管理 (感染予防等を含む)	石川	
教 科 書	廣瀬肇 『言語聴覚士テキスト』 医歯薬出版、配付資料		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習として、シラバスの確認と、教科書の該当領域を読んでおく。復習は、学修した内容を整理すること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	必要に応じ授業中に指示する。		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (100%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	言語聴覚障害学総論Ⅱ	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	1年後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	武内 和弘、石川 裕治		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	言語聴覚士の専門的役割である言語聴覚療法について理解を深める。情報収集、インタビュー面接、検査、評価、訓練といった言語聴覚療法について解説し、それぞれの目的や必要性、また方法について学修する。また、言語聴覚士の対象についても触れ、それぞれの原因や特徴について説明し、今後学修する各論との関連性についても理解を深める。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 各障害についての概要について理解する。 2. 言語聴覚療法の流れについて理解する。 3. 言語聴覚療法の業務内容の概要について理解する。		
授 業 計 画	回	内 容	担 当
	1	オリエンテーション ・ 授業の目標と進め方、シラバス説明 等	石川
	2	先天性障害（言語発達障害 等）	武内
	3	先天性障害（機能・器質性構音障害 等）	武内
	4	後天性障害（失語症・高次脳機能障害 等）	武内
	5	後天性障害（構音障害 等）	武内
	6	先天・後天性障害（嚥下障害、吃音、音声障害 等）	武内
	7	医療領域における言語聴覚療法の流れ	石川
	8	言語聴覚療法における情報収集	石川
	9	言語聴覚療法における面接	石川
	10	言語聴覚療法における検査・テスト	石川
	11	言語聴覚療法における評価	石川
	12	言語聴覚療法における治療・訓練	石川
	13	言語聴覚療法の実際（医師の指示～検査）	石川
	14	言語聴覚療法の実際（評価～治療訓練）	石川
15	保健・福祉領域における言語聴覚療法	石川	
教 科 書	廣瀬肇 『言語聴覚士テキスト』 医歯薬出版、配付資料		
事前事後の予習復習	予習として、シラバスの確認と、教科書の該当領域を読んでおく。復習は、学修した内容を整理すること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	必要に応じ授業中に指示する。		
成 績 評 価 方 法	定期試験（100%）		
オ フ ィ ス ア ウ ー	随時（要予約）		

授 業 科 目 名	失語症学	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	1年後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	池 聡 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	言語機能の障害は、理解や表出など様々な側面があり、脳の中で起こり、実際には外部から視ることができない非常に複雑な機能である。そのような言語機能の障害である失語症は言語聴覚士にとってもっとも重要な障害の一つである。失語症の研究の歴史や大脳の機能の理解を深めた上で、定義、症状、古典的分類、重症度、検査、評価など基礎的な知識について学修する。また、事例を通して、失語症者の観察を行い症状等について学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 失語症の定義について理解することができる。</li> <li>2. 失語症の症状について理解することができる。</li> <li>3. 失語症の古典的分類や重症度について理解することができる。</li> <li>4. 失語症の検査や評価について理解することができる。</li> <li>5. 失語症の訓練理論について理解することができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	失語症の歴史と定義	
	2	大脳の区分と言語機能	
	3	失語症の原因	
	4	失語症の病巣	
	5	失語症の症状 (聴く)	
	6	失語症の症状 (話す)	
	7	失語症の症状 (復唱)	
	8	失語症の症状 (読む・書く)	
	9	失語症のタイプ分類 (ブローカ失語とウェルニッケ失語)	
	10	失語症のタイプ分類 (その他の古典的分類)	
	11	失語症のタイプ分類 (古典的分類以外の失語症)	
	12	失語症の重症度	
	13	失語症の検査	
	14	失語症の評価	
15	小児失語・進行性失語		
教 科 書	石川裕治 著 『言語聴覚士のための頭部位診断図』 エスコアール 藤田郁代 著 標準言語聴覚障害学 失語症学 最新版 医学書院 日本高次脳機能障害学会 著 標準失語症検査マニュアル 新興医学出版社 配布資料		
事前事後の予習復習	予習は、シラバスの確認とテキストを読んでおく。復習は講義板書ならびに配布資料を参照して、要点をまとめる。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	小嶋知幸 著 『失語症の源流を訪ねて 言語聴覚士のカルテから』 金原出版 藤田郁代/立石雅子 編 『標準言語聴覚障害学 失語症 第2版』 医学書院		
成 績 評 価 方 法	小テスト (10%) レポート (30%) 定期試験 (60%)		
オ フ ィ ス ア フ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	聴覚系医学	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	2年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	奥谷 文乃 (兼任)・小林 泰輔 (兼任)・伊藤 広明 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	聴覚器官は、言語発達や危険認識、コミュニケーションなど人が生活を行なう上でとても重要な器官である。聴器の構造と機能 (生理) を理解し、難聴疾患に対する知識を習得する。外耳、中耳、第8神経、聴覚中枢の解剖と機能、聴力検査とその評価、難聴を起こす病態と治療、対応、平衡機能と平衡障害、顔面神経麻痺について知識を深め、人工中耳や人工内耳などの仕組みについて学修し、言語聴覚士として、聴覚にどのように関わっていくかについて学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 聴器の構造と機能 (生理) を理解し、説明できるようになる。</li> <li>2. 難聴をきたす疾患およびその関連疾患に対する知識を習得する。</li> <li>3. 難聴をきたす疾患の治療や対処法について理解する</li> <li>4. 難聴の関連疾患 (めまい) についても知識を得る。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	担 当
	1	聴器の構造と機能 1	奥谷文乃
	2	聴器の構造と機能 2	奥谷文乃
	3	聴器の構造と機能 3	奥谷文乃
	4	聴器の構造と機能 4	奥谷文乃
	5	聴覚機能と検査 1	伊藤広明
	6	聴覚機能と検査 2	伊藤広明
	7	外耳・中耳疾患 1	伊藤広明
	8	外耳・中耳疾患 2	伊藤広明
	9	内耳疾患 1 (後天性難聴)	小林泰輔
	10	内耳疾患 2 (先天性難聴、小児難聴)	小林泰輔
	11	難聴と社会福祉、聴覚健診	小林泰輔
	12	聴神経と聴覚中枢 中枢性難聴と機能性難聴	小林泰輔
	13	人工中耳と人工内耳	小林泰輔
	14	内耳機能と平衡機能検査	伊藤広明
15	めまい疾患	伊藤広明	
教 科 書	講義資料を配付		
事前事後の予習復習	7回目以降の授業の理解には1～6回目の知識が必要であるので、復習を怠らないこと。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	「病気がみえる vol. 13 耳鼻咽喉科」医療情報科学研究所編 メディックメディア 「あたらしい耳鼻咽喉科・頭頸部外科学」香取幸夫、日高浩史編 中山書店 「耳鼻咽喉科疾患ビジュアルブック」中尾一成編 学研メディカル秀潤社 「聴覚検査の実際」改訂第4版 日本聴覚医学会編 南山堂		
成 績 評 価 方 法	筆記試験 (100%)		
オ フ ィ ス ア ウ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	音声・言語系医学	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	2年次	必 修・選 択	必修
科 目 担 当 者	兵頭 政光 (兼任)・長尾 明日香 (兼任)・奥谷 文乃 (兼任)		
授 業 の 概 要・目 的	呼吸・発声・発語 (構音)・嚥下器官の構造と生理・検査法・疾患概要について演習を交えて講義を行なうことで、呼吸・発声・発語 (構音)・嚥下器官の構造と生理を理解し、疾患の病態と治療の説明をすることができることを目標とする。言語、音韻と構音の生理学的過程を説明した後に、呼気調節、喉頭調節、付属管腔の調節の3つのカテゴリーに大きく分類し、それぞれの診断や治療について学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	呼吸・発声・発語 (構音)・嚥下器官の構造と生理を理解し、疾患の病態と治療を説明することができる。		
授 業 計 画	回	内 容	担当教員
	1	Introduction: 言語、音韻と構音の生理学的過程、構音障害と言語療法	兵頭
	2	呼気調節 (1) 呼吸器の構造と運動	奥谷
	3	(2) 呼吸の生理	奥谷
	4	(3) 呼吸の病態、機能検査	奥谷
	5	(4) 呼吸障害と言語療法	奥谷
	6	喉頭調節 (1) 喉頭の構造と生理	兵頭
	7	(2) 発声の調節機構、機能検査	兵頭
	8	(3) 咽頭疾患の診断・治療	兵頭
	9	(4) 嚥下の生理、機能検査	兵頭
	10	(5) 嚥下障害の診断・治療	兵頭
	11	付属管腔の調節 (1) 口腔、咽頭、鼻腔、気管、食道の構造と生理	兵頭
	12	(2) 口腔、咽頭、鼻腔、気管、食道疾患の病態と治療	兵頭
	13	(3) 発声および構音器官の観察 (演習)	長尾
	14	(4) 音声治療の実際 (演習)	長尾
15	(5) 嚥下訓練の実際 (演習)	長尾	
教 科 書	配布資料の使用		
事前事後の予習復習	配布資料の確認		
履 修 の 条 件	なし		
参 考 文 献	言語聴覚士テキスト 第2版 医歯薬出版 「シンプル生理学」		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (100%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	発達心理学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	2年後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	中野 良哉 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	人間の発達段階における、言語の正常発達を中心に学修する。各発達段階において、どのように言語が獲得されていくのか、また、聴覚との関連や養育者との関連や、保育、学校教育とどのように関連するのかについて理解を深める。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 各発達段階における発達の特徴を理解できる。</li> <li>2. 発達心理学の諸理論を理解できる。</li> <li>3. 各段階での言語発達の特徴や言語発達に関連する要因を説明できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	発達心理学の理論 (ピアジェ、ヴィゴツキー等)	
	2	認知の発達 1 概念の発達	
	3	認知の発達 2 因果推論の発達	
	4	言語発達 1 乳児期	
	5	言語発達 2 幼児期前期	
	6	言語発達 3 幼児期後期	
	7	言語発達 4 児童期以降	
	8	発達障害	
教 科 書	必要に応じて資料を配付する		
事前事後の予習復習	配布資料を事前に読んでくること。 授業の内容を復習し理解を深めること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	適宜紹介する		
成 績 評 価 方 法	筆記試験(100%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	言語学	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	2年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	奥村 訓代 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	<p>日常、問題なく話している日本語を通し言葉を考え、世界の言語の普遍性と特異性について知ることを、授業の目標とする。</p> <p>授業の主題は、日本語を再認識し、心的レキシコンについて考え、また、記号としての言語を考えることである。授業の内容としては、言語理論、音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論について学ぶ。次に、言語の普遍性、コミュニケーションとしての言語について学修する。</p>		
授 業 の 到 達 目 標	STにとって必要な言語学的知識の基礎を習得する。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	日本語の特徴	
	2	曖昧文	
	3	活用 (1)	
	4	活用 (2)	
	5	て・ら・that 抜き言葉	
	6	待遇表現と敬語 (1)	
	7	待遇表現と敬語 (2)	
	8	一番長い文	
	9	依頼の疑問文	
	10	名詞+名詞、連濁	
	11	複合語と派生語	
	12	代名詞	
	13	色々な言語仮設 (1)	
	14	色々な言語仮設 (2)	
15	まとめ		
教 科 書	特になし		
事前事後の予習復習	専門用語の意味確認 (予習) : 1 時間半、授業内で解いた問題の復習 : 1 時間半、配布資料の内容理解 (予習・復習を含む) : 3 時間		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フシギなくらい見えてくる! 本当はわかる言語学 佐久間淳一 著 日本実業出版社</li> <li>・言語学入門 これから始める人のための入門書 佐久間淳一、加藤重広、町田健著 KENKYUSHA</li> </ul>		
成 績 評 価 方 法	期末試験 : 50%、小テスト (問題) : 20%、課題への取り組み : 20%、授業中の発言・学習意欲・積極的参加 : 10%、		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業の前後		

授 業 科 目 名	音声学	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	2年後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	公文 素子 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	日ごろ気にもしていない音声上の出来事が、じつは厳密に出来上がっていることを知る。さらに、理屈を知ると同時に、相手の音声上の特徴を知り、矯正できる能力を養うことを授業の目的とする。授業内容としては、話し言葉と書き言葉、アクセントの表記・型・式、母音・子音、調音点・調音法について学ぶ。さらに、IPA表記、異音、アクセント・イントネーション、拍と節等についても学習を進める。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 言語障害がある人に対する言語能力復帰のための基礎知識や方法を学ぶ。 2. 今後のグローバル社会に適応した外国人ペイシエントに対する日本語音声の矯正ができる。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	自分の名前と50音図	
	2	母語と母語干渉	
	3	アクセント表記(型と式)	
	4	母音と子音	
	5	調音点と調音法	
	6	子音の分類	
	7	母音の無声化と特殊音素	
	8	IPAによる表記	
	9	異音と相補分布	
	10	アクセントとイントネーション	
	11	拍と節、特殊拍	
	12	プロミネンス	
	13	アクセントの聞き取り	
	14	標準語・共通語・公用語	
15	音声の弁別機能・統語的機能		
教 科 書	特になし		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	専門用語の意味確認(予習):1時間半、授業内で解いた問題の復習:1時間半、配布資料の内容理解(予習・復習を含む):3時間		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語音声学のしくみ 町田健 編/猪塚元・猪塚恵美子 著 研究社</li> <li>・基礎からの日本語音声学 福盛貴弘 著 東京堂出版</li> <li>・日本語音声学入門(改訂版) 斎藤純男 著 三省堂</li> <li>・日本語音声学 天沼寧・大坪一夫・水谷修 著 くろしお出版</li> <li>・日本語教育を目指す人のための基礎から学ぶ音声学 鹿島央 著 スリーエーネットワーク</li> </ul>		
成 績 評 価 方 法	期末試験:50%、小テスト(問題):20%、課題への取り組み:20%、授業中の発言・学習意欲・積極的参加:10%、		
オ フ ィ ス ア ワ ー	非常勤講師のため、特に設けない。		

授 業 科 目 名	音響学 (聴覚心理学を含む)	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	2年後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	世木 秀明 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	音響学の基礎的事項を理解し、言語聴覚士としての臨床活動において、音響・音声・聴覚に関することがらを科学的に取り扱うための基礎的能力を養う。「音の3要素」「音の周波数」といった、音響学の基本から、「周波数分析の原理」「サウンド・スペクトログラム」といった専門的な分野を学習し、「音」の物理学を理解し、音響や聴覚機能に関する客観的記述方法、聴覚心理学的概念、音声や聴覚などの臨床的な評価方法などについて学ぶ。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 音の物理的性質や音声知覚に関する基礎的事項を理解し、臨床活動において音響・音声・聴覚に関することがらを科学的に扱うことができる。 2. パソコンを利用して音声波形の観測や基礎的な音響分析ができる。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	音の3要素、音の強さの表し方、音の高さの表し方	
	2	音のスペクトル表現	
	3	サウンドスペクトログラムの原理と音声分析	
	4	音声生成機構および、日本語母音と子音の音響的特徴	
	5	連続音声の音響的特徴および、アクセントとイントネーション	
	6	聴覚の情報処理	
	7	聴覚心理学1:聴覚閾値、可聴範囲、音の大きさ、音の高さ	
	8	聴覚心理学2:時間と時間パタンの知覚、弁別閾と比弁別閾	
	9	聴覚心理学3:聴覚フィルタと臨界帯域、方向感の知覚	
	10	聴覚心理学4:マスキング、母音の正規化、範疇知覚、心的辞書	
	11	両耳の聞こえ、環境と聴覚	
	12	パソコンを利用した音響分析とデジタル信号処理の注意点	
	13	パソコンを使用した音響分析1 (演習)	
	14	パソコンを使用した音響分析2 (演習)	
15	授業全体のまとめ		
教 科 書	定めない。授業前に資料を配布する。		
事前事後の予習復習	予習は、授業前に配布される資料を熟読しておく。また、高校で習った三角関数、対数について調べておく。復習は、講義内容の要点をまとめる。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	『言語聴覚士の音響学入門』吉田友敬(海文堂)、『ゼロから始める音響学』青木直史(講談社)、『言語聴覚士のための音響学』今泉敏(医歯薬出版)、『言語聴覚士テキスト(第3版)』大森孝一他編(医歯薬出版)など		
成 績 評 価 方 法	定期試験(100%)		
オ フ ィ ス ア ウ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	聴覚障害学	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	2年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	井上 真理子 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	<p>(概要) 聴覚障害児 (者) に対する、言語聴覚士としての必要な知識について学修する。聴覚の正常発達を学修した後に、先天性・後天性の難聴の原因、症状について学び、聴力検査、補聴器・人工内耳に関しても学修する。難聴児のリハビリテーションに関しては、様々なコミュニケーション手段があり、読話・手話・聴覚-口話法、バイリンガル教育など各種の知識を深め、事例を通して実際の指導内容についても学修する。</p> <p>(目的) 乳幼児から成人の聴覚障害について基本的な知識を修得する。各種聴力検査についても学んでいく。</p>		
授 業 の 到 達 目 標	聴覚障害児 (者) に対する必要な知識を学修する。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	聴覚機能の発達	
	2	聴覚機能の発達	
	3	小児聴覚障害の原因	
	4	小児聴覚検査	
	5	小児聴覚検査	
	6	小児聴覚検査	
	7	成人聴覚検査	
	8	成人聴覚検査	
	9	成人聴覚検査	
	10	成人聴覚検査	
	11	成人聴覚検査	
	12	成人聴覚検査	
	13	成人聴覚検査	
	14	補聴器	
15	人工内耳		
教 科 書	聴覚障害学 (標準言語聴覚障害学) 聴覚検査の実際		
事前事後の予習復習			
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	聴覚障害 I・II 山田弘幸 建帛社		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (100%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	音声障害学実習	授 業 形 態	実習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	2年後期	必 修 ・ 選 択	必修
担 当 教 員 名	石川 裕治		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	音声障害に対する言語聴覚療法の現状について触れ、その上で、音声障害の定義、症状、原因疾患、検査・評価、治療・訓練について学修する。特に、耳鼻咽喉科医との連携が重要となるため、耳鼻咽喉科医と言語聴覚士の役割について理解を深め、また、様々な発声法や検査・訓練法については実技を取り入れ、知識と技術の習得を目的に学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 音声障害の基礎（定義・原因・症状）について理解できる。</li> <li>2. 音声障害の言語聴覚療法の流れ（医師と連携等）について理解できる。</li> <li>3. 音声障害の検査方法が理解できる。</li> <li>4. 音声障害の訓練方法が理解できる。</li> <li>5. 事例からの治療計画立案ができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	音声障害の定義・分類	
	2	音声障害の原因と症状 1	
	3	音声障害の原因と症状 2	
	4	音声障害に対するアプローチの流れ	
	5	音声障害の検査 1（嘔声）	
	6	音声障害の検査 2（高さ・強さ）	
	7	音声障害の検査 3（発声持続）	
	8	音声障害の検査 4（その他）	
	9	音声障害の訓練 1（頸部アプローチなど）	
	10	音声障害の訓練 2（アクセント法など）	
	11	音声障害の訓練 3（無喉頭音声）	
	12	音声障害の訓練 4（その他）	
	13	症例検討 1	
	14	症例検討 2	
15	症例検討 3		
教 科 書	藤田郁代 監修 『発声発語障害学』 医学書院		
事前事後の予習復習	授業中に次回の授業範囲を連絡し、教科書をまとめる。復習は、授業で学んだことを確認しまとめなおすとともに、実技等に関しては修得できるまで技術練習をおこなうこと。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	廣瀬肇 監修 『言語聴覚士テキスト』 医歯薬出版		
成 績 評 価 方 法	レポート（30%）、定期試験（70%）		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	学習・認知心理学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	3年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	津江 美和 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	<p>言語聴覚士として、必要な認知機能が形成・獲得される過程とその機序、認知機能の諸相、および認知機能を背後で支える高次神経機構などについての知識を獲得する。特に、認知心理学の中で、「感覚知覚」「認知」「学習」「記憶」の4項目について学ぶ。感覚については種類、物理量と心理量、順応と対比などについてである。認知に関しては、奥行き知覚、図地の分化、認知地図、対人知覚、感覚遮断などである。学習は条件づけに関して、記憶は過程と分類や、記憶範囲・容量に関して学習する。</p>		
授 業 の 到 達 目 標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 感覚知覚について、刺激と受容器および大脳を関連づけながら説明できる</li> <li>・ 学習の成立について、レスポナント学習とオペラント学習およびモデリングについて、それぞれ特徴を区別しながら説明できる</li> <li>・ 動機づけや行動分析、記憶について基礎的知識を理解する</li> </ul>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	特殊感覚と体性感覚	
	2	感覚知覚と認知	
	3	学習と行動	
	4	練習過程と熟練	
	5	社会的学習	
	6	欲求と動機づけ	
	7	大脳と高次精神活動	
	8	記憶	
教 科 書	廣瀬肇監修 『言語聴覚士テキスト』 医歯薬出版		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	<p>予習：教科書を読み、専門用語の意味を調べる  復習：教科書や配布資料、講義内容から興味をもった箇所を深める</p>		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	<p>山内光哉・春木豊 編著「グラフィック学習心理学 行動と認知」サイエンス社  辰野千寿 著「学習心理学」教育出版</p>		
成 績 評 価 方 法	小テスト (30%) 定期試験 (70%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業後メモにて提出し、次回の授業で報告する		

授 業 科 目 名	言語発達学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	3年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	稲田 勤		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	言語（ことば）は、ヒトが生まれて成長する過程での脳神経系の発達、十分な感覚入力と言語環境の下で、獲得する。本講義では、ことばが出現するために必要な基礎的能力が発達する乳幼児から、会話でのやりとりが発達する幼児期、さらにコミュニケーション能力や文字を活用する児童期までのことばの発達について学修する。また、ことばの発達に大きく関わる社会性の発達、認知発達についても学び、それぞれの領域で苦手さを持つ子どもについても触れる。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 乳児期、幼児期、学童期における言語発達をおおまかに説明できる。</li> <li>2. 複数ある言語獲得理論について、各々の違いをおおまかに説明できる。</li> <li>3. 動作性言語、音声言語の発達について理解し、説明できる。</li> <li>4. 語彙・語連鎖の獲得と統語能力について、おおまかに説明できる。</li> <li>5. 談話能力、読み書き能力について理解し、説明できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	乳児期、幼児期、学童期における言語発達	
	2	言語獲得理論について	
	3	動作性言語の発達	
	4	音声言語の発達	
	5	語彙・語連鎖の獲得	
	6	統語機能の獲得	
	7	談話能力の発達	
	8	読み書き能力の発達	
教 科 書	玉井ふみ、深浦順一 編 標準言語聴覚障害学『言語発達障害』第2版 医学書院		
事前事後の予習復習	予習は授業ごとに指示された教科書該当部分を読んでくること。復習は授業で学習・演習した内容を習得できるまで自己学習を行うこと。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	津守真 『乳幼児精神発達診断法 0才～3才まで』『乳幼児精神発達診断法 3才～7才まで』 大日本図書		
成 績 評 価 方 法	課題 (30%)、定期試験 (70%)		
オ フ ィ ス ア ウ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	高次脳機能障害学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	3年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	石川 裕治・石元 美知子・池 聡 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	意識レベルなどの背景症状、注意障害といった一般症状について理解をした上で、視覚、体性感覚、運動などの高次脳機能障害について学修する。また、各障害についての、脳の病巣やメカニズム、症状の特徴について学修する。また、事例を通して、高次脳機能障害者の観察を行い症状等について学習するとともに、検査法や訓練法について学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 高次脳機能障害の各障害についての基礎的な知識が理解できる。</li> <li>2. 高次脳機能障害の検査法について理解できる。</li> <li>3. 高次脳機能障害の訓練法について理解できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	担 当 者
	1	高次脳機能障害とは (背景症状・一般症状)	石川・石元
	2	失行	石川・石元
	3	失認	石川・石元
	4	視空間障害	石川・石元
	5	高次脳機能障害の診方	池
	6	記憶障害・注意障害・認知症	池
	7	高次脳機能障害の検査法	池
	8	高次脳機能障害の訓練法	池
教 科 書	廣瀬肇 『言語聴覚士テキスト』 医歯薬出版 大塚裕一 編 言語聴覚士ドリルプラス『高次脳機能障害』 診断と治療社		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習として、シラバスの確認と、教科書の該当領域を読んでおく。復習は、学修した内容を整理すること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	必要に応じ授業中に指示する。		
成 績 評 価 方 法	筆記試験 (100%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業1回目のガイダンスで説明する。		

授 業 科 目 名	言語発達障害学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	3年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	大崎 聡 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	言語発達障害の評価・診断・治療を行うために必要な基本的知識を学修する。発達段階とともに、各発達段階での訓練内容について学び、言語発達障害について具体的なイメージを持つとともに、臨床の流れについて学修する。評価の重要性を理解するため、事例を通して検査技法、評価の枠組み、記録法、報告書作成のしかたについて学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 言語発達の後れを生じる障害について理解することができる。</li> <li>2. 言語発達障害の評価方法を理解することができる。</li> <li>3. 言語発達障害の支援方法を理解することができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	言語発達障害とは (言語機能、構造、病態など)	
	2	言語発達障害の評価	
	3	言語発達障害の評価	
	4	発達段階に即した指導、訓練、支援 (前言語期、語彙獲得期)	
	5	発達段階に即した指導、訓練、支援 (幼児期、学童期、青年・成人期)	
	6	障害別指導、訓練、支援 (知的能力障害、特異的言語発達障害)	
	7	障害別指導、訓練、支援 (自閉症スペクトラム障害、学習障害など)	
	8	指導技法を用いた指導、訓練、支援と地域支援、職種間連携、	
教 科 書	大森幸一、永井知代子、深浦順一、他『「言語聴覚士テキスト」』医歯薬出版 玉井ふみ、深浦順一『言語発達障害学』医学書院		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習はシラバスを確認し、教科書の該当する箇所を読み、疑問点を書き出す。復習は配付資料、ノートを再読し要点をまとめる。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	特になし		
成 績 評 価 方 法	定期試験 80% 小テスト 20%		
オ フ ィ ス ア ワ ー	講義終了後		

授 業 科 目 名	重複障害学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	3年後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	稲田 勤・谷本 愛裕美（兼任）		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	言語聴覚士が対象とする先天的障害である、脳性麻痺、重複障害について学修する。脳性麻痺は脳損傷に由来する症候群であり、知的発達障害、視覚障害、聴覚障害、てんかん、視覚・聴覚の認知発達障害、情緒面や行動面の発達障害など、二重三重の障害を合併することがある。重複した障害のある対象児のこぼの発達の特徴を理解し、コミュニケーション発達支援に必要な知識について学修する。また、発達時期にそった家族指導についても学修する。また、事例を通して重複障害者の観察を行い症状等について学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 臨床現場における重複障害患者の障害像を理解することができる。</li> <li>2. 重複障害症例を通して評価・観察の一連の流れを理解することができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	医療、福祉、教育における重複障害の定義および病態（稲田）	
	2	重複障害における視覚・聴覚の認知発達障害（稲田）	
	3	重複障害における情緒面や行動面の発達障害（稲田）	
	4	重複障害児（者）と拡大代替コミュニケーション（稲田）	
	5	脳性麻痺症例及び重複障害症例の各検査 検査実施を中心に VTR 分析（谷本）	
	6	脳性麻痺症例及び重複障害症例の各検査 観察項目を中心に VTR 分析（谷本）	
	7	脳性麻痺症例及び重複障害症例の評価（VTR 分析）（谷本）	
	8	脳性麻痺症例及び重複障害症例の評価（VTR 分析）（谷本）	
教 科 書	指定しない。レジユメ、コピーの配布を行う。		
事前事後の予習復習	特になし		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	新版重症心身障害療育マニュアル：監修岡田喜篤 医歯薬出版		
成 績 評 価 方 法	期末試験 50% 症例レポート 50%		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業前中後での口頭質問、メールにて受け付ける		

授 業 科 目 名	学習障害・広汎性発達障害学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	3年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	稲田 勤・濱崎 佳瑞子（兼任）		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	<p>（概要）ADHD、自閉症、発達性読み書き障害、広汎性発達障害、発達性協調運動障害、視空間認知障害、学習障害の病理・生理の理解とその訓練方法を学習する。それぞれの障害の特性から起こるコミュニケーション上の問題点や学校生活での問題点、またその対処法、訓練法について解説を行う。</p>		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 発達障害の分類を理解できる。</li> <li>2. 発達障害の症状と訓練方法を理解できる。</li> <li>3. 早期から関わりの必要性和成長過程で生じてくる課題や困難さを理解できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	担 当
	1	学習障害・広汎性発達障害学児の認知的特徴（視覚、聴覚、触覚）	稲田
	2	認知的特徴に合わせた訓練（視覚）	稲田
	3	認知的特徴に合わせた訓練（聴覚、触覚）	稲田
	4	認知機能の統合とその訓練法	稲田
	5	発達障害の分類と早期対応	濱崎
	6	自閉症スペクトラム症	濱崎
	7	限局性学習障害・発達性ディスレクシア	濱崎
	8	注意欠如・多動症、発達性協調運動症	濱崎
教 科 書	指定しない。レジュメ、コピーの配布を行う。		
事前事後の予習復習	特になし		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	発達障害児者支援とアセスメントのガイドライン：監修 辻井正次 金子書房		
成 績 評 価 方 法	筆記試験 50%（稲田） レポート・小テスト 50%（濱崎）		
オ フ ィ ス ア ウ ー	授業前中後での口頭質問、メールにて受け付ける		

授 業 科 目 名	機能性構音障害学実習	授 業 形 態	実習
単 位 数	1	回 数	15 回
履 修 年 次	3 年前期	必 修 ・ 選 択	必修
担 当 教 員 名	武内 和弘		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	構音障害の種類の1つである機能性構音障害の特徴を理解し、そのスピーチ・セラピーの一連の流れを学修する。すなわち、正常構音発達の理解に基づき、いわゆる未熟構音と異常構音の鑑別、構音および構音器官の構造と機能の検査、生育歴調査、言語発達などの関連心理検査等の実施法について演習形式で学ぶ。ついで指導目標（ゴール）と方針の策定、詳細な訓練計画の立案、指導する障害音の選定と多様な訓練技法を実践的に学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 機能性構音障害に対するスピーチ・セラピーの一連の流れが理解できる。</li> <li>2. 正常構音発達（未熟構音を含む）が理解できる。</li> <li>3. 機能性構音障害の定義と構音の誤り方が説明できる。</li> <li>4. 機能性構音障害の検査法と指導方針の立案ができる。</li> <li>5. 機能性構音障害の訓練・指導について実践できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	授業ガイダンス、正常構音発達	
	2	日本語の正常音と異常構音の分析	
	3	構音検査1（スクリーニング）	
	4	構音検査2（新版構音検査法）	
	5	構音検査3（生育歴調査「ことばの記録」）	
	6	構音検査4（構音器官の形態と機能の検査）	
	7	構音検査5（関連心理検査・PVT-R 他）	
	8	訓練適応と指導計画の立案	
	9	スピーチ・セラピーの概略	
	10	構音指導1（VanRiperの方法 他）	
	11	構音指導2（基礎および語音産生訓練）	
	12	構音指導3（構音指導法）	
	13	構音指導4（日常会話への般化）	
	14	症例検討1（構音障害の評価）	
15	症例検討2（構音障害の指導）		
教 科 書	今井智子、生井友紀子、荻安誠、永井知代子 『発話障害へのアプローチ』 インテルナ出版		
事前事後の予習復習	学修した知識を毎回整理し復習して、重要事項を確実に覚えること。スピーチ・セラピーの技法は、くり返し練習し確実に身に付けること。次回の授業範囲は、概略を予習で把握し、疑問点を明らかにしておくこと。		
履 修 の 条 件	熱意と学習意欲を持って受講すること。		
参 考 文 献	熊倉勇美、今井智子 『発声発語障害学第2版』 医学書院		
成 績 評 価 方 法	レポート（10%）、小テスト（30%）、定期試験（60%）		
オ フ ィ ス ア ウ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	器質性構音障害学実習	授 業 形 態	実習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	3年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	藤原 百合 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	器質性構音障害とその背景にある異常の基本的概念と知識について学修する。また、器質性構音障害および関連障害の評価・診断・治療に関する知識・技能・態度を身につけ、事例を通して、鼻咽喉閉鎖機能不全に関する検査、声と共鳴・構音の検査の理解を深める。異常構音の聴取や検査方法については実技を取り入れるとともに、事例を通して学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 口蓋裂に伴う構音障害および関連障害について説明できる。</li> <li>2. 口腔腫瘍術後の構音障害および関連障害について説明できる。</li> <li>3. 発語器官の形態・機能および聴覚的評価に基づき、治療計画を立てることができる。</li> <li>4. 構音訓練プログラムを立て、模擬的に実施できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	ことばの産生：4つのプロセス（呼吸・発声・共鳴・構音）	
	2	器質性構音障害の原因と発症メカニズム	
	3	発語器官等の形態と機能の特徴及び検査	
	4	発音補助手段の種類と適用基準	
	5	検査1（構音器官）	
	6	検査2（共鳴器官）	
	7	検査3（機器を用いた検査）	
	8	聴覚的評価1（構音）	
	9	聴覚的評価2（共鳴）	
	10	聴覚的評価3（機器を用いた評価）	
	11	訓練1（口蓋裂）	
	12	訓練2（口腔腫瘍術後）	
	13	訓練3（発音補助手段）	
	14	症例検討1	
15	症例検討2		
教 科 書	藤田郁代 監修 標準言語聴覚障害学『発声発語障害学』 医学書院		
事前事後の予習復習	授業前に教科書の器質性構音障害の頁を読んでくること。復習は、授業で学んだことを確認しまとめなおすとともに、実技等に関しては修得できるまで技術練習をおこなうこと。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	EPG 研究会 『目で見る日本語音の産生』『目で見る構音障害』 エスコアール 岡崎恵子・他 編 『口蓋裂の言語臨床』第3版 医学書院 溝尻源太郎、熊倉勇美 編著 『口腔・中咽頭がんのリハビリテーション』 医歯薬出版		
成 績 評 価 方 法	実習参加態度（20%）、定期試験（80%）		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業1回目のガイダンスで説明する。		

授 業 科 目 名	運動障害性構音障害学実習	授 業 形 態	実習
単 位 数	1	回 数	15 回
履 修 年 次	3 年後期	必 修 ・ 選 択	必修
担 当 教 員 名	北川 純平（兼任）		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	運動障害性構音障害の鑑別診断、評価、リハビリテーションについて学修する。発声発語器官の解剖・生理・病理、運動障害性構音障害の原因と分類、運動障害性構音障害の検査・評価の方法、運動障害性構音障害の鑑別診断、運動障害性構音障害の訓練の原則と実施上の留意点、運動障害性構音障害の訓練プログラムの立案、運動障害性構音障害の訓練の実際、報告書の書き方について学修する。発声発語および構音の検査、訓練の手技については実技を中心に学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 発声発語のしくみが理解できる。</li> <li>2. 運動障害性構音障害の原因・分類・症状等が理解できる。</li> <li>3. 運動障害性構音障害に対する言語聴覚療法の流れが理解できる。</li> <li>4. 構音障害の検査・評価・訓練が学生間でできる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	発声発語のしくみ	
	2	運動障害性構音障害の原因と分類	
	3	運動障害性構音障害の言語症状	
	4	構音障害に対する言語聴覚療法の現状と課題	
	5	検査 1（正常な数値の確認）	
	6	検査 2（発声発語および構音の検査 その 1）	
	7	検査 3（発声発語および構音の検査 その 2）	
	8	検査 4（発声発語および構音の検査 その 3）	
	9	検査 5（発声発語および構音の検査 その 4）	
	10	評価 1（報告書の作成）	
	11	評価 2（報告書の作成）	
	12	訓練 1	
	13	訓練 2	
	14	訓練 3	
15	訓練 4（AAC）		
教 科 書	熊倉勇美 編著 『言語聴覚療法シリーズ 9 改訂運動障害性構音障害』建帛社		
事前事後の予習復習	予習は、シラバスの確認とテキストを読んでおく。復習は、特に検査実習を行い、マニュアルを見ないで実施できるように学生間で確認すること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	広瀬肇、白坂康俊、柴田貞雄 『言語聴覚士のための運動障害性構音障害』 医歯薬出版		
成 績 評 価 方 法	定期試験（100%）		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	吃音学	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	3年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	上松 智幸 (兼任)、 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	吃音の歴史と現状を説明した上で、基礎的な分野として吃音の定義、症状、原因、検査、評価、訓練といった、吃音に対する言語聴覚療法について学修する。また、吃音と類似する非流性発話等を説明し、その鑑別についても触れる。また、訓練に関しては、直接法、間接法等について理論と技術について学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・吃音の概要を理解することが出来る。</li> <li>・吃音の進展段階を評価することが出来る。</li> <li>・吃音の訓練（指導）法について説明することが出来る。</li> </ul>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	吃音の歴史と現状について	
	2	吃音の定義、診断基準について	
	3	吃音の症状について	
	4	吃音の原因について	
	5	進展段階について	
	6	吃音検査法	
	7	小児への訓練法	
8	成人への訓練法		
教 科 書	都築澄夫編『改訂吃音』 建帛社		
事前事後の予習復習	予習はシラバスの確認と教科書を読んでおく。復習は講義内容の要点をまとめる。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	藤田郁代監修 城本修/原由紀編集『発声発語障害学第3版』 医学書院 都築澄夫著編 『間接法による吃音訓練』 三輪書店		
成 績 評 価 方 法	[定期試験] 100% (合格点は60点以上)		
オ フィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	嚥下障害学実習	授 業 形 態	実習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	3年前期	必 修 ・ 選 択	必修
担 当 教 員 名	益田 慎 (兼任)、上松 智幸 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	嚥下障害のアプローチを行う上で必要な、基礎知識について学修するとともに、どのように評価し、訓練を行うのかについて理解を深める。嚥下に必要な器官の解剖・生理、嚥下障害の定義・原因となりうる疾患等について学修する。また、検査・評価法・嚥下食の作成や口腔ケアに関しては、実技を通して技能等について学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 言語聴覚士として必要な、嚥下に関する解剖・生理の理解ができる。 2. 嚥下障害の原因疾患や病態が理解できる。 3. 評価・訓練法の選択ができる。		
授 業 計 画	回	内 容	担 当
	1	嚥下に関わる器官の解剖・生理	益田
	2	嚥下の動態について	益田
	3	嚥下障害の原因	益田
	4	嚥下障害の病態	益田
	5	正常嚥下と異常嚥下の模擬体験	上松
	6	嚥下食・とろみ調理実習	上松
	7	検査・評価1 (認知期・先行期)	上松
	8	検査・評価2 (準備期)	上松
	9	検査・評価3 (口腔期)	上松
	10	検査・評価4 (咽頭期)	上松
	11	検査・評価5 (機器を用いた検査)	上松
	12	訓練1 (間接嚥下訓練)	上松
	13	訓練2 (姿勢調整)	上松
	14	訓練3 (直接嚥下訓練①)	上松
15	訓練4 (直接嚥下訓練②)	上松	
教 科 書	藤田郁代 『標準言語聴覚障害学 摂食嚥下障害学』 医学書院 聖隷嚥下チーム 『嚥下障害 ポケットマニュアル』 医歯薬出版 藤島一郎、柴本勇 『動画でわかる 摂食・嚥下リハビリテーション』 中山書店		
事前事後の予習復習	各講義時間前に復習をしておくこと。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	廣瀬肇 『言語聴覚士テキスト』 医歯薬出版		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (100%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	補聴器・人工内耳学	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	3年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	秋朝 幸二 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	言語聴覚士として、聴覚障害児 (者) に対し、最良と考えられる補聴器の適合・評価・装用指導などができるように、オーディオロジー学、補聴学に基づいた理論と技術について学修する。補聴学に必要なオーディオロジーの知識、補聴器・人工内耳の仕組み (構造) や機能に関して学習し、フィッティング理論について学修する。調整 (アナログ・デジタル) だけでなく、イヤモールドの採型や評価・検査法、カウンセリングや装用指導についても学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 難聴者における、補聴器や人工内耳の必要性を理解する事が出来る。</li> <li>・ 医療現場及び教育現場における、言語聴覚士の役割と必要性を理解する事が出来る。</li> </ul>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	聴覚障害学のリハビリテーションの用語の解説	
	2	聴覚障害学・補聴学に必要なオーディオロジーの知識	
	3	聴覚検査の実習と検査方法について (実習)	
	4	フィッティング理論Ⅰ (基本理論)	
	5	フィッティング理論Ⅱ (器種選定と聴力に見合う調整)	
	6	補聴器の仕組みと機能Ⅰ	
	7	補聴器の仕組みと機能Ⅱ	
	8	補聴器の調整と測定 (実習)	
	9	フィッティング理論Ⅲ・Ⅳ (調整の評価、カウンセリングと装用指導)	
	10	フィッティング理論Ⅴ (デジタル補聴器と乳幼児のフィッティング)	
	11	デジタル補聴器の調整 (実習)	
	12	補聴器の評価とイヤモールド	
	13	イヤモールドの採取	
	14	人工内耳学Ⅰ (基本概論)	
15	人工内耳学Ⅱ (総論)		
教 科 書	小寺一興著『補聴器フィッティングの考え方』 日本聴覚医学会『聴覚検査の実際』		
事前事後の予習復習	予習は、シラバスの内容確認とテキストを読んでおく。 復習は、配布資料を参照する。		
履 修 の 条 件	授業において分からない事は質問する。もしくは、質問用紙に記入提出		
参 考 文 献			
成 績 評 価 方 法	筆記試験 (90%)、授業態度・実習 (10%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	言語聴覚療法セミナーⅠ	授 業 形 態	演習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	2年次通年	必 修 ・ 選 択	必須
科 目 担 当 者	吉村 知佐子・光内 梨佐		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	教員の指導のもと、グループ形式をとり、言語聴覚士を目指す医療従事者として必要な知識について総合的に学習する。医療分野に関する専門用語の読み方、意味に関して、調べ方など基本的な学習法について、受動的な講義形式の授業でなく、自ら調べることや一定時間集中することなどを行うことで、基本的な学習態度・学習習慣を身につけることを目的とする。単なるシェア学習に留まらず、活発な意見交換や効率の向上を目指す。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 言語聴覚士を目指す医療従事者として必要な基礎知識、医学用語を専門書などにて、調べることができる。</li> <li>2. 調べた用語を理解できる。</li> <li>3. 調べた用語を他者に説明することができる。</li> <li>4. 得た知識を元にグループ間で意見交換し、知識を共有することができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	言語聴覚士に関連する専門用語の確認	
	2	キーワード学習の方法	
	3	キーワード学習の実践 1 (解剖学：脳)	
	4	キーワード学習の実践 2 (解剖学：心臓)	
	5	キーワード学習の実践 3 (解剖学：喉頭)	
	6	グループ学習の方法	
	7	グループ学習の実践 1 (解剖学：脳)	
	8	グループ学習の実践 2 (解剖学：心臓)	
	9	グループ学習の実践 3 (解剖学：喉頭)	
	10	キーワード学習の実践 4 (言語聴覚士国家試験問題：基礎分野)	
	11	キーワード学習の実践 5 (言語聴覚士国家試験問題：専門分野)	
	12	キーワード学習の実践 6 (言語聴覚士国家試験問題：高頻度出題問題)	
	13	グループ学習の実践 4 (言語聴覚士国家試験問題：基礎分野)	
	14	グループ学習の実践 5 (言語聴覚士国家試験問題：専門分野)	
15	グループ学習の実践 6 (言語聴覚士国家試験問題：高頻度出題問題)		
教 科 書	大森孝一、永井知代子、深浦順一、渡邊治編「言語聴覚士テキスト 第3版」 言語聴覚士国家試験対策委員会編「2020年版 言語聴覚士国家試験過去問3年間の解答と解説」		
事前事後の予習復習	学修した知識を毎回必ず復習して、専門用語等を確実に覚えること。次回の授業時にその用語を他者に自分の言葉を用いて、説明できるようにしておくこと。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	平野哲雄他 「言語聴覚療法 臨床マニュアル 改定第3版」		
成 績 評 価 方 法	課題 (50%)、定期試験 (50%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後 *変更する可能性がありますので、研究室の入り口に掲示された時間帯を確認してください。		

授 業 科 目 名	言語聴覚療法セミナーⅡ	授 業 形 態	演習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	3年前・後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	光内 梨佐、吉村 知佐子		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	言語聴覚療法の専門性に対する興味・関心を高めるために、基礎分野と専門分野の関連性について学ぶ。具体的には、文献検索・文献収集の方法を学習し、文献の内容が理解できるよう、文献抄読などを通して学習の基本的な方法について、グループで意見交換を行いながら進める。単なるシェア学習に留まらず、活発な意見交換や効率の向上を目指す。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 言語聴覚士を目指す医療従事者として必要な基礎知識、医学用語を専門書などにて、調べることができる。</li> <li>2. 調べた用語を理解できる。</li> <li>3. 調べた用語を他者に説明することができる。</li> <li>4. 得た知識を元にグループ間で意見交換し、知識を共有することができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	調べ学習実践① (科目：内科学)	
	2	グループ学習実践① (科目：内科学)	
	3	調べ学習実践② (科目：臨床神経学)	
	4	グループ学習実践② (科目：臨床神経学)	
	5	グループ学習実践③ (科目：小児科学)	
	6	グループ学習実践④ (科目：総論)	
	7	グループ学習実践⑤ (科目：音声学)	
	8	グループ学習実践⑥ (科目：失語症 1)	
	9	グループ学習実践⑦ (科目：失語症 2)	
	10	グループ学習実践⑧ (科目：聴覚障害)	
	11	グループ学習実践⑨ (科目：言語発達学)	
	12	グループ学習実践⑩ (科目：小児聴覚障害学)	
	13	グループ学習実践⑪ (科目：成人聴覚障害学)	
	14	グループ学習実践⑫ (科目：補聴器・人工内耳)	
15	グループ学習実践⑬ (科目：言語発達障害学)		
教 科 書	大森孝一 編 『言語聴覚士テキスト 第3版』 医歯薬出版株式会社 言語聴覚士国家試験対策委員会 編 『2021年版 言語聴覚士国家試験過去問3年間の解答と解説』 病気がみえる vol. 7 脳・神経 メディックメディア社		
事前事後の予習復習	学修した知識を毎回必ず復習して、専門用語等を確実に覚えること。次回の授業時にその用語を他者に自分の言葉を用いて、説明できるようにしておくこと。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	平野哲雄 他 『言語聴覚療法 臨床マニュアル 改定第3版』 協同医書出版社		
成 績 評 価 方 法	課題 (30%)、定期試験 (70%)		
オ フ ィ ス ア ウ ー	授業終了後 *変更する可能性がありますので、研究室の入り口に掲示された時間帯を確認してください。		

授 業 科 目 名	言語発達障害検査実習	授 業 形 態	実習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	2年前期	必 修 ・ 選 択	必修
担 当 教 員 名	吉村知佐子、稲田 勤		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	小児領域の臨床場面で実施されている検査について、目的や対象、実施方法について学修する。発達検査を実施しにくい乳幼児のための質問紙法を始め、言語性知能、動作性知能を測定できる発達検査、言語発達だけでなく身体発達を測定できる検査、言語学習能力を測定できる検査、言語発達遅滞検査、語彙発達検査、および視知覚認知面の発達検査について学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 検査者として適した言葉遣い、姿勢を身につけることができる。</li> <li>2. 検査の概要について説明ができる。</li> <li>3. マニュアルを見ながら検査が実施できる。</li> <li>4. マニュアルを見ながら学生間で実施できる。</li> <li>5. マニュアルを見ずに学生間で実施できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	授業ガイダンス、乳幼児の質問紙法発達検査〔検査の実習〕	
	2	幼児の言語性知能、動作性知能発達検査①	
	3	幼児の言語性知能、動作性知能発達検査②	
	4	学童期からの言語性知能、動作性知能発達検査①	
	5	学童期からの言語性知能、動作性知能発達検査②	
	6	言語発達および身体発達検査①	
	7	言語発達および身体発達検査②	
	8	言語学習能力検査①	
	9	言語学習能力検査②	
	10	言語発達遅滞検査①	
	11	言語発達遅滞検査②	
	12	神経心理学検査①	
	13	神経心理学検査②	
	14	語彙発達検査	
15	視知覚発達検査		
教 科 書	新版K式発達検査研究会 『新版K式発達検査法 2001版 標準化資料と実施法』 ナカニシヤ出版 日本版WISC-IV刊行委員会 『日本版WISC-IV知能検査法』 日本文化科学社 小寺富子、倉井成子、佐竹恒夫 監修 『国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査マニュアル』 エスコアール		
事前事後の予習復習	予習として、検査のマニュアル、事前に配布する資料に目を通しておくこと。復習としては、検査演習活動を積極的に空き時間を活用し、実施すること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	津守真 『乳幼児精神発達診断法 0才～3才まで』 『乳幼児精神発達診断法 3才～7才まで』 大日本図書		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (80%)、レポート (20%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	言語発達障害評価実習	授 業 形 態	実習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	2年後期	必 修 ・ 選 択	必修
担 当 教 員 名	稲田 勤、吉村知佐子		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	「言語発達障害検査実習」で実施した検査について、その検査結果をどのように解釈するのかについて学修する。また、検査から得られたデータと生育歴から運動発達面、知的発達面、社会性など様々な情報とを照らし合わせ、評価としての、障害の有無、種類、発達レベル等、言語聴覚療法に必要な評価方法について学修し、それらを整理した症例報告の作成についても学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 評価方法と報告書の書き方が理解できる。 2. 検査結果から評価（解釈）する方法が理解できる。 3. 評価内容から報告書を作成する方法が理解できる。 4. 評価・報告書の作成ができる。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	評価方法と報告書の書き方	
	2	評価 1（発達遅滞検査結果の解釈）	
	3	評価 2（言語発達遅滞症例報告書作成①）	
	4	評価 3（言語発達遅滞症例報告書作成②）	
	5	評価 4（言語発達、身体発達検査の解釈）	
	6	評価 5（言語発達、身体発達障害症例報告書作成①）	
	7	評価 6（言語発達、身体発達障害症例報告書作成②）	
	8	評価 7（神経心理学検査結果の解釈）	
	9	評価 8（神経心理関連の症例報告書作成①）	
	10	評価 9（神経心理関連の症例報告書作成②）	
	11	評価 10（言語学習能力検査結果の解釈）	
	12	評価 11（言語学習障害症例報告書作成①）	
	13	評価 12（言語学習障害症例報告書作成②）	
	14	評価 13（語彙発達検査結果等の解釈）	
15	評価 14（語彙発達障害症例の報告書の作成）		
教 科 書	新版K式発達検査研究会 『新版K式発達検査法 2001版 標準化資料と実施法』 ナカニシヤ出版 日本版 WISC-IV 刊行委員会 『日本版 WISC-IV 知能検査法』 日本文化科学社 小寺富子、倉井成子、佐竹恒夫 監修 『国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査マニュアル』 エスコアール		
事前事後の予習復習	予習として、検査のマニュアル、事前に配布する資料に目を通しておくこと。復習としては、実習で行った検査の解釈を空き時間を活用し積極的に実施すること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	津守真 『乳幼児精神発達診断法 0才～3才まで』 『乳幼児精神発達診断法 3才～7才まで』 大日本図書		
成 績 評 価 方 法	定期試験（80%）、レポート（20%）		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	聴覚検査学	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	2年後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	井上 真理子 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	聴覚検査のおもな目的は聴覚障害の性質・程度の把握と難聴疾患の鑑別診断にある。小児・成人領域で用いられている、各種聴覚機能検査法について、目的、原理、結果の判定法について体系的について学修する。また、失語症、認知症など、聴覚障害が認められない症例に対する聴力検査の必要性についても学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	検査の実施に臨む姿勢を身につけ、検査の目的・手順を理解する。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	聴覚器の構造と機能	
	2	聴覚障害についての基礎知識	
	3	聴力検査の概要	
	4	聴力検査の種類	
	5	聴力検査の目的	
	6	気導聴力検査の方法	
	7	気導聴力検査の方法	
	8	マスクング	
	9	骨導聴力検査の方法	
	10	骨導聴力検査の方法	
	11	語音聴力検査について	
	12	語音聴取閾値検査の方法	
	13	語音聴取閾値検査の方法	
	14	語音弁別検査の方法	
15	語音弁別検査の方法		
教 科 書	聴覚検査の実際 聴覚障害学		
事前事後の予習復習			
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献			
成 績 評 価 方 法	定期試験 (100%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	聴覚障害検査実習	授 業 形 態	実習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	2年後期	必 修 ・ 選 択	必修
担 当 教 員 名	井上真理子（兼任）		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	「聴覚検査学」で学修した、各種聴覚機能検査法の実施方法について学修する。特に重要な、純音聴力検査、語音聴力検査、乳幼児聴力検査を中心に演習を行なう。また、障害の評価・診断に必要な聴覚検査法を、その目的や、症例に応じた検査が選択・実施でき、結果の判定ができることを目標に学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 検査の目的が理解できる。 2. 目的に応じた検査の選択ができる。 3. マニュアルを見ながら、スムーズに検査を実施できる。 4. マニュアルを見ずに、学生間でスムーズに検査を実施できる。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	聴覚器の機能・構造（復習含む）	
	2	聴覚検査の概要（役割・準備物等）	
	3	聴覚検査の実際（様々な検査について）	
	4	純音聴力検査1（気導聴力検査 その1）	
	5	純音聴力検査2（気導聴力検査 その2）	
	6	純音聴力検査3（気導聴力検査 その3）	
	7	純音聴力検査4（骨導聴力検査 その1）	
	8	純音聴力検査5（骨導聴力検査 その2）	
	9	純音聴力検査6（骨導聴力検査 その3）	
	10	語音聴力検査1（語音聴取閾値検査 その1）	
	11	語音聴力検査2（語音聴取閾値検査 その2）	
	12	語音聴力検査3（語音聴取閾値検査 その3）	
	13	語音聴力検査4（語音弁別検査 その1）	
	14	語音聴力検査5（語音弁別検査 その2）	
	15	語音聴力検査6（語音弁別検査 その3）	
教 科 書	日本聴覚医学会 『聴覚検査の実際』 南山堂 聴覚障害学		
事前事後の予習復習	聴覚器の機能・構造（履修済み）について、復習をしておくこと。検査手順に関しては、空き時間等を活用し十分に練習を重ねること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	廣瀬肇 『言語聴覚士テキスト』 医歯薬出版		
成 績 評 価 方 法	定期試験（筆記50%・実技50%）		
オ フ ィ ス ア ウ ー	随時（要予約）		

授 業 科 目 名	失語・高次脳機能障害検査実習	授 業 形 態	実習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	3年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	光内 梨佐・池 聡 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	失語・高次脳機能障害領域で実施されている検査について目的や対象、実施方法について学修する。失語症については、スクリーニング検査、鑑別診断検査、掘り下げ検査を中心に学修する。高次脳機能障害では、認知症、失行・失認について実施し、特に認知症については、簡易検査から複雑な検査について学修する。実施方法については、検査見本の観察とグループでの実習を通じて学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 失語・高次脳機能障害領域で実施されている検査について目的・対象を理解できる。</li> <li>2. スクリーニング検査、鑑別診断検査、掘り下げ検査の各検査の目的の違いについて 理解できる。</li> <li>3. スクリーニング検査、鑑別診断検査、掘り下げ検査の実施方法について理解でき、実施できる。</li> <li>4. 実施した各検査より問題点及び保たれている能力などを抽出し、対象について評価できる。</li> <li>5. 場面、対象に応じてどのような検査を実施するのか、選別できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	授業ガイダンス スクリーニング検査、鑑別診断検査、掘り下げ検査の理解 [目的の違い]	
	2	スクリーニング検査実習①	
	3	スクリーニング検査実習②	
	4	失語症に対する鑑別診断検査①	
	5	失語症に対する鑑別診断検査②	
	6	失語症に対する鑑別診断検査③	
	7	失語症に対する鑑別診断検査④	
	8	失語症に対する掘り下げ検査	
	9	高次脳機能障害 (認知症) に対する検査①	
	10	高次脳機能障害 (認知症) に対する検査②	
	11	高次脳機能障害 (失行・失認) に対する検査	
	12	高次脳機能障害 (注意障害・意欲) に対する検査	
	13	高次脳機能障害 (遂行機能障害症候群) に対する検査	
	14	高次脳機能障害 (半側空間無視等) に対する検査	
15	総合演習 [事例を用いた検査の選択、実施、評価]		
教 科 書	藤田郁代 編 標準言語聴覚障害学 『高次脳機能障害学』 第3版 医学書院 大塚裕一 編 言語聴覚士ドリルプラス 『失語症』 診断と治療社 白波瀬元 編 ST評価ポケット手帳 ヒューマンプレス 日本高次脳機能障害学会 著 標準失語症検査マニュアル 新興医学出版社		
事前事後の予習復習	予習は次回に実施する検査の目的、対象、内容について教科書を読み、まとめること。その中で新しく見る用語については調べてくること。復習は授業で学んだことを確認しながらノートを作成すること。また、授業時間内では検査の実施時間が短いため、授業で学んだ検査を実施し、十分な演習活動を学生間で実施すること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	廣瀬肇 監修 『言語聴覚士テキスト』 医歯薬出版		
成 績 評 価 方 法	課題 (10%)、小テスト (10%)、定期試験 (筆記 40%・実技 40%)		
オ フ ィ ス ア ウ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	失語・高次脳機能障害評価実習	授 業 形 態	実習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	3年後期	必 修 ・ 選 択	必修
担 当 教 員 名	石川 裕治		
授業の概要・目的	<p>「失語・高次脳機能障害検査実習」で実施した検査について、その検査結果をどのように解釈するのかについて学修する。主に失語症、認知症を中心に行い、失語症については、現病歴、既往歴、また脳の画像所見等を照らし合わせ、失語症の有無、タイプ分類、重症度について、また、予後予測をもとにゴール設定や訓練目的、方法についても学修する。認知症については、知的の低下のレベルを判断し、認知症の診断基準に達しているのか、また、日常生活や言語検査へどのように影響を与えているのかについて学修する。</p>		
授業の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 失語症の症例レポートの書き方が理解できる。</li> <li>2. 失語症の症例レポートを書くことができる。</li> <li>3. 失語症と認知症の鑑別が理解できる。</li> <li>4. 認知症の症例レポートを書くことができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	頭部画像の見方	
	2	症例レポートの書き方1（失語症の有無）	
	3	症例レポートの書き方2（タイプ分類）	
	4	症例レポートの書き方3（予後予測とゴール設定・訓練の立案）	
	5	失語症例1（グループ単位で症例レポートの作成・ブローカ失語）	
	6	失語症例2（グループ単位で症例レポートの作成・ブローカ失語）	
	7	失語症例3（グループ単位で症例レポートの作成・ブローカ失語）	
	8	失語症例4（グループ単位で症例レポートの作成・Wernicke失語）	
	9	失語症例5（グループ単位で症例レポートの作成・Wernicke失語）	
	10	失語症例6（グループ単位で症例レポートの作成・Wernicke失語）	
	11	失語症例7（グループ単位で症例レポートの作成・伝導失語）	
	12	失語症例8（グループ単位で症例レポートの作成・伝導失語）	
	13	失語症例9（グループ単位で症例レポートの作成・伝導失語）	
	14	認知症例1（グループ単位で症例レポートの作成）	
15	認知症例2（グループ単位で症例レポートの作成）		
教 科 書	石川裕治 『言語聴覚士のための頭部位診断図』 エスコアール 石川裕治 編著 言語聴覚療法シリーズ4 『改訂 失語症』 建帛社		
事前事後の予習復習	事前に、「失語・高次脳機能障害検査実習」で学修した、失語症検査等の実施方法を理解し、実施できるよう学生同士で練習しておくこと。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	特になし		
成 績 評 価 方 法	定期試験（100%）		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授業科目名	発声発語・嚥下障害検査実習	授業形態	実習
単位数	1	回数	15回
履修年次	3年前期	必修・選択	必修
担当教員名	光内 梨佐、池 聡（兼任）		
授業の概要・目的	発声発語・嚥下障害の領域の臨床現場で実施されている検査について、目的や対象、実施方法について学修する。構音に関しては、呼吸、発声発語器官、構音運動について、共鳴に関して、鼻咽腔閉鎖機能について、音声に関しては、呼吸機能、声質等について検査実習を行う。また、嚥下に関しては、認知機能、口腔機能、嚥下機能を中心とし検査実習を行う。		
授業の到達目標	1. 発声発語障害に関する検査の目的等について理解できる。 2. 発声発語障害に関する検査を学生間で実施できる。 3. 摂食・嚥下障害に関する検査の目的等について理解できる。 4. 摂食・嚥下障害に関する検査を学生間で実施できる。		
授業計画	回	内容	
	1	授業ガイダンス、発声発語器官に関する検査の目的等	
	2	構音障害に関する検査（呼吸機能①）	
	3	構音障害に関する検査（呼吸機能②）	
	4	構音障害に関する検査（発声発語器官）	
	5	構音障害に関する検査（構音運動）	
	6	構音障害に関する検査（共鳴機能）	
	7	構音障害に関する検査（構音：単音・単語レベル）	
	8	構音障害に関する検査（構音：短文・長文レベル）	
	9	音声障害に関する検査（呼吸機能）	
	10	音声障害に関する検査（共鳴等）	
	11	音声障害に関する検査（声質等）	
	12	嚥下障害に関する検査の目的等	
	13	嚥下障害に関する検査（認知期から口腔期）	
	14	嚥下障害に関する検査（口腔期から食道期①）	
15	嚥下障害に関する検査（口腔期から食道期②）		
教科書	西尾正輝 『AMSD 標準ディサースリア検査法手引』 インテルナ出版 聖隷嚥下チーム 『嚥下障害ポケットマニュアル』第3版 医歯薬出版		
事前事後の予習復習	予習としては、実施する予定の検査に関する障害について学修しておくこと。授業後は実施した検査を学生間で実習しておくこと。		
履修の条件	特になし		
参考文献	熊倉勇美、今井智子 編 標準言語聴覚障害学『発声発語障害学』第2版 医学書院 熊倉勇美、椎名英貴 編 標準言語聴覚障害学『摂食嚥下障害学』 医学書院 日本高次脳機能障害学会 Brain Function Test 委員会 『SLTA-ST 標準失語症検査補助テストマニュアル』 新興医学出版社		
成績評価方法	課題（20%）、定期試験（実技40%・40%）		
オフィスアワー	授業終了後		

授 業 科 目 名	発声発語・嚥下障害評価実習	授 業 形 態	実習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	3年後期	必 修 ・ 選 択	必修
担 当 教 員 名	光内 梨佐、上松 智幸（兼任）		
授業の概要・目的	「発声発語・嚥下障害検査実習」で実施した検査について、その検査結果をどのように解釈するのかについて学修する。各検査結果から、発声発語関連では、構音に関しては、呼吸から共鳴機能、音声に関しては、声質から発声持続等、嚥下に関しては、認知期から嚥下期までの評価方法について学修し、総合評価として、障害の有無、障害のタイプ、重症度など症例報告の書き方について学修する。		
授業の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 発声発語器官に関する評価方法を理解できる。</li> <li>2. 構音障害の検査結果を解釈でき、問題点を抽出できる。</li> <li>3. 音声障害の検査結果を解釈でき、問題点を抽出できる。</li> <li>4. 摂食・嚥下器官に関する評価方法を理解できる。</li> <li>5. 摂食・嚥下器官に関する検査結果を解釈でき、問題点を把握できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	担 当
	1	発声発語器官に関する検査と評価について	光内
	2	構音障害の評価（呼吸）	光内
	3	構音障害の評価（構音）	光内
	4	構音障害の評価（共鳴）	光内
	5	音声障害の評価（呼吸様式）	光内
	6	音声障害の評価（声質）	光内
	7	音声障害の評価（発声持続等）	光内
	8	音声障害の評価（声の高さ・大きさ等）	光内
	9	摂食・嚥下器官に関する検査と評価について	上松
	10	摂食・嚥下器官に関する評価（認知期①）	上松
	11	摂食・嚥下器官に関する評価（認知期②）	上松
	12	摂食・嚥下器官に関する評価（口腔期）	上松
	13	摂食・嚥下器官に関する評価（嚥下期①）	上松
	14	摂食・嚥下器官に関する評価（嚥下期②）	上松
15	摂食・嚥下器官に関する評価（嚥下期③）	上松	
教 科 書	藤田郁代 監修 『標準言語聴覚障害学 摂食嚥下障害学』 第2版 医学書院		
事前事後の予習復習	予習としては「発声発語・嚥下障害検査実習」で実施した検査を復習しておくこと。授業後は、修得した内容を学生間で確認しておくこと。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	日本嚥下障害臨床研究会 編 『嚥下障害の臨床』 医歯薬出版 聖隷嚥下チーム 『嚥下障害ポケットマニュアル』第3版 医歯薬出版 熊倉勇美、今井智子 編 標準言語聴覚障害学『発声発語障害学』第2版 医学書院 熊倉勇美、椎名英貴 編 標準言語聴覚障害学『摂食嚥下障害学』医学書院		
成績評価方法	課題（40%）、定期試験（60%）		
オフィスアワー	授業終了後		

授 業 科 目 名	心理測定法実習	授 業 形 態	実習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	3年後期	必 修 ・ 選 択	必修
担 当 教 員 名	中野 良哉 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	現在用いられている様々な臨床検査の基礎を成している精神物理学的測定法、および観察法、面接法、質問紙法、検査法、実験法など多様な測定手法の基礎的な考え方と実践法に関わる基礎知識を身につけることを目的とする。また、グループワークを通して、心理検査の実施、実験計画の立案、質問紙調査の作成・実施・分析・結果の解釈を行う。最後にプレゼンテーションを行い、調査内容を他者に伝達する方法について学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 心理測定手法の長所、短所について説明できる。</li> <li>2. 測定の手段・方法によって測定対象を定義することができる。</li> <li>3. 質問紙作成の手順を理解し、説明、実施できる。</li> <li>4. 心理測定手法の特性を理解し、目的に応じた測定法を適切に選択できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	こころを測定するとは 心の測定とその方法	
	2	感覚の測定 (刺激閾と刺激項、弁別閾、ウェーバーの法則、主観的等価点)	
	3	精神物理学的測定法 (調整法、極限法、恒常法、信号検出理論)	
	4	尺度構成法 直接法と間接法 (評定尺度法、順位法、一対比較法、SD法、多次元尺度法)	
	5	検査法 性格検査の実施と結果の解釈	
	6	実験法 実験計画の立案	
	7	質問紙法の実際 1 研究計画、仮説の設定	
	8	質問紙法の実際 2 質問項目の作成	
	9	質問紙法の実際 3 質問紙の実施	
	10	質問紙法の実際 4 データ入力	
	11	質問紙法の実際 5 データの集計	
	12	質問紙法の実際 6 データの統計的分析	
	13	質問紙法の実際 7 結果の解釈	
	14	質問紙法の実際 8 プレゼンテーションの準備	
15	質問紙法の実際 9 研究結果の発表		
教 科 書	配布資料		
事前事後の予習復習	学習した内容をノートにまとめ、整理、復習しておくこと (各回 100分程度) 質問紙作成の各段階で検討した内容を記録し、学期末にレポートとして提出すること (各回 90分程度)		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	市川伸一 『心理測定法への招待』 サイエンス社		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (30%)、実習参加態度 (50%)、レポート (20%)		
オ フ ィ ス ア ウ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	言語聴覚療法技術実習Ⅰ (言語発達障害)	授 業 形 態	実習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	3年後期	必 修 ・ 選 択	必修
担 当 教 員 名	稲田 勤		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	「言語聴覚療法臨床実習Ⅰ」の経験をもとに、「言語聴覚療法臨床実習Ⅱ」の準備として、小児領域の言語聴覚療法について学修する。「言語発達障害検査実習」および「言語発達障害評価実習」で学修した知識・技術を、実際の言語聴覚療法にどのように取り入れていくのか等、具体的な言語聴覚療法プログラムの立案・実施に関する学修を行う。また、小児の対象者および家族、またスタッフ等との接し方についても学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 対象者および家族、スタッフ等との接し方が理解できる。 2. 各種検査の結果から言語聴覚療法プログラムの立案ができる。 3. プログラムの立案に基づき言語聴覚療法が学生間で実施できる。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	小児の対象者および家族との初回面談での情報確認項目	
	2	実習施設におけるスタッフとの接し方	
	3	言語聴覚療法 1 (言語発達障害領域①)	
	4	言語聴覚療法 2 (言語発達障害領域②)	
	5	言語聴覚療法 3 (言語発達障害領域③)	
	6	言語聴覚療法 4 (言語・身体発達障害領域①)	
	7	言語聴覚療法 5 (言語・身体発達障害領域②)	
	8	言語聴覚療法 6 (言語・身体発達障害領域③)	
	9	言語聴覚療法 7 (神経心理学領域①)	
	10	言語聴覚療法 8 (神経心理学領域②)	
	11	言語聴覚療法 9 (神経心理学領域③)	
	12	言語聴覚療法 10 (学習障害領域①)	
	13	言語聴覚療法 11 (学習障害領域②)	
	14	言語聴覚療法 12 (重複障害領域①)	
15	言語聴覚療法 13 (重複障害領域②)		
教 科 書	新版 K 式発達検査研究会 『新版 K 式発達検査法 2001 版 標準化資料と実施法』 ナカニシヤ出版 日本版 WISC-IV 刊行委員会 『日本版 WISC-IV 知能検査法』 日本文化科学社 小寺富子, 倉井成子, 佐竹恒夫 監修 『国リハ式<S-S 法>言語発達遅滞検査マニュアル』 エスコアール		
事前事後の予習復習	予習として、検査のマニュアル、事前に配布する資料に目を通しておくこと。復習としては、実習で行った言語聴覚療法プログラムの立案・実施を空き時間を活用し積極的に行うこと。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	津守真 『乳幼児精神発達診断法 0 才～3 才まで』『乳幼児精神発達診断法 3 才～7 才まで』 大日本図書		
成 績 評 価 方 法	定期試験 (50%)、レポート (50%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	言語聴覚療法技術実習Ⅱ (高次脳機能障害)	授 業 形 態	実習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	3年後期	必 修 ・ 選 択	必修
担 当 教 員 名	光内 梨佐、井上 浩明 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	「言語聴覚療法臨床実習Ⅰ」の経験をもとに、「言語聴覚療法臨床実習Ⅱ」の準備として、高次脳機能領域の言語聴覚療法について学修する。特に、訓練プログラムの立案から、訓練を中心に学修する。また、実際の臨床現場における言語聴覚療法について、その基礎的知識と技術を学修するとともに、対象者やその家族、関連スタッフとの接し方についても学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 高次脳機能領域の言語聴覚療法を理解できる。 2. 高次脳機能障害患者の訓練の立案ができる。 3. 高次脳機能障害患者に対する訓練が学生間で実施できる。 4. 急性期病棟における、対象者および家族、またスタッフ等との接し方について理解できる。		
授 業 計 画	回	内 容	担 当
	1	授業ガイダンス、高次脳機能障害の概要	光内
	2	認知症者の言語聴覚療法1 (訓練プログラム立案)	光内
	3	認知症者の言語聴覚療法2 (訓練)	光内
	4	失認患者の言語聴覚療法1 (訓練プログラム立案)	光内
	5	失認患者の言語聴覚療法2 (訓練)	光内
	6	失行患者の言語聴覚療法1 (訓練プログラム立案)	光内
	7	失行患者の言語聴覚療法2 (訓練)	光内
	8	合併症患者の言語聴覚療法1 (訓練プログラム立案)	光内
	9	合併種患者の言語聴覚療法2 (訓練)	光内
	10	高次脳機能障害患者への言語聴覚療法 (家族対応)	光内
	11	臨床現場における言語聴覚療法の実際	井上
	12	臨床現場における言語聴覚療法1 (情報整理)	井上
	13	臨床現場における言語聴覚療法2 (訓練プログラム立案)	井上
	14	臨床現場における言語聴覚療法3 (訓練)	井上
15	臨床現場における他職種、対象者・家族等への対応	井上	
教 科 書	都筑澄夫 監修 『明日からの臨床・実習に使える言語聴覚障害診断—成人編』 株式会社医学と看護社 藤田郁代 編 標準言語聴覚障害学『高次脳機能障害学』最新版 医学書院 白波瀬元 編 ST評価ポケット手帳 ヒューマンプレス		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	事前に授業に該当する部分を教科書で熟読しておくこと。また、授業後は症例、訓練内容等に関する論文を検索し、読み、必要な資料を用意しておくこと。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	長谷川賢一 編著 言語聴覚療法シリーズ3 『改訂高次脳機能障害』 建帛社		
成 績 評 価 方 法	課題 (20%)、小テスト (20%)、定期試験 (60%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	言語聴覚療法技術実習Ⅲ (失語)	授 業 形 態	実習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	4年前期	必 修 ・ 選 択	必修
担 当 教 員 名	石川 裕治、西田 香利 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	「言語聴覚療法臨床実習Ⅱ」の経験をもとに、「言語聴覚療法臨床実習Ⅲ」の準備として、臨床実習の対象として多い失語領域の言語聴覚療法について学修する。症例を通じて、検査から、評価、訓練立案、訓練といった一連の流れに沿って学修する。また、臨床現場で多く用いられている、非言語的検査・訓練、絵カードや音楽を用いた訓練についても学修する。基礎的な知識・技術の修得だけではなく、実際の言語聴覚療法場面を設定し、対象者および家族、またスタッフ等との接し方についても学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 失語症検査の目的・方法が理解できる。</li> <li>2. 失語検査の記録・評価ができる。</li> <li>3. 失語症者に対する訓練目的、方法が理解できる。</li> <li>4. 非言語的コミュニケーションの検査 (学生間) ・評価ができる。</li> <li>5. 絵カード・音楽等を用いた訓練教材の作成と学生間で実施ができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	担 当
	1	失語症の検査の概略	西田
	2	症例検討1 (検査実習: 記録)	西田
	3	失語症の言語聴覚療法 (具体的手法)	石川
	4	言語聴覚療法1 (非言語検査・訓練教材の作成)	石川
	5	言語聴覚療法2 (非言語検査・訓練の実技)	石川
	6	症例検討2 (評価実習)	西田
	7	症例検討3 (訓練立案)	西田
	8	言語聴覚療法3 (検査・訓練用絵カードの作成)	石川
	9	言語聴覚療法4 (絵カードを用いた検査実技)	石川
	10	言語聴覚療法5 (絵カードを用いた訓練実技)	石川
	11	症例検討4 (訓練実習: 教材作成)	西田
	12	症例検討5 (訓練実習: 実施上の留意点)	西田
	13	言語聴覚療法6 (音楽教材の作成)	石川
	14	言語聴覚療法7 (音楽教材を用いた検査実技)	石川
15	言語聴覚療法8 (音楽教材を用いた訓練実技)	石川	
教 科 書	石川裕治 編著 言語聴覚療法シリーズ4『改訂失語症』 建帛社		
事前事後の予習復習	授業前に失語症検査について学生間で実施できるよう練習しておくこと。授業終了後、実技関連に関しては、臨床実習までに実施できるよう学生間で学修すること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	特になし		
成 績 評 価 方 法	レポート (100%)		
オ フ ィ ス ア ウ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	言語聴覚療法技術実習Ⅳ (発声発語・嚥下障害)	授 業 形 態	実習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	4年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	石川 裕治、上松 智幸 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	「言語聴覚療法臨床実習Ⅱ」の経験をもとに、「言語聴覚療法臨床実習Ⅲ」の準備として、臨床実習の対象として多く経験する、発声発語・嚥下領域の言語聴覚療法について学修する。臨床実習の対策として、事例を通して、検査の確認から、訓練プログラムの立案、訓練まで、一連の流れに沿って言語聴覚療法について体験的に学修する。基礎的な知識・技術の修得に加え、対象者および家族、またスタッフ等との接し方についても学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 発声発語・嚥下領域の言語聴覚療法について理解できる。 2. 対象者および家族、またスタッフ等との接し方等について理解できる。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	授業ガイダンス 発声発語器官、摂食・嚥下器官の解剖学的知識	石川
	2	発声発語障害に対する言語聴覚療法 1 (検査実習①)	石川
	3	発声発語障害に対する言語聴覚療法 2 (検査実習②)	石川
	4	発声発語障害に対する言語聴覚療法 3 (プログラム立案①)	石川
	5	発声発語障害に対する言語聴覚療法 4 (プログラム立案②)	石川
	6	発声発語障害に対する言語聴覚療法 5 (訓練手技①)	石川
	7	発声発語障害に対する言語聴覚療法 6 (訓練手技②)	石川
	8	発声発語障害に対する言語聴覚療法 7 (訓練手技③)	石川
	9	嚥下機能の評価・訓練技術について	上松
	10	嚥下障害に対する言語聴覚療法 1 (検査実習①)	上松
	11	嚥下障害に対する言語聴覚療法 2 (検査実習②)	上松
	12	嚥下障害に対する言語聴覚療法 3 (訓練プログラム立案)	上松
	13	嚥下障害に対する言語聴覚療法 4 (間接的訓練)	上松
	14	嚥下障害に対する言語聴覚療法 5 (直接的訓練)	上松
15	嚥下障害に対する言語聴覚療法 5 (口腔ケア)	上松	
教 科 書	聖隷嚥下チーム 『嚥下障害ポケットマニュアル』第3版 医歯薬出版 熊倉勇美、今井智子 編 標準言語聴覚障害学『発声発語障害学』第2版 医学書院 熊倉勇美、椎名英貴 編 標準言語聴覚障害学『摂食嚥下障害学』 医学書院		
事前事後の予習復習	予習は次回に実施する検査の目的、実施、評価のポイントについて教科書を読み、学生間で練習を実施してくること。復習は授業で学んだことを確認しながら、学生間で演習活動を実施することまた、授業後は症例、訓練内容等に関する論文を検索し、読み、必要な資料を手元に用意しておくこと。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	藤島一郎、柴本勇 監修 『摂食・嚥下リハビリテーションー動画でわかる』 中山書店		
成 績 評 価 方 法	課題 (10%)、小テスト (10%)、定期試験 (筆記 20%・実技 60%)		
オ フィ ス ア ワ ー	授業終了後		

授 業 科 目 名	言語聴覚療法臨床実習 I	授 業 形 態	実習【臨】
単 位 数	1	回 数	1 週間
履 修 年 次	2 年後期	必 修 ・ 選 択	必修
担 当 教 員 名	武内 和弘、石川 裕治、稲田 勤、吉村知佐子、光内 梨佐、櫻木 理恵		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	言語聴覚療法について、より実践的に知識を習得するため、言語聴覚療法の提供の場である病院および施設において行う。医療専門職として基本となる病院や施設の仕組みを理解するとともに、各部門間の役割と言語聴覚士の業務について学修する。具体的には、病院や施設等における言語聴覚療法の実際と対象者の概要について学ぶとともに、併せて医療専門職としての基本的態度を身につけられるよう、指導者や関係スタッフ、対象者とのコミュニケーションを体験する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 病院や施設の役割及び機能について知ることができる。</li> <li>2. 言語聴覚士の実際の業務を知ることができる。</li> <li>3. 言語聴覚療法の対象者の概要について知ることができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	<b>内 容</b>		
	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学内における事前準備 <ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーションにて、臨床実習の目的や心得、リスク管理などについて説明する。</li> <li>・臨床実習の目的に合わせて、事前学習を行う。</li> </ul> </li> <li>2. 臨床実習 <ul style="list-style-type: none"> <li>・期間は1週間とし、医療・福祉施設等で実習を行う。</li> <li>・臨床実習指導者の指示に従い、指導者の助言を受けながら学修する。</li> <li>・臨床実習指導者や関係スタッフ、対象者とのコミュニケーションを行う。</li> <li>・実習ノートの記載</li> </ul> </li> <li>3. 学内における事後学修 <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生をグループに分けて、経験した実習内容について報告会を行う。</li> <li>・各グループに専任教員を配置して、適宜助言・指導を行う。</li> </ul> </li> </ol>		
教 科 書	配布資料		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前に言語聴覚療法臨床実習 I の手引きをよく読み、言語聴覚療法の概要や対象者の概要について調べておく。また、「言語聴覚障害学総論 I」の復習をしておくこと。</li> <li>・事後には臨床実習の学修内容について振り返り、自己の課題について取り組む。</li> </ul>		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	特になし		
成 績 評 価 方 法	<p>全日程の5分の4以上の出席とする。</p> <p>①臨床実習指導者による成績評価、②臨床実習中の記録・提出物、③臨床実習終了後の報告会での報告内容、④学内における専任教員の指導による改善状況、以上の4項目より臨床実習委員会にて総合的に判断する。</p>		
オ フ ィ ス ア ウ ー	オリエンテーション時に説明する。		

授 業 科 目 名	言語聴覚療法臨床実習Ⅱ	授 業 形 態	実習【臨】
単 位 数	3	回 数	3週間
履 修 年 次	3年後期	必 修 ・ 選 択	必修
担 当 教 員 名	武内 和弘、石川 裕治、稲田 勤、吉村知佐子、光内 梨佐、櫻木 理恵		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	言語聴覚士としての基本的態度を身につけるとともに、言語聴覚療法の評価について、より実践的に知識と技術を習得するため、言語聴覚療法の提供の場である病院および施設において行う。具体的には、指導者の指導と助言を得ながら、臨床場面において対象者の評価として、情報収集、インタビュー面接、検査・テスト、評価、訓練プログラムの立案を体験する。また、実施した内容を適切に記録・報告することを体験する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 言語聴覚療法の意義及び言語聴覚士の組織における役割と機能を理解することができる。</li> <li>2. 対象者への適切な対応ならびにリスク管理を行うことができる。</li> <li>3. 評価計画の立案、評価の準備と実施ができる。</li> <li>4. 評価結果の解釈と課題の焦点化ができる。</li> <li>5. 評価内容の報告と記録ができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	<b>内 容</b>		
	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学内における事前準備 <ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーションにて、臨床実習の目的や心得、リスク管理などについて説明する。</li> <li>・臨床実習の目的に合わせて、事前学習を行う。</li> </ul> </li> <li>2. 臨床実習 <ul style="list-style-type: none"> <li>・期間は3週間とし、医療・福祉等で実習を行う。</li> <li>・臨床実習指導者の指示に従い、指導者の助言を受けながら、対象者の言語聴覚療法評価を行う。</li> <li>・実施した内容についての記録および報告を行う。</li> <li>・実習ノートを記載する。</li> </ul> </li> <li>3. 学内における事後学修 <ul style="list-style-type: none"> <li>・報告会用の症例サマリーを作成する。</li> <li>・学生をグループに分けて経験した症例について報告会を行う。</li> <li>・学生主体でディスカッションを実施し、専任教員を配置して適宜、修正・助言・指導を行う。</li> <li>・知識・技術などの不足や誤った認識等があった場合には、その改善ができるように課題を提示する等の事後学修を専任教員が指導を行う。</li> </ul> </li> </ol>		
教 科 書	配布資料		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前に言語聴覚療法臨床実習Ⅱの手引きをよく読み、授業にて学修した言語聴覚療法評価についての知識・技術を習得しておく。また、「言語聴覚療法技術実習Ⅰ（言語発達障害）」「言語聴覚療法技術実習Ⅱ（高次脳機能障害）」の復習をしておくこと。</li> <li>・事後には臨床実習の学修内容について振り返り、自己の課題について取り組む。</li> </ul>		
履 修 の 条 件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言語聴覚療法技術論Ⅰ（言語発達障害）、言語聴覚療法技術論Ⅱ（高次脳機能障害）を受講していること。</li> <li>・2年次末までに修得しなければならない全ての科目を修得済みであること。</li> </ul>		
参 考 文 献	特になし		
成 績 評 価 方 法	<p>全日程の5分の4以上の出席とする。</p> <p>①臨床実習指導者による成績評価、②臨床実習中の記録・提出物及び症例サマリー、③臨床実習終了後の報告会での報告内容、④学内における専任教員の指導による改善状況、⑤臨床実習終了後の臨床実習Ⅱ判定試験（筆記ならびに実技・口頭試験）、以上の5項目より臨床実習委員会にて総合的に判断する。</p>		
オ フ ィ ス ア ウ ー	オリエンテーション時に説明する。		

授 業 科 目 名	言語聴覚療法臨床実習Ⅲ	授 業 形 態	実習 [臨]
単 位 数	16	回 数	16 週間
履 修 年 次	4 年前期	必 修 ・ 選 択	必修
担 当 教 員 名	武内 和弘、石川 裕治、稲田 勤、吉村知佐子、光内 梨佐、櫻木 理恵		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	言語聴覚士としての基本的態度を身につけるとともに、言語聴覚療法の評価から訓練・援助に至る一連の流れについて、より実践的に知識と技術を習得するため、言語聴覚療法の提供の場である病院および施設において行う。具体的には、指導者の指導と助言を得ながら、臨床場面における、情報収集、インテーク面接、検査・テスト、評価、訓練までを体験する。また、実施した内容を適切に記録・報告すること、他職種とのリハビリテーションのチームアプローチを体験する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 言語聴覚療法の意義及び言語聴覚士の組織における役割と機能を理解することができる。</li> <li>2. 対象者への適切な対応ならびにリスク管理を行うことができる。</li> <li>3. 評価計画の立案、評価の準備と実施ができる。</li> <li>4. 評価結果の解釈と課題の焦点化、言語聴覚療法の目標設定ができる。</li> <li>5. 治療計画の立案と実施ができる。</li> <li>6. 評価内容ならびに治療内容の報告と記録ができる。</li> <li>7. 言語聴覚士としての管理・運営業務を理解できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	<p style="text-align: center;"><b>内 容</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学内における事前準備 <ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーションにて、臨床実習の目的や心得、リスク管理などについて説明する。</li> <li>・臨床実習の目的に合わせて、事前学習を行う。</li> </ul> </li> <li>2. 臨床実習 <ul style="list-style-type: none"> <li>・期間は8週を2回とし、医療・福祉分野のうちの2施設で実習を行う。</li> <li>・臨床実習指導者の指示に従い、臨床実習指導者の助言を受けながら、対象者の言語聴覚療法評価、言語聴覚療法治療の計画立案と実施を行う。</li> <li>・実施した内容についての記録および報告を行う。</li> <li>・実習ノートに記載する。</li> <li>・管理・運営業務について学修する。</li> </ul> </li> <li>3. 学内における事後学修 <ul style="list-style-type: none"> <li>・報告会用の症例サマリーを作成する。</li> <li>・学生をグループに分けて経験した症例について報告会を行う。</li> <li>・学生主体でディスカッションを実施し、専任教員を配置して適宜、修正・助言・指導を行う。</li> <li>・知識・技術などの不足や誤った認識等があった場合には、その改善ができるように課題を提示する等の事後学修を専任教員が指導を行う。</li> </ul> </li> </ol>		
教 科 書	配布資料		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前に言語聴覚療法臨床実習Ⅱの手引きをよく読み、授業にて学修した言語聴覚療法評価についての知識・技術を習得しておく。また、「言語聴覚療法技術実習Ⅰ（言語発達障害）」「言語聴覚療法技術実習Ⅱ（高次脳機能障害）」の復習をしておくこと。</li> <li>・事後には臨床実習の学修内容について振り返り、自己の課題について取り組む。</li> </ul>		
履 修 の 条 件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言語聴覚療法技術論Ⅰ（言語発達障害）、言語聴覚療法技術論Ⅱ（高次脳機能障害）を受講していること。</li> <li>・2年次末までに修得しなければならない全ての科目を修得済みであること。</li> </ul>		
参 考 文 献	特になし		
成 績 評 価 方 法	<p>全日程の5分の4以上の出席とする。</p> <p>① 臨床実習指導者による成績評価、②臨床実習中の記録・提出物及び症例サマリー  ③臨床実習終了後の報告会での報告内容、④学内における専任教員の指導による改善状況、⑤臨床実習終了後の臨床実習Ⅱ判定試験（筆記ならびに実技・口頭試験）、以上の5項目より臨床実習委員会にて総合的に判断する。</p>		
オ フ ィ ス ア ワ ー	オリエンテーション時に説明する。		

授 業 科 目 名	地域福祉活動論	授 業 形 態	講義
単 位 数	1	回 数	8回
履 修 年 次	1年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	江 淵 聡 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	地域福祉活動は、地域住民のほか、民生委員・児童委員、社会福祉施設・社会福祉法人などの社会福祉関係者、保健・医療・教育などの関係機関の参加、協力のもと、「誰もが安心して暮らせる福祉のまちづくり」の実現をめざして、行われるさまざまな活動を意味する。本講義ではこれらの活動について学修し、各領域のしくみや関連性について学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 地域福祉活動について理解することができる。 2. 地域福祉活動に関係する様々な職種、関係機関について理解することができる。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	地域包括ケア等による「地域福祉」について	
	2	「地域福祉」に必要な関係機関について	
	3	「地域福祉」における各種計画について	
	4	「地域福祉」における現状と課題	
	5	「地域福祉」における介護保険サービスについて①	
	6	「地域福祉」における介護保険サービスについて②	
	7	「地域福祉」における障害者サービスについて①	
	8	「地域福祉」における障害者サービスについて②	
教 科 書	配布資料		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習は、配布資料を読んでおく。復習は、講義板書ならびに配布資料を参照して、要点をまとめる。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	土佐市第2期地域福祉計画、土佐市第2期障害者計画・第5期障害者福祉計画、土佐市第7期高齢者福祉・介護保険事業計画 等		
成 績 評 価 方 法	筆記試験 (100%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	マンガ概論	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	1年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	村岡 正浩 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	マンガは、視覚情報が多く、場面が容易にわかること、ストーリーがあること、日常場面に多く見られる口語表現を多く含むこと等がある。マンガは世界共通言語ともいわれている。本授業では、マンガが持つ特性といった基礎的な知識について学修し、また、日常生活において用いられている伝達ツールとしてのマンガを紹介し、マンガを用いた場合とそうでない具体例を紹介するなど、マンガの意思を伝達するツールとしての有効性について学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 漫画の役割や表現方法について理解することができる。 2. 漫画的表現や物の見方を身につけ、日常生活の様々な場面で活かすことができる。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	漫画の現状、漫画家の生活、ネタの作り方やこころがけについて	
	2	漫画的アイデアを生かした表現方法について	
	3	様々なジャンルの漫画やアート①	
	4	漫画表現の実技と発表①	
	5	様々なジャンルの漫画やアート②	
	6	漫画表現の実技と発表②	
	7	日常生活の中の漫画表現	
	8	漫画表現の実技と発表③	
	9	漫画的表現やアイデアを用いた映像	
	10	漫画と伝達	
	11	漫画表現の実技と発表④	
	12	漫画と世界のつながり	
	13	漫画と言葉	
	14	ストーリーの組み立て	
15	漫画表現の実技と発表⑤		
教 科 書	特になし		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習は、事前配布資料がある場合は読んでおく。前の時間に課題が出た場合はそれに対応しておく。復習は、講義板書や実技作品を参照に、要点をおさえる。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	特になし		
成 績 評 価 方 法	授業中の実技課題		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	マンガ基礎実習	授 業 形 態	実習	
単 位 数	1	回 数	15回	
履 修 年 次	1年前期	必 修 ・ 選 択	必修	
科 目 担 当 者	関 和也 (兼任)			
授 業 の 概 要 ・ 目 的	マンガが、意思を伝達する有効なツールであることを説明し、コミュニケーション手段としてのマンガ制作を体験する。表現法の基礎的な手法を学び、ストーリー性を持つ場面をマンガで表現し、それらを用い学生同士でコミュニケーションを体験する。			
授 業 の 到 達 目 標	1. ストーリーマンガの構成を理解する。 2. ストーリーマンガの描き方の基礎を学修する。 3. 意思伝達としてのストーリーマンガの作成を体験する。			
授 業 計 画	回	内 容		
	1	意思伝達とマンガ		
	2	ストーリーマンガの構成①		
	3	ストーリーマンガの構成②		
	4	ストーリーマンガの描き方①		
	5	ストーリーマンガの描き方②		
	6	ストーリーマンガの描き方③		
	7	ストーリーマンガの作成 テーマ1	ストーリー構成(プレゼンテーション)	
	8	マンガ作成①		
	9	マンガ作成②		
	10	マンガ作成③		
	11	ストーリーマンガの作成 テーマ2	ストーリー構成(プレゼンテーション)	
	12	マンガ作成①		
	13	マンガ作成②		
	14	マンガ作成③		
15	ストーリーマンガを用いたコミュニケーション(プレゼンテーション)・総括			
教 科 書	必要に応じてプリントを配布			
事前事後の予習復習	ジャンル関係なくたくさんのマンガに触れるのはもちろんのこと、マンガ周辺の情報に敏感でいること。			
履 修 の 条 件	特になし			
参 考 文 献	特になし			
成 績 評 価 方 法	作品提出(構成の理解度15%、描き方の理解度15%、完成度20%)、プレゼンテーション(50%)			
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時(要予約)			

授 業 科 目 名	活字デザイン論	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	1年後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	松井 大洲 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	活字は、文字などが紙に印刷されたもので、本や雑誌などの出版と新聞がその代表である。活字媒体は、人間の思考や世の中の出来事を広く伝達し、長く蓄積する媒体として用いられてきたが、日本では、1970年代に「活字ばなれ」が指摘され、子どもの読書量の減少が問題視されてきた。しかし、今日、活字を様々な形に変化させるデザイン文字が作られ、文字の新たな使用法が注目されている、本講義では、様々なデザイン文字が、広告やポスター等に用いられているかを紹介し、文字の新たな使用方法について学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 文字の美とメッセージ性を学修する。 2. 文字歴史とマーケティングツールとしての役割について学ぶ。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	活字文化におけるデザインとデザイン文字について学ぶ	
	2	文字には歴史と文化が詰まっている<文字と書体について>	
	3	グラフィックデザインは文字からはじまる	
	4	生活の中におけるデザインと文字の役割	
	5	自己紹介から、PR・メッセージツールへ	
	6	カレンダーのデザイン<タマのデザイン>について	
	7	エディトリアルデザイン<雑誌のデザイン>について	
	8	和文・文字について学ぶ	
	9	明朝体とゴシック体について	
	10	欧文書体について学ぶ	
	11	セリフ体とサンセリフ体	
	12	ピクトグラムとサインについて	
	13	ロゴタイプ (和文・欧文)	
	14	文字とポスター	
	15	ダイヤグラム<図表>について	
教 科 書	誰も教えてくれないデザインの基本 (株)エクスマレッジ 細山田デザイン事務所著		
事前事後の予習復習	テキストに目を通しておく		
履 修 の 条 件	色鉛筆(12色)		
参 考 文 献	特になし		
成 績 評 価 方 法	試験 (レポート)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	視覚デザイン概論	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	2年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	大倉 美知子 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	デザインは、新聞、雑誌、絵本など印刷物に始まり、CDジャケットや食料品のパッケージ、テレビコマーシャルにウェブサイト、または街中で見かけるサインボードに至るまで、身近すぎてその存在に気付かない程である。そのように今まで接してきたながら意識して来なかったデザインを改めて眺めることにより、社会の中でのデザインの果たす役割、またはその成り立ち、文字や写真、絵などの形や大きさ、色などを組み合わせることによる表現法について学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 色彩理論を理解することができる。 2. 既存のデザインを通して、表現法を理解することができる。 3. 社会におけるデザインの役割を考察することができる。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	ガイダンス・視覚デザインにおける色彩の役割	
	2	色みの種類 色相環	
	3	色の三属性 トーン	
	4	色の名前 慣用色名	
	5	色の本質 光と色	
	6	色の心理的効果	
	7	色のイメージと効果	
	8	色のしくみ 等色相面	
	9	配色の基本	
	10	配色の応用	
	11	広告デザイン分析	
	12	パッケージデザイン分析	
	13	サインデザイン分析	
	14	視覚デザイン	
15	プレゼンテーションとまとめ		
教 科 書	一般社団法人日本カラーコーディネーター協会著「色彩活用 ライフケアカラー検定公式テキスト3級」 日本工業新聞社 配布資料		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習は、シラバスの確認とテキストを読み、身の回りのデザインを観察しておく。復習は、講義内容を参照して、既存デザイン意図と効果を理解し事例をまとめる。資料をまとめる40ポケットクリアファイル・ルーズリーフ・はさみのりを準備。課題提出は、Teams クラスノートを使用。スマートフォンには、学生課から指示されたアプリのダウンロードが必要。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	内閣府認定 公益社団法人色彩検定協会 編集発行「文部科学省後援 色彩検定公式テキスト」3・2・1・UC級		
成 績 評 価 方 法	Teams 課題による授業への取り組み評価 (80%) と小テスト (20%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	非常勤のため特に設けず		

授 業 科 目 名	カラーコミュニケーション概論	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	2年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	大倉 美知子 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	色の果たす役割は、①心地よさ、②イメージ、③アピール、④区別、⑤見やすさ・見にくさ、⑥統一感、⑦象徴など、があるとされており、文字や記号、形、絵やマンガ、また、背景等様々な場面で使用され、多くの情報を提供している。本講義では、色に関する基礎的な知識について学んだ上で、色が、身近な生活の中でどのように意思を伝達するツールとして使用されているのか学び、実際に、色を用いることにより、他者にその意味が伝わるのかといった体験を行い、色が意思伝達の重要なツールであることの理解を深める。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 非言語である色彩の潜在的意味を理解することができる。 2. 非言語である色彩から、他者の心理や状態を察することができる。 3. 非言語である色彩を使って、意志伝達をすることができる。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	ガイダンス・自己が発信する色彩想像	
	2	他者が発信する色彩受容①	
	3	他者が発信する色彩受容②	
	4	他者が受容した色彩による自己の客観視	
	5	理想自己の色彩表現	
	6	心理の色彩表現①	
	7	心理の色彩表現②	
	8	イメージの色彩表現①	
	9	イメージの色彩表現②	
	10	他者の色彩表現①	
	11	他者の色彩表現②	
	12	自己紹介カード作成	
	13	自己紹介カード使用	
	14	自己紹介カード確認	
15	プレゼンテーションとまとめ		
教 科 書	配布資料 教材；日本色研事業株式会社発行「新配色カード199b」		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習は、シラバスの確認をして考察しておく。復習は、講義内容を参照してまとめ、色彩に対する感受性を高める。はさみ・のりを持参。課題提出はTeamsを使用。スマートフォンに、学生課から指示されたアプリのダウンロードが必要。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	一般社団法人日本カラーコーディネーター協会著「色彩活用 ライフケアカラー検定公式テキスト3級」 日本工業新聞社		
成 績 評 価 方 法	Teams 提出課題 (100%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	非常勤のため特に設けず		

授 業 科 目 名	視覚伝達デザイン論	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	2年後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	大倉 美知子 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	視覚伝達デザインの意義、領域、機能等について学修する。構成と文字と色彩、写真やイラストなどの表現技術、様々なメディアと文化的背景、視知覚に関する知識などピクトグラムを中心とした視覚伝達デザイン全般について幅広く概説する。具体的事例を通して、社会との関連を考察しながら、視覚伝達デザイン全般にわたって理解を深める。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 多様な色覚について理解することができる。 2. 誰にでも正しく伝わるデザインについて理解することができる。 3. 視覚伝達デザインと社会との関連を考察することができる。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	ガイダンス・視覚伝達デザイン解説	
	2	多様な色覚	
	3	超高齢社会における視覚伝達デザイン	
	4	100色相配列検査器を使った実態調査①	
	5	100色相配列検査器を使った実態調査②	
	6	100色相配列検査器を使った調査分析①	
	7	100色相配列検査器を使った調査分析②	
	8	100色相配列検査器を使った調査結果とまとめ	
	9	表色系	
	10	配色イメージ	
	11	ビジュアルデザイン	
	12	ピクトグラム	
	13	フォント	
	14	メディアデザイン	
15	ユニバーサルデザイン		
教 科 書	内閣府認定 公益社団法人色彩検定協会 編集発行「文部科学省後援 色彩検定公式テキスト2級編」		
事 前 事 後 の 予 習 復 習	予習は、シラバスの確認とテキストならびに配布資料を読んでおく。復習は、講義内容を参照して、要点をまとめる。Teams クラスノートにて、予習復習課題を提出。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	(一財)日本色彩研究所・横浜国立大学 岡嶋克典著「文部科学省後援 色彩検定 公式テキスト UC級」 株式会社グラフィック社発行・内閣府認定 公益社団法人色彩検定協会 編集発行「文部科学省後援 色彩検定公式テキスト」3・1級・配布資料		
成 績 評 価 方 法	授業への取り組み評価 (80%) と小テスト (20%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	非常勤のため特に設けず		

授 業 科 目 名	情報メディア学入門	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	2年後期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	竹下 誠一 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	身の回りにはインターネット上の映像、音楽、地図情報、文字情報、ニュース記事から広告、そしてレビュー情報などがあふれている。さらには、テレビ放送、ラジオ放送、印刷物としての新聞から本、雑誌、DVDなども常に身近にある。街には多くの看板から電子掲示板などが目につく。それらを広くメディアと呼ぶが、本講義では、それらメディアがどのようなコンテンツであるのか、そしてそれらのコンテンツがどのようにしてユーザーに届けられているのかを体系的に学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・メディアの現状を理解し、その情報を読み解くリテラシー力を高める。</li> <li>・メディアの情報伝達・発信力を学び、正しい情報入手法を培う。</li> <li>・メディアの表現から言語聴覚士としてのコミュニケーション力を養う。</li> </ul>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	メディアの現状① メディアの利用状況	
	2	メディアの現状② マスメディアの歴史	
	3	メディアの発信力① ソーシャルメディア	
	4	メディアの発信力② テレビ視聴率 演習	
	5	メディアの発信力③ CMと放送局の収入	
	6	メディアリテラシー① ニュース番組の伝達と表現	
	7	メディアリテラシー② 情報番組の伝達と表現 演習	
	8	メディアの役割① 災害報道	
	9	メディアの役割② 災害報道の体制 演習	
	10	メディアの役割③ メディアと行政、政治 演習	
	11	メディアの表現① テレビ番組の評価 小論文	
	12	メディアの表現② 放送倫理とBPO	
	13	メディアの表現③ 放送、新聞、ソーシャルメディア 演習	
	14	メディアとコンテンツビジネス	
	15	メディアの法規制とコミュニケーション	
教 科 書	授業で配布する資料		
事前事後の予習復習	(予習) テレビや新聞を見る機会を増やし、その発信力や表現に関心を持つ (復習) 授業で配布する資料を見直しておく		
履 修 の 条 件	テレビ番組やDVD、MP4 動画の視聴環境があること (PC 可)		
参 考 文 献	日本のメディア (NHK ブックス) メディアリテラシー (実教出版) メディア・コミュニケーション論 (コロナ社)		
成 績 評 価 方 法	小論文・レポート (30%) 期末試験 (55%) 授業態度 (15%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業後の教室		

授業科目名	広告論	授業形態	講義
単位数	2	回数	15回
履修年次	3年前期	必修・選択	必修
科目担当者	田中 拓生 (兼任)		
授業の概要・目的	<p>企業と消費者との接点は、購入前、購入時、使用時、使用後など多くの局面があり、企業は「ブランド・コンタクト」という視点からコミュニケーションを考え、情報提供を行っている。その理由は、単に良い製品を魅力的な価格で、どこでも容易に入手できるようにしても、その存在が消費者に認知されなければ購買には至らないからである。企業にとって必要なのはコミュニケーションすべきかどうかではなく、誰に、何を、どの程度伝えるのかというコミュニケーション活動の戦略的デザインである。</p> <p>本講義では、コミュニケーション活動の中でも大きな比重を占める広告を取り上げ、企業のマーケティング・コミュニケーション活動への理解を深めることを目的とする。</p>		
授業の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. マーケティングにおける広告の役割を理解し、説明できる。</li> <li>2. 広告が誰に対して、何を訴求しているのか、意図を理解できる。</li> <li>3. 広告ビジネスの構造や、それに関わる企業の役割について理解し、説明できる。</li> <li>4. ブランドの価値、これからのブランドのあり方を考える。</li> <li>5. 課題に対して、多方面から考え、話し合い、解決策を導く力を養う。</li> </ol>		
授業計画	回	内 容	
	1	授業全般に関するオリエンテーション、授業計画の説明	
	2	広告の定義 (広告の機能・広告と宣伝)、日本の広告マーケット	
	3	広告ビジネス (広告ビジネスの流れ、広告代理店の機能)	
	4	マーケティングと広告 (マーケティングにおける広告の役割)	
	5	広告マネジメント (広告戦略、広告計画と目的、広告制作のプロセス)	
	6	メディアプランニング① (マスコミ4媒体の特性、展開)	
	7	メディアプランニング② (インターネット広告の特性、展開)	
	8	イベント事業、その他媒体 (イベント実施の目的、OOH・交通広告など)	
	9	ブランドと広告 (ブランドエクイティ、ブランド戦略)	
	10	【実習①】企画作成 (グループ分け～オリエンテーション～プレスト)	
	11	【実習②】企画作成 (コンセプトワーク～目標設定～媒体計画)	
	12	【実習③】企画作成 (予算計画～企画書まとめ)	
	13	【実習④】プレゼンテーション (企画発表_1)	
	14	【実習⑤】プレゼンテーション (企画発表_2)	
15	広告のこれから (社会における、広告の可能性の考察)		
教科書	本授業では教科書・参考書とも特に必要としないが、適宜プリントを配布する。		
事前事後の予習復習	新聞やテレビのニュースを観て、社会で何が起きているか読み解く力を養う。テレビや雑誌、インターネット上の広告に注意を払い、誰がどんな目的で発信している情報であるかを考える。		
履修の条件	特になし		
参考文献	<p>岸志津江・田中洋・嶋村和恵 著『現代広告論【第3版】』/有斐閣アルマ  石崎徹 著『わかりやすい広告論【第2版】』/八千代出版  フィリップ・コトラー+ケビン・レーン・ケラー 著『コトラー&amp;ケラーのマーケティング・マネジメント』/丸善出版  博報堂DYメディアパートナーズ 著『メディアガイド2021』/宣伝会議  安藤真澄『広告コミュニケーションの本質とは何か：「広告社会学」の試み』/ミネルヴァ書房  他</p>		
成績評価方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業内実習の企画の完成度とプレゼンテーション等を総合評価 (40%)</li> <li>・期末レポート提出 (60%)</li> </ul>		
オフィスアワー	授業終了後メモにて提出し、次回の授業で報告 その他、メールで随時受付		

授 業 科 目 名	企業広報活動論	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	3年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	竹下 誠一（兼任）		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	スーパーマーケットや旅行会社等で実際に行われている宣伝活動について、その現状を知る。その中で、広告やチラシなどが、どのような目的で、どのような過程を経て制作されるのかについて知り、その効果や問題、今後の課題について学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 企業や団体の広報・宣伝活動から情報の収集力と判断力を養う。</li> <li>・ チラシやポスター、動画などの広報ツールから表現力や伝達力を身につける。</li> <li>・ 広報や広告の制作手法を学び、プレゼンテーション力を高める。</li> </ul>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	企業広報の歴史	
	2	企業広報の現状①広報と広告、宣伝	
	3	企業広報の現状②ポスターデザイン	
	4	企業広報の現状③電波メディア	
	5	企業広報の現状④屋外広告	
	6	企業広報の現状⑤キャラクターデザイン	
	7	企業広報の現状⑥プランディング	
	8	広報活動の事例①販売チラシ	
	9	広報活動の事例②看板とポスター	
	10	広報活動の事例③デジタルサイネージ	
	11	イベントの広報①チラシ・ポスターのデザイン効果	
	12	イベントの広報②企画展のチラシと広報	
	13	プレゼンテーション① チラシ・ポスターの制作演習	
	14	プレゼンテーション② 店内POPの効果	
	15	企業広報の変化	
教 科 書	授業で配布する資料		
事前事後の予習復習	(予習) 事前に課題として出したチラシ等広報ツールをリサーチしておく (復習) 授業資料の確認		
履 修 の 条 件			
参 考 文 献			
成 績 評 価 方 法	授業内小論文・演習 (25%) 期末試験 (60%) 授業態度 (15%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業終了後教室内		

授 業 科 目 名	広告デザイン論	授 業 形 態	講義
単 位 数	2	回 数	15回
履 修 年 次	3年前期	必 修 ・ 選 択	必修
科 目 担 当 者	吉岡 一洋 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	<p>広告は、生産者が消費者に向けて、商品やサービスに関する情報を広く提示する情報伝達手段の一つである。商業広告がマス・コミュニケーションの手法を獲得し、さらに将来の需要を喚起する目的を持ち始めると、広告主の利益のみならず、消費者の利益のためにあるという広告の観念が進化してきた。本講義では、マーケティングの基礎的理解とその中の広告のしくみ、歴史的あるいは今日の広告媒体を含めて学修する。</p>		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. デザインが生活・環境・社会といかに関係しているのかを理解し、説明できる。</li> <li>2. 着想やアイデアを様々な手法・技術により定着することができる。</li> <li>3. グラフィックデザインの技術を活用して、展覧会やイベントの広報を實踐できる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	授業全般に関するオリエンテーション、課題の趣旨説明、様々なデザイン領域について	
	2	一本線による分割 (課題制作)、3つの異なる円による構成 (課題制作)、作品発表・プレゼンテーション	
	3	線による分割 (課題制作)、作品発表・プレゼンテーション	
	4	2面による分割 (課題制作)、作品発表・プレゼンテーション	
	5	面による分割 (課題制作)、作品発表・プレゼンテーション	
	6	感情表現 (課題制作)、作品発表・プレゼンテーション	
	7	イメージ化 (課題制作)、作品発表・プレゼンテーション	
	8	ビジュアル表現① (課題制作)、作品発表・プレゼンテーション	
	9	ビジュアル表現② (課題制作)、作品発表・プレゼンテーション	
	10	ビジュアル表現③ (課題制作)、作品発表・プレゼンテーション	
	11	ビジュアル表現④ (課題制作)、作品発表・プレゼンテーション	
	12	バウハウスやグラフィックデザインの変遷に関する研究をする。 作品発表・プレゼンテーション	
	13	デザインのコンセプトとは何かについて議論する。日本の工芸、プロダクトデザインについて紹介を行い、日本文化の特質をとらえる。 プレゼンテーション	
	14	タイポグラフィ、文字意匠について議論する。日本語の「漢字」「ひらがな」「カタカナ」「アルファベット」と4つの異なるタイプフェイス (タイポグラフィ) を踏まえ、欧文のローマン体、セリフ体なども合わせて理解する。プレゼンテーション	
15	日本、海外におけるデザイン系・アート系のイベント情報、公募展情報を調査し、まとめる。例えば瀬戸内国際芸術祭、土佐天空の芸術祭 (田んぼアート)、赤岡絵盆、等々について地域の芸術を紹介しながら、更に情報収集、調査、グループディスカッションを行う。プレゼンテーション		
教 科 書	本授業では教科書・参考書とも特に必要としないが、必要が生じた場合には授業中に指示する。		
事前事後の予習復習	授業時間以外に制作の時間を要する。		
履 修 の 条 件	デザイン・アート表現に関して意欲があること		
参 考 文 献	<p>原研哉『デザインのデザイン』岩波書店、2003年  原研哉『白百』中央公論新社、2018年  前田育男『デザインが日本を変える』光文社新書、2018年  青葉益輝他『Basic Design 平面・色彩・立体構成』六耀社、2001年</p>		
成 績 評 価 方 法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・出席状況を重視する。(60%)</li> <li>・制作態度及び積極的、意欲的表現を重視する (20%)</li> <li>・作品の完成度と作品プレゼンテーション等を総合評価し加点する。(20%)</li> <li>・尚期末試験等は行わない。</li> </ul>		
オ フ ィ ス ア ワ ー	随時 (要予約)		

授 業 科 目 名	言語聴覚療法地域支援実習	授 業 形 態	実習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	4年後期	必 修 ・ 選 択	必修
担 当 教 員 名	武内 和弘、石川 裕治、稲田 勤、吉村知佐子、光内 梨佐、櫻木 理恵		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	地域コミュニティは、人間性を回復して、自律型の地域社会をつくる基盤であり、地域包括ケアシステムにおいて、この地域コミュニティは重要な位置づけとなっている。高齢者や障害者・障害児が住み慣れた地域で望む生活ができるように援助するためには、地域社会の状況を知ることが基本である。様々な地域に向いて住民との交流を行うとともに、支援サービスの実際について見学し、地域連携に繋がる基本的知識を学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 地域住民と交流することができる。</li> <li>2. 地域における支援サービスの実際を知ることができる。</li> <li>3. 地域連携について理解することができる。</li> </ol>		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	授業ガイダンス、地域支援事業などの概要	
	2	地域における支援サービスに関する調査① 準備	
	3	地域における支援サービスに関する調査② 準備	
	4	支援サービス体験 1	
	5	支援サービス体験 2	
	6	支援サービス体験 3	
	7	支援サービス体験 4	
	8	支援サービス体験 5	
	9	支援サービス体験 6	
	10	支援サービス体験 7	
	11	支援サービス体験 8	
	12	調査・体験のまとめ 1	
	13	調査・体験のまとめ 2	
	14	発表 1	
15	発表 2		
教 科 書	配付資料		
事前事後の予習復習	予習は、シラバスの確認と配付資料を読んでおく。復習は、配付資料と実習内容を振り返り、要点をまとめる。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	3年前期までの支援サービスに関する授業科目のテキスト・配付資料など		
成 績 評 価 方 法	授業態度（各授業後の実施記録）、調査計画、プレゼンテーションにより総合的に判断する。		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業1回目のガイダンスで説明する。		

授業科目名	応用言語聴覚学演習	授業形態	演習
単位数	2	回数	30回
履修年次	4年後期	必修・選択	必修
担当教員名	武内 和弘、石川 裕治、稲田 勤、吉村知佐子、光内 梨佐		
授業の概要・目的	将来言語聴覚士になる者として、必要な知識について総合的に学修する。医学分野、言語聴覚療法専門分野について、用語やその意味を確実なものとし、言語聴覚療法実践においてどのような場面で必要となるのかなどについて、教員の指導のもと、グループ形式をとり学修する。単なるシェア学習に留まらず、活発な意見交換や効率の向上を目指す。		
授業の到達目標	1. 言語聴覚療法に必要な知識が理解できる。 2. 知識がどのような臨床場面で必要であるのか理解できる。 3. 必要な知識を他者に説明できる。		
授業計画	回	内 容	
	1	小児言語障害① 言語発達障害	
	2	小児言語障害② 言語発達障害	
	3	小児言語障害③ 言語発達障害	
	4	聴覚障害① 聴覚医学総論	
	5	聴覚障害② 聴覚医学総論	
	6	聴覚障害③ 小児聴覚障害	
	7	聴覚障害④ 小児聴覚障害	
	8	聴覚障害⑤ 小児聴覚障害	
	9	聴覚障害⑥ 成人聴覚障害	
	10	聴覚障害⑦ 成人聴覚障害	
	11	聴覚障害⑧ 補聴器	
	12	聴覚障害⑨ 補聴器	
	13	聴覚障害⑩ 人工内耳	
	14	聴覚障害⑪ 人工内耳	
	15	発声発語障害① 小児構音障害	
	16	発声発語障害② 小児構音障害	
	17	発声発語障害③ 吃音	
	18	発声発語障害④ 成人構音障害	
	19	発声発語障害⑤ 成人構音障害	
	20	発声発語障害⑥ 音声障害	
	21	発声発語障害⑦ 嚥下障害	
	22	発声発語障害⑧ 嚥下障害	
	23	成人言語障害① 失語症	
	24	成人言語障害② 失語症	
	25	成人言語障害③ 失語症	
	26	成人言語障害④ 失語症	
	27	成人言語障害⑤ 高次脳機能障害	
	28	成人言語障害⑥ 高次脳機能障害	
	29	成人言語障害⑦ 高次脳機能障害	
30	成人言語障害⑧ 高次脳機能障害		
教科書	廣瀬肇 『言語聴覚士テキスト』 医歯薬出版 日本高次脳機能障害学会著 標準失語症検査マニュアル 新興医学出版社 配付資料		
事前事後の予習復習	予習として、シラバスの確認とこれまで学修した各科目の資料の整理を行い。復習は、学修した内容を整理すること。		
履修の条件	特になし		
参考文献	特になし		
成績評価方法	定期試験（100%）		
オフィスアワー	授業1回目のガイダンスで説明する。		

授 業 科 目 名	言語聴覚療法総合演習 I	授 業 形 態	演習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	4年後期	必 修 ・ 選 択	選択
担 当 教 員 名	稲田 勤		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	将来言語聴覚士になる者として、発達障害児に対する学習・就労支援は言語聴覚療法の必要不可欠な援助内容である。言語聴覚学の集大成として、発達障害、言語聴覚療法、聴覚障害などの援助における言語聴覚士の役割について学修する。キャリア教育の一環として、実際に地域の小児領域の施設見学や障碍児との関わりを通して、言語聴覚士に必要な知識と技術について事例を通して学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 小児言語聴覚療法の現状について理解できる。 2. 小児言語聴覚療法に必要な基本的な知識・技術が理解できる。 3. 小児言語聴覚療法領域へ就職する際の心構えができる。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	小児言語聴覚療法の現状	
	2	小児言語聴覚療法の実施施設の調査	
	3	小児言語聴覚療法の実際①（職業観）	
	4	小児言語聴覚療法の実際②（仕事に取り組む姿勢や態度）	
	5	小児言語聴覚療法の実際③（必要な能力）	
	6	事例検討 調査①	
	7	事例検討 グループ討議①	
	8	事例検討 グループ討議②	
	9	事例検討 グループ討議③	
	10	事例検討 レジюме作成	
	11	事例検討 グループ討議⑤	
	12	事例検討 グループ討議⑥	
	13	事例検討 グループ討議⑦	
	14	事例検討 レジюме作成	
15	事例検討 発表		
教 科 書	配布資料		
事前事後の予習復習	予習として、シラバスの確認とこれまで学修した小児分野の科目の資料の整理を行い。復習は、学修した内容を整理すること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	特になし		
成 績 評 価 方 法	レポート（100%）		
オ フィ ス ア ワ ー	授業1回目のガイダンスで説明する。		

授 業 科 目 名	言語聴覚療法総合演習Ⅱ	授 業 形 態	演習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	4年後期	必 修 ・ 選 択	選択
担 当 教 員 名	池 聡 (兼任)		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	将来言語聴覚士になる者として、失語症を含む高次脳機能障害、構音障害、音声障害、摂食・嚥下障害のある方々に対する社会復帰に向けた支援は言語聴覚療法の必要不可欠な援助内容である。言語聴覚学の集大成として、コミュニケーション障害、食べる機能の障害などの援助における言語聴覚士の役割について学修する。キャリア教育の一環として、実際に地域の医療施設の見学や利用者との関わりを通して、言語聴覚士に必要な知識と技術について事例を通して学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 成人言語聴覚療法の現状について理解できる。 2. 成人言語聴覚療法に必要な基本的な知識・技術が理解できる。 3. 成人言語聴覚療法領域へ就職する際の心構えができる。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	成人言語聴覚療法の現状	
	2	成人言語聴覚療法の実施施設の調査	
	3	成人言語聴覚療法の実際① (職業観)	
	4	成人言語聴覚療法の実際② (仕事に取り組む姿勢や態度)	
	5	成人言語聴覚療法の実際③ (必要な能力)	
	6	事例検討 調査①	
	7	事例検討 グループ討議①	
	8	事例検討 グループ討議②	
	9	事例検討 グループ討議③	
	10	事例検討 レジюме作成	
	11	事例検討 グループ討議⑤	
	12	事例検討 グループ討議⑥	
	13	事例検討 グループ討議⑦	
	14	事例検討 レジюме作成	
15	事例検討 発表		
教 科 書	配布資料		
事前事後の予習復習	予習として、シラバスの確認とこれまで学修した各科目の資料の整理を行い。復習は、学修した内容を整理すること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	特になし		
成 績 評 価 方 法	レポート (100%)		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業1回目のガイダンスで説明する。		

授 業 科 目 名	言語聴覚療法総合演習Ⅲ	授 業 形 態	演習
単 位 数	1	回 数	15回
履 修 年 次	4年後期	必 修 ・ 選 択	選択
担 当 教 員 名	吉村知佐子		
授 業 の 概 要 ・ 目 的	将来言語聴覚士になる者として、高齢者が抱える認知症を中心とした障害のある方々に対し、家庭・社会復帰に向けた支援は言語聴覚療法の必要不可欠な援助内容である。言語聴覚学の集大成として、高齢者に多い、言語聴覚障害、認知症、摂食・嚥下障害への援助における言語聴覚士の役割について学修する。キャリア教育の一環として、実際に地域の高齢者施設の見学や利用者との関わりを通して、言語聴覚士に必要な知識と技術について事例を通して学修する。		
授 業 の 到 達 目 標	1. 高齢者言語聴覚療法の現状について理解できる。 2. 高齢者言語聴覚療法に必要な基本的な知識・技術が理解できる。 3. 高齢者言語聴覚療法領域へ就職する際の心構えができる。		
授 業 計 画	回	内 容	
	1	高齢者言語聴覚療法の現状	
	2	高齢者言語聴覚療法の実施施設の調査	
	3	高齢者言語聴覚療法の実際①（職業観）	
	4	高齢者言語聴覚療法の実際②（仕事に取り組む姿勢や態度）	
	5	高齢者言語聴覚療法の実際③（必要な能力）	
	6	事例検討 調査①	
	7	事例検討 グループ討議①	
	8	事例検討 グループ討議②	
	9	事例検討 グループ討議③	
	10	事例検討 レジュメ作成	
	11	事例検討 グループ討議⑤	
	12	事例検討 グループ討議⑥	
	13	事例検討 グループ討議⑦	
	14	事例検討 レジュメ作成	
15	事例検討 発表		
教 科 書	配布資料		
事前事後の予習復習	予習として、シラバスの確認とこれまで学修した各科目の資料の整理を行い、復習は、学修した内容を整理すること。		
履 修 の 条 件	特になし		
参 考 文 献	特になし		
成 績 評 価 方 法	レポート（100%）		
オ フ ィ ス ア ワ ー	授業1回目のガイダンスで説明する。		